
未来のキミを救いたい 鷹野信也編

水鏡樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

未来のキミを救いたい 鷹野信也編

【Nコード】

N5026B

【作者名】

水鏡樹

【あらすじ】

鷹野信也はいたって普通の高校生だった。何気ない日々をすごしていた信也は、骨折で入院した最愛の女性 山倉優美という女性をお見舞いに行く。そこで信也は、本音を出せない優美の苦しみに気づく。優美を支えると約束し、信也はめでたく優美と付き合うこととなる。だが、幸せはそう長くは続かなかった。

プロローグ（１）（前書き）

このたびは数ある小説の中から『未来の君を救いたい』を選んでいただき、ありがとうございます。

この小説は『鷹野信也編』『ミリア＝ミリス編』の二通りがあります。同じ時間帯を信也の視点、ミリアの視点からといった、Ａ面Ｂ面型の小説となっています（プロローグ、エピソードは除きます）

どちらから読んでもらっても、かまいません。片方だけ読んでは、話の全貌が見えませんので、もう片方を読んだときに新たな発見、驚きがあると思います。

また、二つを同時に読んでいくのもいいと思います。ただ、話は分かりやすくなりますが、その分発見や驚きは、納得といった感覚になると思います。

かなり長い話になりますが、最後までお付き合いしていただければ幸いです。感想などありましたら、ぜひお聞かせください。

プロローグ(1)

書き終えた一通の手紙　それは僕に与えられた特権であり、大切なつながりだった。

室内の蛍光灯と朝日の光が溶けあつて同一化した頃、僕はおもむろにペンを置いた。

その特権を僕に与えた人物以外、事実を知るものはいない　いや、一人だけ知っている人物がいる。

ここへ来る以前からお世話になり、いまでは同僚でもあるミリア「ミリスだ。」

なぜミリアだけが知っているのか　その答えは、ミリアがこの特権に大きくかわつてくる人物だからだ。

「信也君、いる？」

玄関から聞こえてくる声に反応して、僕は立ち上がった。

部屋の中は殺伐としており、いままで座っていた木製の机を除けば、家具はテレビとビデオ、ベッドしかない。

それもすべて白や黒を基調とした、地味な色合いのものばかりだ。

「いるよ、どうぞ」

机の上の手紙を拾い上げながら、声をかける。すると、きしんだ音をたてながら、玄関の扉がゆっくりと開きだした。

わずかに開いた隙間からひょいっと顔を覗かせたのは、どんぐり眼で藍色のウエーブがかつた短髪の女の子だった。彼女がミリア「ミリスだ。」

その容貌は初めて会った三年前から、まったく変わっていない。

「誰もいないよね？」

「もちろん」

室内を確認してから、ミリアが中へと入ってきた。首から足首までを覆った純白のローブを着こなしている。

ただ、ミリアのローブはお茶でもこぼしたのか、すその辺りに少し

しみができていた。

右腕についた緑色の腕章が、白いローブと相成って執拗に目立っている。

これが今のミリアの格好であり、僕達の仕事場の制服だった。

以前からミリアはこの制服をダサイと嘆いているが、僕は結構気に入っている。

ただ、今日の僕は制服を着用していない。

なぜなら今日は非番で、着替える必要がないからだ。

「もうできてる？」

「ちょうどいま、書いたところさ」

僕は手紙を渡すと、ミリアは何度も頷きながらポケットへと手紙を入れた。

「うんうん、確かに預かりました」

「今年も頼むよ」

手紙の入ったポケットを叩き、自慢げに鼻を鳴らす。

本来なら、この手紙を届ける仕事は、ミリアにとって年に一度の大役のはずだ。

それでもミリアは毎年緊張したようす一つ見せず、すこぶる機嫌がいい。

「相変わらず機嫌がいいね」

「フフツ、分かる？」

「僕にとっては大事な日だけど、ミリアにはめんどくさいだけじゃないのか？」

「実はそうでもないんだよねえ……」

腰に両手をあて、含み笑いを発するミリアに、唇をひきつらせる。

僕はくるりときびすを返すと、日光の注ぐ窓を全開にした。

目の前に広がるのは青空と住宅街、それに季節の変わり目で紅葉になりつつある多種多様な木々だ。

「あれから、もう三年もたつんだね」

そばまで寄ってきたミリアが、微笑み混じりに話しかけてくる。

僕は少し冷たい風に体をさらしながら、小さく相槌を打った。

「それじゃあ、仕事が終わったら行ってくるわね。なにか伝えたいことはある？」

ミリアに尋ねられて、少し考え込んだ。

口をへの字に曲げてしばらくたち、ミリアが笑う光景を予測しながら答える。

「この間さ、大学病院で見かけたって話しただろ？」

「ああ、すっごい喜んでたよね、信也君」

「あの時のことを伝えといてくれないかな？ その、かわいくなつてたって……」

本来なら直接伝えたいところだが、僕にはその手段がない。ミリアから目をそらしながら伝言を頼むと、予想通りミリアは笑い出していた。それも腹を抱えてだ。

「そ、そこまで笑わなくてもいいだろ！」

「いやいや、さすがプレイボーイの信也君だね！ ごちそうさまです！」

「う、うるさい！」

ベッドの上に転がっていたクッションを投げつけるも、ひらりとミリアはかわしてみせた。そのまま慌てて僕の元から離れていく。

「ちゃんと伝えておくからね。安心してよ信也君」

「さっさと仕事に行け！」

二個目のクッションを握った時点で、ミリアは僕の家から飛び出していった。去り際の笑い声だけがしばらく耳に残る。

開きつばなしの扉を閉めて、ベッドへと腰掛ける。頭の中に背中までのつややかな黒髪と切れ長の目、スラッとした鼻に潤いを帯びた唇の、最愛の女性の顔が思い浮かぶ。

山倉優美　それが彼女の名前だ。高校で同じ学び舎になった僕たちは、二年生で初めて同じクラスになった。

シルクのような純白の肌に身を包み、優しさと慈しみを合わせ持った　まるで女神のような女性だった。

だからといって、物静かなわけではなく、クラスを引っ張っていくムードメーカー的な存在も担っていた。

活発で、考えをハッキリ言える　それが出会った頃の山倉に対するイメージだ。

そんな山倉の太陽を思わせる笑顔や、苦しみを包み込み、安らぎを与える慈母の心に引かれる生徒　僕にとってはライバル　は多かったようだ。

うつすらと濡れたピンク色の唇、光沢が滝のように流れる黒髪。だが、山倉がだれかと付き合っているという話は聞かなかった。

山倉と僕が急速に仲良くなったのは、山倉が階段から転げ落ちて、骨折してしまった事件が原因だった。

教室で弁当を食べていた僕の元へ、トイレに行っていた親友の三村が全速力で駆けつけてくる。

山倉が階段から落ちたという話を聞いた僕は、急いでその場所へと向かった。人だかりができている踊り場の中央で、山倉が顔をしかめているのが目に入ってくる。

青い顔で耐え忍ぶ苦痛の表情は、いま思い出しても胸が苦しくなる。気がつくと、僕は野次馬根性丸出しの生徒をかきわけて、山倉を抱えていた。

一目散に保健室へと運ぶと、保険医の先生が骨折しているとの判断と共に救急車を呼んだのだ。

翌日登校した僕は、そのまま山倉が入院したという話を三村から聞く。それがすべての始まりだった。

「三年……か」

ぼやきつつ、ギョツと手を握り締める。この手が山倉に触れることは当たらないだろう。また、それが僕の望みでもあった

プロローグ(2)

しんみりとした部屋の雰囲気、自分の気配を交わらせて一体化させる。ふわりと浮かんだような感覚に包まれ、ふいに襲ってくる眠気にうとうとしかけた瞬間だった。

「信也君！」

豪快にあげられた玄関の扉は壁へとぶつかり、爆音を響かせる。一気に眠気が飛び散った僕はパツと目を全開にしながら、わたわたとのけぞってベッドの上へと倒れてしまった。

「な、なんだよミリア……」

玄関で頭を掻きながら、悪気もなしに微笑んでみせるミリア。ポケットからなにやら取り出すと、それを僕に差し出してきた。

それは一本の青いビデオテープだった。背表紙には『鷹野信也十七歳』とかかかれているだけで、内容についてはなにも触れられていない。

「なんのテープだ、これ」

「あの一週間が収められたテープだよ。それよりちよつと前の話も入ってるらしいけど、久しぶりに見たら面白いんじゃないかって」

「あの一週間のテープ？ そんなものがあつたのか……」

驚き目を丸くしている僕に、なぜかミリアが自慢げに胸を張っている。別にミリアが録画、編集したものではないだろうに……。

「じゃあ、ここに来るきっかけも入ってるってことだよな？」

「まあ、そうだろうねえ」

「……それって面白いのか？ まあ懐かしいかもしれないけど」

手の上でビデオテープを弄んでいると、ミリアが僕の肩をポンと叩いた。

「いまだから落ち着いて見られるっていうのもあるんじゃない？」

「まあ、確かに……」

「わたしも一緒に見たいんだけどね。仕事がなかったら……あっ！」

突然声を上げて、慌てて玄関へと走り出すミリア。後ろ手で僕に手を振りながら、

「あんまり遅くなるとテラに怒られちゃう！ それじゃあね信也君！」

そのままこちらが声をかける間もなく飛び出していく。またもや玄関の扉は開けっ放しのままだ。

「まったく、そそっかしいのも昔から変わってないよな……」

玄関の扉を閉めて、再びベッドへと腰を下ろす。手に握られたビデオテープをまじまじと見つめた後、小さくうめき声を漏らしていた。

「確かに今日は非番で、特に予定があるわけでもない……」

ビデオテープに引っ張られるようにデッキにいれ、再生ボタンを押す。最初は砂嵐が流れたテレビから、意味のある映像が流れ出した。

階段から落ちた山倉を、必死に保健室へと運んでいく僕と、保健室の先生が山倉の様態を確認し、救急車で山倉が病院へ運ばれていく姿が映し出される。あの時の映像が、ありのまま映し出されていた。

机と一対になっていた椅子をテレビの見やすい位置へと移動させると、腰を下ろしてテレビへと集中する。胸のうちはすでに、三年前の自分だった。

10月24日(1)

十月二十四日 金曜日

男女共に紺色の制服を着ているせいか、教室内のほとんどが紺色と化していた。

男子は灰色一色のズボン、女子は赤と黒のチェックのスカート。生徒間で不平の集まっている制服だ。

朝礼の直後、本来なら生徒は、一時間目の準備をしなければならぬ時間帯である。

だが、そんな作業に追われる生徒は一人もいない。少なくとも僕たち二年四組のクラス内には。

人気ドラマの話題、ゲームの情報交換。豊富な話題に花を咲かせている。

普段なら僕もその話に参戦するのだが、今日だけは勝手が違っていた。

校内でのゴシップ集めを得意とし、ニュースキャスターとの異名を持つ親友 三村光輝のもとへと向かったのだ。

「山倉、大丈夫なのか？」

「ああ、なんでもその後入院したらしいぞ」

「入院って……そんなにひどかったのか？ どの病院に入院してるんだよ！」

まるでお前のせいだと言わんばかりに、僕は光輝の襟首をつかんでいた。顔をわずかにゆがませながら、光輝は僕の手を振り払う。

「おいおい、落ち着けて。心配しなくても大丈夫さ。病院は吉沢総合病院だし、命に別状があるわけじゃない。右足の骨折だけさ」

「そっか……」

安堵の息が、僕の口から自然と漏れる。吉沢総合病院とは、同級生の吉沢果歩の両親が経営している病院で、部活動なので大怪我をした生徒が運ばれる病院だ。腕も確かなようだし、これで少しは安

心できる。

僕が黙々とうなずいてみせると、光輝はあきれたように鼻を鳴らし、僕の肩に手を回してグイッと引き寄せてきた。

そして、耳元で三村の声が鳴る。

「なあ、お見舞いに行くつもりだろ？」

「はっ？」

思わず怪訝な顔つきになった僕を三村は、意味不明な笑顔と共に背中を手を弾ませる。

「わかってるって。皆まで言うなよ」

「いや、皆まで言うとかじゃなくてさ」

「心配するなって。おれに任せとけばすべてうまくいくさ」

「三村、落ち着けて」

だが、どうやら落ち着いていなかったのは三村だけではなかったようだ。

「授業が始まってるのに、いい度胸だな？ 三村に鷹野」

がっちりつかんだ両手に力が込められ、骨のきしむ嫌な音を発する。

苦痛で顔をゆがめる僕らに、笑顔を送ってきたのは、国語の教師である権田原先生だった。どうやら授業開始のチャイムを聞き逃したらしい。

白いＴシャツにジャージという、教師だからこそ許されるゆるい格好は、いつもとなんら変わらない姿だ。

あだ名は消防訓練 略して消訓だ。なぜそんなあだ名がついたかというと……。

「たるんどる。二人ともバケツを持って廊下に立ってる！」

これだ。いまだきバケツに水を入れて持つ罰なんて、漫画の中ですらみかけない。

事実は小説よりも奇なりというが、この罰はある意味古すぎて新しい気がする。

「たくつ、お前のせいだぞ、三村」

両手に水のたつぷり入ったバケツを持ち、チラツと三村を一瞥する。そんな僕の思いをよそに三村は、

「よしよし、まずはお見舞いの品だよな。定番となると花束だけど、菊の花はダメなんだよな……」

一人でつぶやき続ける三村を横に、僕は天を仰ぐしかなかった。

一日の授業が終わり放課になると、三十分かけて僕は吉沢総合病院に来ていた。建物自体は三階建てだが、横に長く広がっているため、かなりの大きさだ。

目の前にそびえたつ、吉沢総合病院の存在に、僕は小さくため息をついた。

意を決していたというよりも、気がついたらここに居たと言ったほうが正しいかもしれない。

「それじゃあな鷹野。ついでに告白も済ませとけよ！」

「人事だと思って、よく言うよ」

「なに言ってるんだよ信也。ここでの告白は必然だろ」

「分かった。じゃあついでに吉沢さんの親父さんに、三村の気持ち……」

そこまで言った時点で、三村が僕の口を塞ぐ。三村の好きな女性
は吉沢果歩なのだ。

「ぼうはひはは？」

口をふさがれたまま『どうかしたか？』と三村に尋ねる。三村は
手を放すと、なだめるように両手を下に向けて上下させた。

「悪かった。ブレイクブレイク、ここは穏便に話を進めようじゃないか」

「僕はいつだって穏便だよ」

微笑んで見せると、それ以上三村は何も言わなかった。代わりに
先ほど花屋で買った、抱えるほど大きなスミレの花束を僕に渡す。

「まあ、告白は好きにしろ。それよりも元気づけてやるほうが先だしな」

「ああ、頑張ってみるよ」

覚悟を決めた僕は三村とその場で別れ、スミレの花束を抱えて病院へと入っていく。

いかにも清楚といった白を基調とした受付を無視してエレベーターへと向かう。三村の情報によると、山倉の病室は三六号室らしい。

何故そこまで知っているのか謎だったが、言われた通りに三六号室へと向かった。

途中で幾人かの看護婦や患者とすれ違ったが、ほぼ全員が僕というよりも僕が抱えている花束を凝視してくる。

わずかに頬を染めながら、僕はめげずに廊下を進んでいった。

三六号室の前で表札を確認すると、間違いなく山倉優美と書いてある。

三村の情報の正確さに半ばあきつつも、すぐさま頭の中を切り替えて深呼吸をする。

意を決した僕は、扉を拳で二回叩いた。

10月24日(2)

「……だれ？」

中から聞こえてきたのは、間違いなく山倉の声だった。

だが、いつもの元気な声ではなく、むしろ無理やり出したといった感じがした。

「あ、あの、同じクラスの鷹野だけど……」

「鷹野君？　ちょ、ちょっと待っててね！」

少しの間が空き、辺りがシーンと静まり返る。手に持っていたスミレを抱えなおしていると、

「どうぞお！」

中からうつて変わった声が聞こえてきた。今度こそ山倉特有の元気な声だ。

ゆつくりと扉を開けて、中へと入る。室内はあまり広くなく、部屋の半分をベッドが支配していた。他には小型テレビと丸椅子が二脚、それに加えて小さな棚しかない。

「やつほー、いらっしやーい！」

ベッドの上で寝そべったまま、山倉は両手を僕に振ってきた。吊られた右足にはめられたギブスが痛々しい。

いつもは背中まで流れる黒髪も、いまは邪魔になるのか頭の後ろでまとめられている。

着ている水色のパジャマは廊下ですれ違った患者も着ていたので、病院から配布されたものだろう。

「これ、お見舞いの花」

「わああ！　こんな大きな花束初めて！　ありがとう鷹野君！」

頭を下げて、ワインをたしなむように香りを堪能する。その一連の流れる動作も、胸中が痺れるほど愛くるしかった。

「それにしても、わたしの好きな花がスミレだって、よく知ってたね？」

「あ、ああ、うん、まあね？」

実を言うと、スミレを選んだのは三村だった。多分というか絶対に、三村は山倉の好きな花を知っていて選んだのだろう。

花束を棚の上に置いて、微笑む山倉。小さく鼻をすすってから、丸椅子を指差した。

「座ったら？」

「あ、うん……」

二人きりの状況に手を震わせながら、緑色の丸椅子を持ってきて座る。

どこか目を潤ませているような山倉に気おされ、部屋の空気がわずかに重かった。

「それで、具合はどうなの？」

横目で山倉の右足を確認しながら告げる。

点滴をしているわけでもなく骨折だけ。入院しなければならない要素はどこにも見当たらなかった。

「うん、大丈夫だよ。検査のために一日だけ入院したの。だから明日には退院だよ」

「あ、そうだったんだ」

「クラスの人にも、心配かけちゃったかな？」

返答の代わりに、僕は微笑んでみせた。肯定しても否定しても、山倉にとっては気分のいいものではないだろう。

「骨折は？ ひどいの？」

「そうでもないよ。複雑骨折ってわけでもないし。でも、修学旅行までには治らないだろうなあ」

「それはさすがに無理だろうね……」

僕が告げると、山倉は大袈裟にがっくりとうなだれていた。

修学旅行は来週の月曜日から水曜日にかけて行われる。それを考えればさすがに無理としか言いようがなかった。

「でも、明日で退院なら修学旅行に行くことはできるじゃないか」

「そうだよ。もうすぐ誕生日もくるし、骨折なんかでぐずぐずし

てられないって」

山倉の誕生日は三村の情報によると、十月二十八日らしい。来週の火曜日　つまり修学旅行中に山倉は誕生日を迎える。

「でも周りの人には迷惑かけちゃうかな？」

「大丈夫だよ。そんなことでいちいち目くじら立てる、心の狭い奴なんていないさ」

バクバクと鳴り響く心音を聞きながら、平静を装いつつ元気づける。

それが功を奏したのか、山倉は満面の笑みで僕に頭を下げた。

「うん、そうだね！　ありがとう鷹野君。少し落ち着いたよ」

落ち着いた？

今の会話では心配をかけるかけないのはなしであって、落ち着く落ち着かないの話ではない。

なんでもない言葉ではあるが、それをきっかけに全てのロジックが自然と組み合わさっていった。

山倉らしくない声、鼻を小さくすする、目を潤ませる、そして落ち着く　。

それらが共通する行為として思い浮かぶのは、涙を流す　つまり泣くこと。

僕が来る前から、山倉は泣いていた。原因は分からないが、最愛の人が悲しむ姿など見てはいられない。

「あのさ、山倉」

「んっ？」

山倉の唇が震えている。いつもは潤んでいる唇も、いまは乾ききっていた。

思い切って山倉の悩みを聞きたかった。助けになりたかった。

だが、僕の口から出たのは陳腐な否定だけだった。

「いや、なんでもないよ……」

結局なにもいえない自分の弱さに、ほんと泣きたくなる。

それでも、山倉の心の傷をえぐるような事態を考えれば、ましの

かもしれない。

「ところでさ、鷹野君」

「んっ、なに？」

思考をいったん打ち切り、山倉との会話へと切り替える。

「どうして鷹野君がお見舞いに来るの？ クラスの代表とかそういうやつ？」

「ハハ、確かに普段は特に仲がいいってわけじゃないもんね」

「いや、そういうつもりじゃなくてさ。どうしてなのかなって、単純に好奇心だよ」

「そっか。でもクラスメイトが入院したんだから、お見舞いぐらい当前じゃないかな？」

瞬時に建て前を築き上げつつ、山倉へと答える。もちろん平静を装いながらだ。

「でも、他にはだれも来なかったよ？」

「みんな部活とかで忙しかったんだよ」

「じゃあ鷹野君は暇だったんだ」

「まあね」

「そっか……」

山倉は僕から視線を外すと、窓の外へと顔を向けた。僕もそれに続く。

外は夕暮れ時で、ひつじ雲による暗くも鮮やかな色彩が、空を覆いつくしていた。

ふと、山倉に視線を戻す。山倉はまだ窓の外を見つめていた。

顔に赤い日差しを浴び、瞳が輝いている。

物悲しだけを浮かばせて、山倉はきつく口を塞いでいた。

そこで僕はようやく失言に気がついた。暇だから来たなど言えば、暇つぶしだと思われるもおかしくない。

「あの、山倉……」

「ん、なあに？」

声に反応した山倉は、再び笑顔へと戻っていた。

人前では笑顔を造り、表向きだけ元気に振るまう。本当は泣きたいのにもかかわらず。

そんな山倉の悲しみが、自分の悲しみのように、強く胸を締め付けられる。

目の前の愛しい山倉を、悲しみから開放させたかった。

「本当は、違うんだ」

「なにが？」

「ここに来た理由さ。暇つぶしなんかで来たんじゃない。それにクラスメートだから来たわけでもない」

「どうしたの？ 急にまじめな顔になって」

しばらくの沈黙の後、意を決した僕は告白した。

「僕は、山倉が好きなんだ」

「……えっ？」

「だから、今日は僕が個人的にお見舞いに来たんだ。理由は山倉が好きだから。山倉のことが心配でたまらなかったから」

山倉はうつむき、顔を真っ赤に染めた。両手をもじもじ動かしながら、照れくさそうにしている。

「わ、わたしのこと……が？」

無言で頷く。すると山倉は僕に向かって頭を下げてきた。

「ありがとう。気持ちほんと嬉しいよ。でも、他にもいい人はいっぱいいるよ？ わたしなんか体力だけの女だし。だから……」

「体力だけの女なんかじゃない。山倉は素敵な女性だよ」

「だ、だって」

「一年生の頃から山倉を、ずっと好きだったんだ。この気持ち、簡単には変わらないよ」

しばらくしてから、山倉は視線だけを上向かせた。

「でも、わたしは……」

「他に好きな人がいる？」

「いや、そういうわけじゃ……」

「おれのこと、嫌いかな？」

「そんなことない！ 今日も来てくれて、すごく嬉しかったよ！」

「じゃあ、どうして？」

困った顔で、体を振るわせる。僕の告白はいたずらに、山倉を苦しめる結果になってしまったのかもしれない。

「山倉、返事は急がなくていいよ」

「えっ？」

「今はゆっくり休んで、いつか結論が出たときにでも聞かせてくれればいいさ」

「でも……」

僕は立ち上がると、山倉に背を向けた。というよりも、これ以上話していると涙腺がおかしくなりそうだった。

病室の扉へと近づき、ノブを握る。

そこで背後から声がかかった。

「待つて、いけないで！」

振り向くと、今にも泣きそうな顔で必死に腕を伸ばしてくる山倉がいた。

「鷹野君に聞きたい。わたしの二つの質問に答えてほしいの」

僕は頷くと、元の椅子へと戻っていった。

山倉がゆつくりと、それでいて確かな口調で僕に尋ねてくる。

「じゃあ一つ目ね。わたしなんかのどこが好きなの？」

間髪いれずに、僕は答えていた。

「クラスの雰囲気を変える明るさと、困った人を放っておけない優しさ。それに不安や悩みを吹き飛ばすその笑顔かな？ 今までもその笑顔に何度か助けられたんだ。苦しかったり、つらかったり、悲しかったり、そんな時も山倉の笑顔で不思議と心が安らぎ、軽くなるんだ。きつとなんとかなる。頑張ろうって気持ちになれる」

お世辞にも上手いとは言えないが、なんとか自分の感情を伝えようと努力する。

山倉は特になにも言わず、次の質問を発していた。

「じゃあ二つ目の質問。付き合っていくことになったとして、わた

し達はどう変わっていくの？」

「またも間髪いれず答える。山倉の質問は僕の山倉を想う気持ちを伝えればいいだけだ。」

「さっきも言った通り、悩みや悲しみに埋もれている時にはその笑顔で支えて欲しい」

「それをわたしに望むのね？」

「うん。だけど無理はしないでいいんだ。山倉以外にはできないし、一緒に笑っていけたらそれでいい」

「褒め言葉がこそばゆいのか、山倉は頬を染めてかすかに口もとを緩めていた。」

「束縛する気もないし、普段はいつもどおりでいいんだ」

「うん、分かった。それだけかな？」

「問いかけてくる山倉に、一呼吸ほどの間を空ける。小さいながらも力を込めた声が、僕の口から吐き出された。」

「いや、もつと重要なことがある」

「もつと重要なこと……なに？」

「怪訝な面持ちで首をかしげる山倉に、おもいきってぶつかっていい。山倉を苦しみから解放させられるのは僕しかない。そう言い聞かせながら。」

「山倉を救いたい」

「えっ？」

「苦しんでいる山倉を、本当の山倉を救ってあげたい」

「べ、別に苦しんでなんかいないよ。いつも元気な優美ちゃんだもん」

「両手の人差し指を頬にあて、にっこりと微笑む。あくまで元気な姿を演じようとする、いつもの山倉がそこにいた。」

「その手をおもむろに掴み、僕は山倉を凝視した。突き刺すような眼差しを送られ、山倉の体が止まる。」

「さっきまで、泣いてたでしょ？」

「な、なんのこと？」

「目を潤ませて、泣き出したいのを我慢してさ。強くて元気な自分を演じてない？」

「それは……」

顔を背ける山倉の素振りは、あきらかに僕の言葉を肯定していた。「僕の前では演じなくていいんだ。元気で明るくて優しい山倉は好きだけど、無理だけはして欲しくない。だれだって、つらい時や悲しい時はあるから」

無言のまま聞き入る山倉に、僕は続ける。

「泣きたい時には泣いて、笑いたい時に笑えばいい。飾っていない山倉の側にいてあげたい。それが山倉を救うことに繋がると考えるから」

「鷹野君……」

「間違ってるかな？」

「うつん、間違ってるない。すごく、心に響いたよ」

頭を下げる山倉の目元から、我慢していたであろう一粒の涙がこぼれていった。

10月24日(3)

「鷹野君の言う通り、さっきまで泣いてたの。わたしのお母さんね、来てくれてないんだよ？ ひどいでしょ……」

小さな声を絞り出して、山倉は独白を始めた。慌てる僕が慰めの言葉を探し当てる間にも、独白は進行していく。

「一日ぐらいの入院で、顔を出す必要なんてないって言ってさ……わたし、一人娘なんだよ？ もうちょっとさ、大事にしてくれた方がいいと思わない？」

「うん……」

山倉は僕の目を見ずに、淡々と思いを口にしていく。

「わたしのお母さんさ、お金の亡者でね。会社ばかりで滅多に家にも帰ってこないの。なんでもお金お金。今日の入院費用だって、お金はアンタが払いなさいよ！ だって？ 信じられる？」

「でも、お金を稼いでいるのは山倉のためでもあるんじゃないか？」

「わたしの……ため？」

「そうだよ。お金がないと苦労するよ。うちも貧乏でさ……」

「お金で買える幸せなんていらない！」

冗談混じりの戯言を一喝され、僕はようやく自分の失言に気がついていてた。

「お金なんて、最低限あればいいの！ 度を越えるお金なんて人の心を狂わせるだけ！ そのせいでお母さんは狂った！ お父さんも、お父さんもそのせいで……」

山倉の父親は、数年前に離婚したという話を聞いている。そして昨年、山倉の前で亡くなったらしい。

がつくりと力尽きた山倉は、ベッドに体を預けていた。僕の全身を覆っていた後悔と懺悔が、否応にもその存在を増していく。

『山倉ごめん！ 僕が考えなしかった！』

頭の中で叫び続ける言葉も、口から発されなかった。

しばらくして、山倉はベッドから起き上がる。流れる涙は量を増し、川を形成して流れていた。

「ごめん。わたしの家庭の事情なのに、鷹野君に怒鳴ってもしょうがないよね？」

僕は無意識の内に山倉を抱きしめていた。

「いいんだ。苦しみを吐き出してくれて、頼りにしてくれて嬉しいよ」

「うん、ありがとう。すごく楽になった」

僕と山倉は無言で抱き合っていた。震える山倉の体を確かに感じながら……。

山倉の震えが止まる。山倉が顔を上げると、すでに涙は止まっていた。

いつもと同じ笑顔。でも、どこか違う。

それは、とても満足しているといった、すがすがしいものだつた。

「鷹野君、わたしなんか好きになってくれてありがとう。わたしも、鷹野君なら自分を偽らず、本音で話せそうだよ」

山倉が手を伸ばし、優しく僕の手を握ってきた。自分の顔が、蛸のように赤く変色していくのがわかる。

「本当のわたしに気がついてくれたのは、鷹野君が初めてだよ」

「みんなだつて気がついてるさ」

「ううん、みんなは元気なわたししか知らないから、悩みなんてないと思ってる。だからこそ元気な自分を、演じなきゃいけなかったの」

「でも、もう演じる必要はないよ」

返事の代わりに、ギュッと手に力が込められた。それに応えてこちらでも握り返す。

「改めてお願いする。わたしとつき合つて。そして支えて。精一杯わたしも頑張る。だからいつも笑ってられるよう、ずっと一緒にいてね」

目に涙を浮かべつつ、山倉が告げる。

次の瞬間、そんな健気な彼女をもう一度抱き締めていた。

二度目の抱擁でも最初は体を震わせていたものの、今度はすぐに力を抜いて身を任せてくれた。

「もちろんさ。これからもずっと山倉を支えて、いつでも救ってあげるよ。もう二度と、ため息なんて吐かせはしない」

「うん、ありがとう。でも、もしかしたら鷹野君に……」

「えっ？」

「な、なんでもない。お願いだから、助けてね」

「無理しないで、吐き出していいんだよ」

僕の提案に、小さく首を振る。まだ、すべては吐き出せないのかもしれない。

「大丈夫、本当に大したことじゃないから」

「そう？　だったらいいけど……」

「それよりも鷹野君。明日休みだよな？」

話題を変えて、瞳を輝かせる。

「土曜日だからね。休みだよ」

「だったらさ、迎えに来てくれない？　好きな男の子が待つてくれるっていうシュチュエーションに憧れてたんだ！　ごめん、待った？　いや、今来たところだよ……みたいなやつ」

「ハハハ……」

「ちよつと、何がおかしいの？」

抗議をしてから、ぷっくりと頬を膨らませる。笑いをこらえながら、僕は山倉の提案を了承していた。

「それじゃあ明日……午前十時ぐらいになるらしいから。それよりちよつと前までには来ててね！」

「僕のほうが遅れて来ちゃって、立場が逆になるってのもあり？」
「なし！」

あつさりと却下され、二人で笑い飛ばす。僕はそのまま山倉に手を振り、病室をあとにした。

病院の廊下を歩いている間も、僕の胸は高鳴りっぱなしだった。

上がりっぱなしのテンションで、通り過ぎる人たちに元気よく挨拶していく。

病院から出ると、外はすでに薄暗くなりつつあった。楽しい時間というのは、どうしてこうも過ぎるのが早いのだろう。

「よっ、どうだった？」

どこで待っていたのか三村が僕のそばへと駆け寄ってくる。

「三村、わざわざ待っててくれたのか？」

「そりゃ、たきつけたものとしての責任もあるからな。で？」

心の底から湧き上がる笑いを、抑えることができなかった。三村の肩をバンバンと叩いた後に、グツと引き寄せる。

「サンキュ、三村」

「おおっ！？ まじかよ！」

「ええ、本当に！？ 優美がオツケーだっけ言ったの！？」

いつの間にかそばにいたのは、花の入った籠を持った吉沢果歩だった。きょとんとしている僕に、三村が説明してくれる。

「クラスの代表で、お見舞いに来たんだってさ。感謝しろよ？ 信也がいるからって、少し待ってもらってたんだからな」

「そうだったのか、ありがとう吉沢」

「うっん、それは別にいいんだけどさ。でも驚いたなあ……優美の心を開かせるなんて」

吉沢は感心しながら、僕の全身をくまなく見つめる。

「頼りがいのある男とは思えないけどなあ」

「ほっとけ！」

「フフ、でも優美が認めたんだから、きっと人の心が分かる素敵な人なんだろうね。わたしからもよろしくお願いするよ。優美のこと守ってあげてね？」

言いながら吉沢は病院へと入っていった。

「よかったな、信也」

僕の髪の毛を、ぐしゃぐしゃにかき混ぜつつ、三村からの祝福の嵐を受ける。

「これで安心しておれも吉沢にアタックできるってわけだ」
笑いとばす三村に、ふとした疑問　というよりも確信だ　が
浮かぶ。

「なあ、三村」

「ん？」

「僕を待ってたのって、責任とかじゃなくて吉沢がいたからだろ？」

やはり図星だったようで、三村の笑いが止まる。

「ま、まあそうとも言っな。結果オーライってやつさ」

「お前なあ……」

「いいじゃないか！ おれも吉沢にアタックしてオッケーもらった
暁には、ダブルデートといこうぜ！」

「じゃあ三村がフラれたら、僕と山倉のデートを見せびらかせるよ」

「くそっ、余裕がありやがる……」

顔をしかめた三村の肩を抱き寄せ、僕たちは病院に背を向けた。

明日の一大イベントを胸に、僕の足取りはかるやかだった。

10月25日(1)

十月二十五日 土曜日

僕は家を勢いよく飛び出すと、病院に向けて一直線に進んだ。晴れ渡った透き通る青は、退院日と言っているだろう。

学校からの道のりとは違い、ここから吉沢総合病院まではそう遠くない。家から数分のところにある商店街を抜ければ、すぐ正面に吉沢総合病院が見えてくる。

商店街では、活気ある声が方々から聞こえてきていた。それらの声がすべて、僕を応援する声に聞こえてくるから不思議だ。

商店街を抜けると、十字路の信号へとたどりついた。それを渡れば吉沢総合病院はすぐそこだ。

不運にも歩行者信号は、赤色を点灯していた。

あせる気持ちをおさえ、僕は信号が青になるのを待った。

と、道路を挟んだ向こう側に、話に夢中になっている主婦が二人目に入った。その二人の足元で、少女がフラフラしている。

そのフラフラは少しずつ横断歩道へと近づいていき、道路へと飛び出していった。

『危ない！』

声には出ず、頭の中で叫ぶ　　が、そこでちょうど歩行者信号が青に変わっていた。

「ふう、やれやれ」

冷や汗が沸き起こるのを肌で感じながら、僕は横断歩道を渡り始めた。山倉との再会を前に、交通事故など見たくはない。

だが、一安心した僕の期待を裏切るかのように、再び魔の手が子どもへと襲い掛かるうとしていた。

少女の様子を伺いながら、横断歩道を渡ろうと一歩踏み出す。

その視線の隅に、向こうの車線を走る大型トラックが入ってきた。本来ならよくある光景で、問題があるはずもない。

だが、その大型トラックは信号が赤であるにもかかわらず、止まる気配がなかった。

もちろん少女はその光景に気がつかず、歩道に戻ろうともしない。「危ない！」

今度は頭の中ではなく、口から発される。

即座にその場から駆け出すと、道路上で少女を思い切り突き飛ばした。

道路の外に飛ばされた少女が立ち話をしていた二人の主婦の横に倒れる。そこで初めて二人は異変に気がついていった。

ほっとしたのもつかの間、得も知れない衝撃が僕を弾き飛ばしていた。細い針金のように、あっさりと体がひしゃげる。

そのまま体が重力に反して浮かび上がり、空中で激しく回転していく。

無重力を体験し、目の前はビデオのスローを思わせる残像とぶれ。そのまま僕は、地面へと叩きつけられていた。

頭から落下したのか、割れるような激痛が頭部を執拗に襲撃してくる。

次に腕、最後に足へとその激痛は移っていき、最終的には痛みが全身を覆っていった。

うめき声をあげるだけでも精一杯で、立ち上がるなどもつてのほかだ。痙攣を繰り返す体に苛立ちが溢れかえる。

最初の衝撃で思わず閉じてしまった目を開くと、視界の上の方に、トマトケチャップを思わせる液体が、心臓の鼓動に合わせてドクドクと流れていた。

「だ、大丈夫！？　しっかりして！」

大丈夫なわけ、ないだろ？

「痛いよお、うわぁん！」

僕だって痛いよ。

「早く救急車を、早く！」

そうだよ、早くしてくれ。山倉が僕を待ってるんだ。

頭の中で本日最大のイベントが幾度と泣く回転する。

僕は懸命に全身へ命令を送った。山倉を迎えに行くためだけに。

だが、その命令が細部に達しても、実行に移されるだけの余力は残されていなかった。

「やま、く……」

懸命に愛しの女性を呼んだ。だが、それが声になっていたかどうかさえ、今の僕には判断できなかった。

近いはずなのに、遠くから人々のどよめきと、救急車のサイレンが聞こえてくる。

そのざわめきはまるで、聖母の歌う子守唄のようだった。

襲ってくる気だるい眠気が妙に心地よく、視界がぐにやりと歪んでいく。

僕はそのまま静かに目を閉じた。睡魔の甘美な誘いに応じるように。

10月25日(2)

気がつくと、僕は薄暗い一室に突っ立っていた。部屋の中はろうそくが四本、すべてに火が灯っている。

そのろうそくに囲まれるように、ベッドが一つ、その上にはシーツをかぶせられた物体が横たわっている。

近づいてみると、それは人間の形をしているようだ。どうやらここは死んだ人間が連れてこられる、霊安室らしい。

その人物は顔に布がかけられているため、だれかは分からなかった。だが、死んでいるのは明らかだろう。

それよりも重要なのは、僕がどうしてここにいるかということだ。「もしかして、山倉の病室と間違えた？」

もしそうだとしたら、恥ずかしいとかいうレベルを富士山一つ分超えている。

頬が赤くなっていくのを自ら感じながら、僕は廊下へとつながる扉へと向かった。

いったん立ち止まり、背後の死体へとお辞儀をする。

「無事、成仏できるといいですね」

死体は何も答えない。当然だ。それでも僕は、満足感らしきものを得ていた。

苦笑しながら、扉のノブをつかむ。今の時間はわからないが、山倉が僕を待っているのは間違いないだろう。

だが、僕の思惑を裏切る事態が起こっていた。

掴んだはずのノブが、するりと手から逃れていく。

「あれ、おかしいな？」

ぼやきながら、何度もノブを握ろうとするも、結果は変わらなかった。

正確には、手がノブを貫通するという現象が起こっているようだ。「なんなんだよ、まったく」

仕方なく扉自体を押してあげようとする。

だが、扉に触れた感触はいつさいなく、手が扉へとめり込んでいったのだ。

「うああ！」

慌てて手を引っ込める。手に異常は見当たらないし、当然扉に穴が開いているわけでもない。

今度はゆっくりと感触を確認しながら、両手で扉を押す。結果はかわらず、扉に手はめり込むだけだ。

そして、それらの現象が、一つの仮定を生み出す。

「そんな……まさか」

頭を思い切り左右に振り、浮かび上がった結論を消去しようと試みた。

だが、記憶というテープに録音された仮定は、脳内で何度も再生を繰り返す。僕の意思などお構いなしだ。

僕はおもむろに、背後を振り向いた。相変わらず永眠している死体は一言もしゃべらない。

ただその死体の正体を、僕は分かりかけていた。

「う、嘘だ！」

思わず僕が叫んでしまった瞬間に、背後の扉が思い切り開いた。廊下の光が部屋の中へと差し込み、死体がスポットライトを当てられたかのように照らされる。

扉のほうへと改めて振り向くと、そこには最愛の女性が呆然と立ち尽くしていた。

「鷹野君……」

薄暗い中でも分かるような、血の気の引いた顔色でつぶやく。

骨折した足を引きずり、スポットライトの中心へと歩み寄る。すぐそばにいる僕の横を通り過ぎて。

「山倉！ 僕はここだ！」

「鷹野君、起きてよ、返事してよ！」

そのまま死体へと寄り添い、耳をつんざく絶叫を放つ山倉。

その拍子に、顔にかかっていた布が地面へと落ちた。

そこには予想通りの顔があった。毎朝洗面台の鏡に映る見慣れた顔だ。

「支えてくれるって約束したのに！ どうしてこうなるのよ！ 鷹野君ってば！」

山倉へと近づき、肩へと手を乗せられなかった。やはり僕の手は山倉の肩をすり抜け、体へとめり込んでいく。

「わたしのせいだ。わたしが迎えに来てなんて言ったから！ わたしがわがまま言ったから鷹野君が！」

「違う！ それは違うよ！」

すぐさま否定するも、その言葉も届かないようで、まったく反応を示さなかった。

山倉が僕の名前を呼ぶたびに、容赦なく体が締め付けられた。手先から全身へと、痺れが伝わっていく。

「おい、起きろよ、起きろってば！」

僕は横たわった僕へと近づき、その体を殴ろうとした。結果は分かっていたとしても、やらずにはいられなかった。

淡々と漏れていく吐息が、少しずつスピードを増していく。

ひたすらに泣き続ける山倉のそばで、僕はなすすべもなく膝をついた。ちょうどその時だった。

「そろそろ自分が死んだって、認めてくれたのかしら？」

背後から聞こえた声に振り向くと、全身を覆う白いローブに、緑色の腕章を着けた女性が、につこりと微笑んでいた。

美人というよりも、幼い無邪気さの感じられる。歳は十代後半から二十代前半ぐらいで、そばかすが目に付く女性だ。

10月25日(3)

「諦めが悪いというか、鈍感というか……」

「だ、誰だ、あんた？」

「誰？ 相手の名前を知りたい時は、まず自分から名乗るべきじゃないの？」

動揺している僕とは反対に冷静沈着な女性は、呆れたようすで前髪を軽くかきあげる。

確かに彼女の言うとおりだ。

「う、ごめん。僕は……」

言われたとおりに自分の名前を告げようとすると、その前に彼女が、

「鷹野信也君……でしょ？」

僕の名前を造作もなく当てた。目を丸くしているのが自分でわかる。その女性は顔全体で微笑むと、握手を求めてきた。

「わたしはミリア＝ミリス。天界と地界を結ぶ中界で、案内人の仕事をやっているわ」

「中界？ 案内人？ なんだよそれ……」

ミリアの言っていることは、僕の頭では簡単には理解できなかった。ミリアもそう判断したのか、更なる説明をしてくれる。

「天界と地界は、生きている人々　わたしたちは現界人って呼んでるけどね　その現界人が言ってる天国と地獄みたいなもの。中界ってのはエンマ様が、天界と地界の仲介をするところってわけ。あ、別にダシャレじゃないから」

ミリアはケラケラと笑っているが、微笑み返す余裕などまったくなかった。

「ぼ、僕は死んでいない」

ミリアの断言を否定して、叫ぶ。今度はミリアが目を丸くする番だった。

「あれ？ まだ認めてないの？」

「そうだ、こんな馬鹿げた話、あるはずがない。天界と地界にエンマ様のいる中界。迎えに来る使者だって？ ありえないよ！」

「あのねえ」

呆れて物も言えないのか、頭をポリポリと掻くミリアを無視し、続ける。

「そうだ、これは夢だ。よくある夢だよ」

「よくはないと思うけど」

「まだ十代なんだぜ？ 死とは一番かけ離れた場所にいるんだぞ」

「一番かけ離れてるのは、十代よりも生まれたばかりの赤子じゃない」

「うるさいな、さつきからしつこいぞ。夢の人物なら、ちょっとは気を使えよ」

「んじゃ、気を使つて一言いいかしら？」

一度軽く咳払いをし、ミリアは、
「どんな事象でも起これば現実、そして現実とは紛れもない真実なの。分かる？」

腕を組みつつ、頷きながらサラリと告げた。

僕にとって初めての経験である死も、ミリアにとっては日常茶飯事なのだろう。

「つてことは、やっぱり僕は……」

「そう、死んだのよ」

ミリアは僕の心情を意に介さず、端的に述べた。思わず泣きたくなってくる。

「さっ、行きましょ？ わたしだって他に仕事があるんだから」

僕の手を無造作につかむと、ミリアは引っ張った。そのままずると引きずられながらも、我に返ったと同時に振り払う。

「なに、どうしたの？ もしかして地界に行くのが怖い？ 大丈夫だって！ 信也君はいい子だから、きつと天界に行けるからさ」

「そうじゃない。僕は行かないんだ」

「はあっ？」

呆れ果てた顔で、見下してくるミリア。それでも、断固として反論すべき場面だと信じた。

「僕は山倉を支えるって約束したんだ！」

「ふーん……じゃあ聞くけどさ、死んだ信也君が、どうやって優美ちゃんを支えるって言うの？」

「そ、それは……」

「確かに死んだ人を心に抱き続けて、それを支えに生きている人もいるらしいわ。でも、それは別に死んだ人が何かしてあげてるわけじゃない。生きている人が自分のために、自分で心にとどめているだけ」

「だ、だけど！」

「だけでもへつたくれもないわ。あなたは死んでしまったから、優美ちゃんには触れないし、声も聞こえない。まあ、顔を見れば分かるけど、そこに横たわっている死体が信也君だってことは間違いないから」

「嘘だ！ そんなこと……」

「嘘？ どこからそんな結論が出てくるのかしら。実際に信也君は何も触れない。声も届いていない。全部わたしの言った通りになってるじゃない。それなのに、わたしの説明が嘘だって言えるの？」

我慢の限界だった。僕の涙が頬を伝って床へと落下していく。

「うああああ！」

気がつくとも僕は、部屋を振るわせるほどの声を発していた。涙をこらえようとすることも、まったく止まりそうにない。

「さっさといくわよ！ いい、もう一度言っわ信也君。あなたは死んだの！ もうあなたが優美ちゃんにしてあげられることは、何もないのよ！」

脳を直接殴られたかのような、するどい衝撃が走った。

『僕にはもう、なにもできないんだ……』

脳内で繰り返される言葉と共に、僕の体は脱力感で包まれていっ

た。

10月25日(4)

ミリアに引つ張られながら、僕にできること、僕が最後にできること。それを必死に考えていた。

「ミリアさん……」

「ミリアでいいわよ。なに？」

「じゃあミリア。少しだけ、時間をくれないかな？」

最後にできること。それは最後のお別れだ。なにもできなかった僕を想って泣いてくれる山倉への、最後の言葉だ。

だが、ミリアはなにを思ったのか、突然大声で笑い始めていた。頭の中で何かが弾けたように血が上り、ミリアの襟元を無造作につかむ。

「な、何がおかしい！」

いらだつ僕の神経を、さらに逆撫でるように、ミリアは半笑いで問いに答えた。

「おかしいわよ。死んだ人ってみんな同じこと言うんだもん。死んだ人間が喋っても、現界人には聞こえないんだよ？ それなのにお別れだなんて 意味のない行為だよ」

「やってみないと、分からないさ」

「正気なの？」

「もちろん」

反論する気も失せたのか、ミリアは嘆息しつつ片手を広げ、

「五分間だけだからね！」

とだけ言って、部屋の隅へと移動する。そのままミリアの消えてしまった。

「ありがとうミリア。恩にきるよ」

ミリアを見送り、後ろを振り向く。未だに山倉は自分を責め続け、涙を流していた。

「ごめん山倉。約束、守れなかったよ」

山倉の背後から、ぼそりとつぶやく。ミリアの言ったとおり、山倉には聞こえていないようだ。

それでも僕は続けた。続けずにはいられなかった。

「支えてあげられなかった。もう山倉に触ることすらできない。だけど、山倉を想う気持ちには本物だったんだ。山倉を恨んだりなんかしないから、自分を責めないでほしい」

瞳から、さらなる涙がこぼれていく。ふがない自分がやるせないかった。

「死んでも、山倉を見守っているから。だから、もう泣かないで……」

刹那、山倉が背後を振り向いていた。

「山倉！」

最後の言葉が奇跡を起こした。そんな予感がする。

だが、あくまで予感は予感でしかなかったようだ。

山倉は確かに僕の声に合わせて振り向いたが、焦点は僕を越えた、背後へと合わさっている。

山倉の視線の先へと振り返ると、そこには黒い革製のスーツに身を包み、ヘルメットを持った女性が立っていた。僕の母だ。

十代の頃に僕を生むも、父は僕がまだ小さい頃に亡くなってしまった。その後は女手一人で僕を育ててくれた、男勝りで大雑把で、いつも元氣一杯の母。

そんな母親が涙を流すのを見るのは、今日が初めてだった。

「信也……なんでこんなところで寝てるんだよ……」

フラフラと部屋の中に入ってきた母さんの体は、あっさりと僕の体をすり抜けた。そのまま山倉の隣へと立ち、

「ふざけるなよ信也。わたしを……わたしを一人にするつもりか！」怒鳴りながら死体を何度も殴打する、何度も、何度も。

しばらくすると力尽きたのか、山倉の隣へと崩れ落ちた。顔をうつむけて、むせび泣く姿にも、なにもできない自分が腹立たしくてしかたがなかった。

一番の親不孝者とは、親よりも先に死んでしまふことかもしれない。そんな想いが頭をよぎる。

「母さん、ごめんなさい。ずっと大事に育てて、側にいてくれたのに、肝心なときに役に立てない僕を許してください……」

それが僕の最後の懺悔だった。それ以上、何も言えなかった。二人に背を向けて、涙を流し続けるのが精一杯だった。

「お別れは済んだかしら？」

前方から、優しい声がかかる。にっこりと微笑んでいるミリアに、すすり泣きを抑えて頷いた。

10月25日(5)

「優美ちゃんか。いい子そうだね」

「いい子そうじゃなくて、いい子なんだよ。支えることのできない僕のために、こんなに涙を流してくれてる。苦しいけど、少し嬉しい気もするよ。おかしいかな？」

「さあ？ わたしには分からないし、関係のないことだわ」

友好的な雰囲気を一瞬にして殺伐へと変遷させる。ムツとした僕がミリアに一言、物申そうとした。その時だった。

「まっ、いいじゃないの。すぐにまた一緒になれるんだからさ！」

僕の肩を叩きながら、平然と述べたミリアは、自分の失言に気がついていなかった。僕の怒りがミリアへと集中していたからこそ、違和感を感じとれた。

もしも未練がましく山倉や母さんに気を取られていたら、きっと聞き逃していたに違いない。

「すぐ？　すぐってどういう意味だよ？」

「そりゃあ……やばっ！」

目を泳がせながら、自ら口を塞いでいる。

僕の質問　違和感は、やはり正しいものだったと確信した瞬間だった。

「っ、つまりね、天界にいれば楽しすぎて早く時間が流れるから、一瞬で優美ちゃんと一緒になれるって意味よ。そうそう、そういう意味……」

尻すばみに小さくなっていった声のせいで、最後のほうはなにを言ってるか分からなかった。

だが、確かなのは一つ　ミリアは僕と、まったく目を併せようとしなかった。嘘をつくのが相当下手なタイプのようだ。

「それで？　本当はどういう意味なんだ？」

「や、やだなあ信也君、いま言ったばかりじゃない。ひょっとして死んだショックでばけちゃった？」

「フフフフ……」

「ハハハハ……」

乾いた笑いが二人の口から漏れる。背後では二人が泣いているため、笑い声と泣き声が交差するという奇妙な空間が出来上がっていた。

だが、それも束の間だった。とっさにミリアの襟首をつかみ、締め上げる。

「どういうことだ！　すぐってどういう意味だよ！」

「ちよつ、くるし、信也君！」

ミリアが涙を流しながら、僕の手を振り払おうと暴れ始める。それでも僕は力を緩めなかった。

「だったら説明しろ！　何がすぐなのか、山倉がどうなるのかきちんと説明しろ！」

「説明、する、するから！　離してよ！」

言質を取った僕は、そこで手を離れた。紅潮した顔を前後に揺らし、何度も咳き込むミリア。

少し悪い気もするが、さっきの言葉の説明の方が重要だった。

「で、どういうことなんだ？」

「こ、こっちは死にかけたのよ！　自分の行為に対してのお詫びはないわけ！？」

「死にかけたって、もう死んでるんじゃないのか？」

「わたしは元々天界で生まれたから、最初からこうなのよ！　どっちにしたって天界や地界の住人が死んだらそれこそ本当の消滅！　二度と笑ったり遊んだり、できなくなるんだからね！」

ブツブツ文句を言いながら、ミリアは僕から顔を背ける。

「悪かったよ、謝るからさ。でもそれじゃあ落ち着けないんじゃない……」

「大丈夫よ、天界じゃ滅多に起こらないし、殺した方も消滅するん

だからさ！」

ざまあみろとばかりに舌を出すミリア。

ということは、もし今の行為でミリアが死んでいたら。背筋に寒気が走り思わず身震いすると、ミリアの機嫌は完全に直ったようだ。僕の反応を笑い飛ばし、腕を引っ張る。

「さっ、エンマ様の所へ行きましょ！」

「ちよつと待て」

僕はミリアの手を振りほどくと、その場に立ち止まった。ミリアの笑みが引きつったものへと変わっていく。

「そ、そんなに甘くはないわよね……」

「その通りだ。さっ、分かりやすく説明してもらおうか？」

腕を組みつつ返答を待つ。その場に座り込み、頭を押さえていたミリアも、とうとう観念したようだった。

「分かった、分かったわよ！ 教えればいいんでしょ！？」

「そう、教えればいい」

満面の笑みの僕とは対照的に、ミリアは暗く沈んだ表情で自分の失言を後悔しているようだ。

「んじゃ、行きましょうか？」

「だから、その手はくわな……」

「そうじゃなくて、説明に最適な場所へと案内するのよ。百聞は一見にしかずって言うでしょ？」

「本当だろうね？」

「この可愛いミリアちゃんが、嘘なんてつくと思う？」

ミリアはわざとらしく、につこりと微笑んでいた。

さっき誤魔化そうとしたのは嘘とは言わないのだろうか……そんな考えも頭をよぎったものの、黙っていた。これ以上余計な時間を費やしたくない。

10月25日(6)

「んじゃ、こつちよ」

僕の手をつかんで進もうとするミリアを、軽く力を入れて振りほどく。

「小さな子どもじゃないんだからさ。引つ張らなくてもついていくよ」

「そう、じゃあついてきてね」

ミリアはそのまま先ほどと同じように、壁をすり抜けていった。まった。死んだ人間にしかできない芸当だろう。

「そっか、だからさつき手が扉をすり抜けたんだ……」

一人で納得しつつ、一步を踏み出そうとする。その一瞬に、山倉と母さんの姿が視線の隅を横切った。

振り返ると、山倉と母さんは並んだまま体を小さく震わせていた。涙はすでに枯れてしまったのか、瞳を拭うしぐさはない。

未練を振り切るよう視界から二人を外し、ミリアの後を追って壁への一步を踏み出す。

すると、なぜか無警戒の頭に、鈍痛が響いていた。壁へと衝突したのと同じ感覚だ。

「あ、あれ？ どういうことだ？」

頭を抑えて目の前の壁を凝視していると、同じように頭を抑えてミリアが出てくる。

「もうっ、どうしてついてこないのよ！ 迷子になられたら困るんだから、さっさと来てよね！」

どうやらぶつかったのは壁ではなく、ようすを伺いに来たミリアだったらしい。

「死んでいる人同士はぶつかるってわけか」

再び腕を掴み引つ張るミリアに、今度はおとなしく引つ張られた。

壁から病院の廊下へと出ると、否応なしに薬品の匂いが鼻をくす

ぐつてくる。

だれも見えないのをいいことに、ミリアは足早に廊下を進んでいった。それも病院の出口とは逆方向　屋上へと向かっている。

「ミリア、どこに行くんだ？」

「中界だつていつてるじゃない。何を聞いてるんだか……」

ブツブツとぼやきつつ、ミリアが僕を引つ張っていく。どうやらぼやくという行為はミリアの癖のようだ。

「さっ、ここから行くからね」

屋上に出てきたミリアが指差す。その先には、白くぼやけぎみの階段が空へと向かつてのびていた。

どこまでも続く虹色の階段の終点は、肉眼では確認できない。

「これを上っていくのか？」

「大丈夫よ。現界でいうエスカレーターみたいなものだから。さっ、行くわよ」

立ち上る階段の一段目へと足を乗せると、ミリアの言ったとおりに、歩かずとも上方へと連れて行かれる。

少しずつ小さくなっていく町並み。地平線に日は沈みかけ、真っ赤に染まった空が哀愁を誘う。

こんな高い場所から生まれ育った町並みを見るのは初めてだった。同時に最後でもあるだろう。

吉沢総合病院のすぐ隣にある駅からは、電車の走行音が聞こえてくる。

そそり立つ銭湯の煙突や、一年半ほど通い続けた高校など、思い出のある大きな建物を一つ一つ確認する。

そして最後に自分の家を網膜に焼き付けておいた。

小さな家なのでほとんど見えなかったが、緑色という特殊な屋根のおかげで、確認はできた。

瞳から、枯れたと思っていた涙がこぼれ落ちる。

ミリアの言った通り、この街はもう僕の街ではない。あくまで過去の街だ。

そう考えただけで、急激に胸が苦しくなった。

「今まで、ありがとうございました」

温かく見守ってくれた人々、いつもそばにあった街並みに、感謝の念を込めて頭を下げる。

「さてと、もういいかな？」

頭を上げると、背後からミリアが尋ねてきた。無言で頷くと、得意げに指を一本立ててみせる。

「それじゃあ今から天界と地界について説明するわね。地界の説明なんて信也君には不要だろうけど、一応ね」

僕の返事も聞かずに、ミリアはなれた口調で説明を始める。どうやらこれも案内人としての仕事らしい。

「さっきも言ったけど、簡単に言うとな界と地界は現界人に天国とか地獄と呼ばれてる場所ね。とりあえず殺人や銀行強盗でもしなにかぎり、大抵は天界に行けるわ。天界での生活は　まあ現界人の生活とかわらないかな？　朝起きて、仕事に行って……」

「仕事って……死んでまで仕事しなきゃいけないのか？」

「死んでまでって、信也君は仕事してるわけじゃないでしょ？」

ミリアにするどく指摘され、ウツと言葉が詰まる。確かに働いたことはないが、あまり働くという行為に好感を持ってないのも確かだ。

仕事で疲れたとぼやく母さんの姿は、もはや日常の風景として、脳裏にすり込まれてしまっている。

「まっ、仕事をしなくても大丈夫よ。最初はそう望む人がほとんどだしね。だけど考えてみなさいよ。目標もなく毎日ボーツと過ごすなんて退屈でしょうがないと思わない？」

言われてみれば、確かにその通りかもしれない。仕事をしない一日というのは、学校に行かない一日と同じようなものだろう。たまにならそれも嬉しいが、毎日となればつまらなくなってくる。

「だから仕事っていつでも暇つぶしみたいなものなの。心配しなくても大丈夫だって！」

僕の背中に力いっぱい、平手打ちを浴びせた。痺れるような痛みが広がっていく。

「あと、天界の人間は将来的には生まれ変わるわ。いつになるかは分からないけど、生まれ変わりたいという嘆願書を出せば、少しは早くなるらしいよ。もちろん、今までの記憶なんかは無くなるんだけどさ」

そこで一旦深呼吸をし、今までとは打って変わって暗い声を出した。「問題は地界の方ね。悪い人と、あとは自殺した人かな？ エンマ様がよく言ってるんだけど　生きるための努力が報われず死んでしまう人もいるのに、自ら命を絶つなど言語道断　ってね。地界に落ちた人は鬼たちによって半永久的に苦しめられるの。その方法は様々なんだけど、その苦しみから解放されるのは、鬼が勢い余って殺してしまった時だけだって。怖いわよねえ！」

暗い声とはいえ、それを笑顔で説明するミリアの方が恐かった。

「まっ、信也君は悪い子じゃないみたいだから、天界に行けると思うけどね」

ミリアはケラケラと笑っているが、今の段階では天界や地界の様子よりも、山倉の未来に何が起るかの方が気がかりだった。

話半分に適当に相槌を打っていると、ようやく階段の頂上が見え始めた。

「ついたついた。ここが中界です。ようこそ信也君！」

ようこそと言われても死後の世界なのだ。できれば歓迎されたくない。

10月25日(7)

愛想笑いを浮かべつつ、辺りを見回す。地面は生きている頃と変わらず、土の強い感触が靴のしたから伝わってくる。

「地面って、雲じゃないんだね」

僕がぼやくと、ミリアは半ば呆れつつ返答してきた。

「雲の上にあつたら、雲がないときには中界がないってことになるでしょ。ただ生きている人には見えないだけ」

言われて確かに納得する。

生きている人々にも見えるなら、とつくの昔にワイドショーやスポーツ新聞を、大きくにぎわせているはずだ。

目の前には万里の長城を思わせる建物に、大きな赤い扉が造形されている。

扉の上の看板には『閻魔城 中界』と大きく書かれ、その横に小さく『日本支部』と書かれていた。迫力があるのかないのかよく分からない看板だ。

今のところ回りに人影は見当たらないが、ミリアの話から推測するに中界で働く人というのがどこかにいるはずだ。

そんな風に初めてみる死後の世界を観察していると、すぐ隣ではなぜかミリアが得意顔で胸を張っている。

「ここがエンマ様が働いている場所だよ。ここで天界行きか地界行きかを判定されるってわけ。それじゃあ、サッサとエンマ様に会って天界へと行きましょうか！」

ズンズンと一人進んでいくミリアに、僕はついていかなかった。

怪訝な面持ちで振り返るミリア。

「どうしたの、早く行こうよ」

「ああ……って言うとも思ったの？」

冷ややかに告げると、ミリアは観念したようだった。

「ちえっ、やっぱりダメか……」

「当たり前だよ」

「またもやミリアはブツブツ言いながら、正面の扉とは違う方向へと歩き出した。」

「それじゃあこっちに来て。わたし達の仕事場で話をするわ」

「仕事場なんて、僕が入り込んで大丈夫なのか？」

「それもそうね。んじゃこれをつけといて」

ミリアがローブのポケットから、緑色の腕章を取り出した。ミリアの左腕に着けられているものと同じものだ。

「これは中界で働く人の身分証明書みたいなものの。色によってどの部署か区別が付くようになってるわけ」

「これをつけておけば……」

「あなたも案内人として働いてると思ってくれてくれるでしょうね。もつとも同じ部署で働いている人に見られたら危ないけど。とりあえず見習いだってごまかすしかないわね」

言いながら手渡された腕章を、服の上から着ける。はつきりいつて心細いことこの上ないが、ないよりはましだろう。

再び歩き出すミリアの後に、ひたすらについていくと、隅のほうに小さな　　といつても、生きている人たちにとっては普通の大きさだ　　黒い扉があった。

扉には『関係者以外立ち入り禁止』という白地に赤い文字の看板が、敢然と張られていた。この先がミリアの仕事場なのだろう。

「じゃあ、行くわよ。下手な演技でバレないようにね」

即座に脳裏に浮かんだのは、僕への弁解に失敗して、慌てふためくミリアの姿だった。

「それはこっちの台詞だよ」

僕のぼやきに頬を膨らませつつ、ミリアは扉のノブに手を掛けゆつくりと開けた。

「おいっ、資料が足りないぞ！」

「ビデオの編集作業、もうちょっと早くできないのか！」

「ちよつとだれか！　コピー用紙の買い出しに行ってきたよ！」

事務所に入ると大声が飛び交いながらも、赤、青、紫などの腕章をつけた人が、せっせと走り回っていた。

ミリアは天界の仕事は暇潰しのようなものだと言っていたが、この様子をみる限りでは、生きている人達よりも働いているような気がする。

「どうしたの？ ポケーツとつつ立つて。なんかあった？」

「いや、忙しそうだなって思ってた……」

僕にそう言われて、ミリアは辺りを見回す。

「そうかな？ いつもこんな感じだと思うけど……」

どうやら天界の仕事も楽じゃないらしい。

「さっ、こっちょ」

言われるままに、仕事をしている人々の合間を縫っていくと、背後から声がかかった。

「おい、ミリア！」

目に見えてミリアの体が痙攣した。なんだか嫌な予感がある。背後から近寄ってきたのは、三十代前半ぐらいの男性だった。ミリアと同じ白いローブに緑色の腕章。どうやら仕事仲間らしい。

「あ、カ、カルバドスカ」

「珍しいな。仕事が終わってるのにまだいるなんて……」

「えっ、あっ、うん、ま、まあね」

やはりミリアは嘘をつくのが苦手らしい。この返答で、動揺していないことに気づかないほうがおかしいだろう。

カルバドスと呼ばれた男性もそう考えたらしく、首をかしげている。そして僕の顔と腕につけた腕章を交互に確認する。

「ん？ だれだこいつ……案内人の腕章をつけてる割には見かけない顔だな」

「あ、この子はね、そのう……」

指先をクルクルと回転させながら、にっこりと微笑む。この光景は危険としか言いようがない。

「あ、あのですね」

一歩踏み出しながら、口を挟む。カルバドスの注意が僕へと向けられた。

「僕は鷹野信也というものです。このたび命を落としたため、こちらで案内人の仕事をする事になりました。それで仕事をミリアさんに教わったところなんです」

「なんだ、そうだったのか。そうならそうと早く言えよミリア」

ミリアは頭を掻きながら、乾いた笑いを発している。これ以上なにも言いそうにないのが幸いだ。

「おれはミリアの同僚……つまり君とも同僚になるカルバドスってもんだ。まあこれからよろしく頼む」

「こちらこそ、若輩者ですがよろしくお願いいたします」

「おお、礼儀正しい子じゃないか。ミリア、しっかり仕事を教えてやれよ？」

ミリアの肩でカルバドスの手が弾み、そのまま豪快に笑いながら去っていった。

「ふう……」

額にかいていた汗を拭って、ミリアを確認する。どうやら相当なピンチだったらしく、がつくりとうなだれて覇気がない。

「ミリア、大丈夫か？」

「なんとかね、相手がカルバドスで助かったけど……とんだ貧乏くじだわ」

諦めたように首を左右にふり、ミリアはまた仕事場を進んでいった。

その後はなんとか知り合いに出会わず、目的地にたどり着いたようだった。

10月25日(8)

小さな一室へと入ると、ミリアは即座に鍵を閉めた。そして安堵の息を漏らす。

「さてと、適当に座ってて」

部屋の中央に置いてあるソファをあぐでさすと、ミリアは備えつけのパソコンでなにやら入力し始めていた。

言われたとおりに座り、中の様子を確認する。青いソファとテレビ、ビデオにパソコン。それ以外のものはいっさいないシンプルな部屋だ。

「お待たせ」

パソコンから離れて僕の元へと歩み寄る。手には一本のビデオテープが握られていた。

「なんだよ、それ」

「優美ちゃんの死ぬ瞬間が、収められたビデオテープよ」

「山倉が死ぬ瞬間!？」

ソファから立ち上がり、ミリアの手からビデオテープをひったくる。ラベルのところには『山倉優美 享年十七歳』と書かれていた。

「中界には現界人の一生の映像があるのよ。その映像を見て生前の資料を作成したり、死んだ瞬間だけを編集してまとめたり、それが中界の人達の仕事ってわけ」

「それが、死んだ瞬間をまとめたビデオだってことか？」

ミリアは肯定の代わりに、にっこりと微笑んでみせた。

「そういうこと。本来これはわたしたち案内人が見て、死んだ人たちを迎えにいたり、死んだ場所を確認するのに使うんだけどね。時には死因を説明して、死んだことを認めさせることもあるけど」

「じゃ、じゃあ、僕が死んだ瞬間の映像もあるのか？」

「もちろんあるわよ。見なくてもわたしが教えてあげられるけどね。」

なにかあつたか知りたいの？」

興味はあつたが、僕は首を横に振った。大型トラックに轢かれたのは覚えているし、今となつては山倉の死因のほうが重要だ。

ビデオをミリアに返すと、

「それじゃあ再生するからね」

と、備え付けのビデオデッキへと入れる。砂嵐状態だったテレビが真っ暗になると、目の疲れそうな、ぼんやりとした映像が浮かび始めた。

なにかの会場らしいが、天井付近からの映像になっているためにどこなのかはよく分からなかった。

「ここは信也君たちが、修学旅行で行く予定の、サーカス会場だよ」
ミリアの説明を聞いてから、改めてテレビを見やる。確かに舞台らしき場所にスポットライトが当てられており、そこを囲むように観客席が備えてあつた。

そういえば、修学旅行の二日目にサーカス見学というのがあつた気がする。

『ツーリスト』という名のサーカス団で、精密製の高い演技とダイナミックな迫力が人気を呼び、今では世界で三本の指に入るといわれているそうだ。

旅行の行き先と公演日時が重なつたため、気を利かせて校長先生が、人数分を予約したという話を聞いている。

「それで、山倉はどこに？」

「あとで説明してあげるから、今は映像を見ときなさい」

一喝され、しぶしぶテレビへ視線を戻す。

次々と繰り出されるサーカス団の妙技に、観客席から歓声と拍手が巻き起こっている。

刹那、会場の隅から光が差し込み、スピーカーであろうかすれた音声、会場内に響いていた。

「会場の皆様！ 落ち着いてください！ ただいま場内に爆弾が仕掛けられているのを発見いたしました！ すぐさま避難していただ

けるよう、お願い申し上げます！」

楽しかったサーカスの時間は、突然の爆弾宣言により終止符が打たれた。一瞬にして阿鼻叫喚に包まれた会場から、脱兎のごとく逃げ出していく人々の影。

「まだ時間があります！ 落ち着いてください！」

団員の声も叫び声にかき消され、あまり意味を成してないように見える。

しばらくすると、会場内から人々がいなくなった。少なくともテレビ画面内には。

「よし、全員退避したか！」

サーカスの責任者らしき人の声が聞こえてきた。それに答える

「はいっ、団長！ いや、まだあそこに女の子が！ 早く逃げるんだ！」

一時の間が空いて、同じ声が聞こえる。

「どうやら骨折で動けないようです。助けに行きましょう！」

「ダメだ。もう間に合わん。早く退避しなければ我々も命を落としてしまう」

「で、ですが！」

「緊急避難だ。これ以上、団員を危険な目に遭わせるわけにはいかん！ 退避しろ！」

それを最後の言葉に、複数の足音が小さくなっていく。

それから十秒ほどして、轟音と共に画面内が赤黒い光に包まれる。そこで映像は終わりだと告げるように、砂嵐へと戻っていった。

「と、ということなの、分かった？」

「いや、頭の整理だけで精一杯だ」

正直に感想を告げる。するとミリアは詳しい状況について説明してくれた。

「現場には爆弾がいくつか設置されてて、そのうちの一つをサーカス団員がみつけたの。現界ではテロ目的とか、ツーリストに対する恨みとか、いろんな推測が飛び交ったけど、結局は目的不明のまま

事件は迷宮入り。だけど、中界で仕事をしているわたし達には分かるのよ」

ミリアはコンピュータを再び動かし、中界のデータ呼び出していた。僕をコンピュータの元へと呼び、内容を確認させる。

そこには、まったく知らない男のデータが並んでいた。死因の部分を指差すミリアに従い、声を出して読み上げる。

「自殺をしたいが一人で死ぬのが怖いという理由で、サーカスの会場に爆弾を仕掛け、その爆弾で死亡!？」

胸に衝撃が走り、コンピュータから二、三步あらずさる。ミリアはくるりと僕のほうを振り返り、冷たく言い放った。

「現界ではこの人も爆弾に巻き込まれたと思われていたけど、そうじゃなかった。この人は自らの意思で爆弾を仕掛け、爆弾によって死ぬことを望んでいたのよ」

「それが山倉の死因……」

「そういうことね。まっ、偶然とはいえサーカス団員が爆弾を見つけてくれたおかげで、死者は三人で済んだんだけどさ」

平然と答えるミリアに、思わずつかみかかりそうになるのを必死にこらえる。

ミリアは、何も悪くないのだ。

「優美ちゃんはサーカス見学のと、一番前の席にいたの。普段の優美ちゃんならすぐに逃げ出せたでしょうけど、骨折が原因で入り口まで逃げ切れなかった」

「……なんで山倉が一番前の席って知ってるんだ？」

浮かんた疑問をそのままぶつける。先ほど見たビデオの内容ではサーカス会場の全景を映しており、山倉の席までは確認できなかったはずだ。

だが、ミリアは事もなげに答えていた。

「普通にわたし達が見るときは、死んでしまう人をアップにしてみるからね」

「だったら最初からそっちを見せてくれれば早かったじゃないか！」

僕が反論すると、ミリアの瞳からフツと輝きが消える。冷たくにらみつけてきたミリアの視線で、全身に鳥肌が広がっていった。

「見たいんだ。信也君の大好きな優美ちゃんが、爆弾でバラバラに吹き飛ぶ瞬間を。普段から人の死に触れているわたしですら、吐きそうになった映像をさ」

無意識のうちに、僕の喉がこもった音を鳴らす。そんな瞬間など見るのはもちろん、想像すらしたくなかった。

「ごめん……」

「いいのよ。分かってくれば」

口ではそう言いながらも、言葉にはとげがある。もう一度僕が謝ろうとすると、ミリアはポンと手を打った。

「そうそう、信也君が死ぬ瞬間のビデオを見た時はね。ありがちな死に方だねえって笑いながら、お煎餅をかじってたわ」

「な、なんだよそれ！」

「だって交通事故でしょ？ まっ、子どもの命を救ってるんだし、無駄死にじゃなくてよかったじゃない」

僕の肩を軽やかに叩きながら、ミリアはケラケラと笑ってみせた。

10月25日(9)

そのまま反論する間を作らず、僕の手を引っ張っていく。

「これで優美ちゃんが死ぬ理由は分かったでしょ？ エンマ様のところへ行こつ！」

部屋から出て足早に仕事場を駆けていく。幸いなことに帰り際にミリアの知り合いと会うことはなかった。

必死に考え込んでいると、そのまま最初の赤い門へとたどり着いていた。

「さつ、いよいよエンマ様とご対面ね！」

立ち止まったミリアに意を決すると、緑の腕章を返しながら、恐る恐る尋ねた。

「なあ、ミリア。どうにかして山倉を救えないかな？」

突然の申し出に、ミリアはあいた口がふさがらないようだ。

「じゃあ聞くけど、信也君は優美ちゃんを救う方法があると思う？」

逆にミリアから問われて、僕はあっさりと言葉を失った。もしそんなことができるのなら、すべての人間は老衰でしか死なくなるだろう。

「もし可能性があるとするなら、優美ちゃんが死ぬ理由を知っている人だね。もっとも現界人限定だし、いるわけないんだけどさ」

予想通りとはいえ、シヨックは隠せなかった。もうすぐ山倉が死ぬ。それは確定事項らしい。

「さつ、行くわよ」

山倉の死に捕らわれて意識の飛んでいた僕を、再びミリアが引っ張った。さきほどまで閉じていた巨大な赤い扉は、わずかな隙間を作っている。

中に入ると、白いローブに緑の腕章をつけた人と、腕になにもつけてない人が二人一組で座っている姿が多く見られた。なにもつけていない人は僕と同様に死んでしまった人達だろう。

どうやらここはエンマ様の判決を受ける前の待合室のようだ。

五十人はゆうに座れる椅子が所狭しと配置されており、中央に聳え立つ太い石柱が、妙にとげとげしい圧迫感を与えてくる。

奥には入り口と同じ大きさの扉が、敢然とその姿を見せつけていた。

辺りで順番を待っている二人組みを観察すると、案内人と会話をする人、僕と同じく辺りを物珍しく見回す人、ただ呆然としている人など多種多様だ。

ミリアは多々ある椅子の中から、一つの椅子を選んで座っていた。僕も慌ててその隣へと腰をかける。

「ねえ……」

待ち時間の間、暇つぶしに天井を眺めていると、ミリアの耳打ちが入る。

視線を向けると、目を潤ませながらミリアは両手を合わせて哀願していた。

「さっき見せたビデオだけど、他の人には絶対に内緒だからね？」

部外者に機密事項である死因のビデオを見せたとなれば、こうなっちゃうんだから」

指二本をまつすぐに伸ばし、素早く首筋を横切らせる。仕事を首になるのか、実際に首と胴体が離れるのか　真相は分からなかったが、悪い結果を生むのだけは間違いないだろう。

返事もせず、再び天井を見上げる。紅に染めた木で造られた屋根裏は、死ぬ前に溢れ出た鮮血を蘇らせた。

「ねえ、ちゃんと聞いているの？　信也君には無関係かもしれないけど、わたしにとっては死活問題なんだからね！」

「ああ……」

横から肩を揺さぶられ、天井を眺めたまま適当に相槌を打つ。

この色があと数日で、山倉の体から溢れ出るのか　。

頭をよぎった一つの疑問は、ほんの数秒で愚問だと理解できた。なぜなら、僕が実際に死んでいるから。

人間はいつ死んでもおかしくない。僕はそれを身をもって経験してしまった。あのビデオは本物で、山倉はサーカス会場で死んでしまうのだ。

自然と涙が滲み出してくる。ミリアはすぐに一緒になれるから嬉しいだろうと考えているようだが、そんなわけがない。

愛する人が死んで、嬉しいと思う人間がどこにいるのか。助けたい、どうにかして山倉を救いたい。約束を果たすのは今しかない。

だが、つのる想いは空回りするばかりでなにも変わらなかった。

ミリアの言った通り、死んでしまっただけは何もできはしない。それは霊安室で嫌というほど痛感している。

想いだけは全身に広がっているものの、想いだけでは誰も救えない。行動できなければなにも変わらないのだ。

その大切な行動という名の翼は、すでに折れてしまっている。飛べない鳥がどうやって、死にそんな仲間を救えるというのか。

「信也君、順番が来たみたいだよ」

ミリアに声をかけられ、ようやく我に返った。流れる涙を、慌てて拭う。

辺りにいた二人組みの姿は、先ほどとは違う人々へと入れ替わっている。

奥に進むと、そこには入り口と同じ大きさの扉があった。度重なる来客のためか、すでに扉には隙間が開いている。

「失礼します！」

僕と話しているときにはありえないはつきりとした喋りで、ミリアが先に入った。

「失礼しまあす……」

くぐもった声で、僕もそれに続く。

中に入ると正面には なにもなかった。

灰色の壁が目の前に広がるだけで、エンマ様はおるか、猫の子一匹の姿も見えない。

10月25日(10)

「どうなつてんだ？」

ミリアに訪ねると、ミリアは返事をせずに斜め上を見上げた。

「……え？」

そこには、巨大なエンマ様の姿があった。灰色の壁と思ったものは、どうやらエンマ様の机らしい。

だが、想像とは違うエンマ様だった。

確かにでかい。身長は三十メートルは軽くありそうだし、黒目がちの大きな双眸と裂けた口は、相手を凍結させてもおかしくない迫力を感じさせる。

だが、その他の部分はかなり貧弱だった。

顔も体も腕もか細く、全身の肌は青白い。前歯には治療済みの銀歯もある。

「なあ、ミリア」

「何よ、もう」

「あれが、エンマ様か？」

「他にだれがいるのよ」

イライラしながら、ミリアが僕の問いに答える。

「だってさ、もっとこう肌も赤黒くて、牙が生えてて、筋骨隆々で……」

「あの方は紛れもないエンマ様、この中界を統べる偉い人よ」

「でもさ、金槌で腕をおもいきり叩いたら、ポキッとかいって折れちやいそうだぜ？」

「そんなの無理よ。だって……」

「内緒話で花を咲かせるのも結構だが、そろそろ仕事に移ってもよいかな？」

最後に聞こえたのは、姿に似合わないドスの利いた低い声だった。「も、申し訳ありません、エンマ様！」

慌ててミリアが頭を九十度に下げる。

「これじゃ、どっちがエンマ様と初対面が分かんないな……」

ミリアの慌てぶりに失笑していると、

「ほら、信也君も頭を下げて！」

僕の頭を乱暴に押さえつける。なにを慌てているのか分からないものの、とりあえずは大人しく従っておいた。

「さて……君が鷹野信也君だな？ 自己紹介をしてもいいが、すでに話は聞いているだろう？」

「ええ、まあ……」

「ならば省略させてもらおうとしよう。一人一人に自己紹介するなど、大変だからな」

ざつくばらんな紹介を済ませると、エンマ様は灰色の壁に見える机の上に積まれた大量の紙の中から、一枚の紙切れを取り出す。

紙切れといってもエンマ様の体格に合ったもので、人間大の大きさは楽にありそうだ。

その紙切れの上から下まで目を通し、うんうんと何度も頷いてみせる。

「ほう、今どき珍しいほどの好青年だ。文句なしで天界行きだ。よかったな」

「ほらね、言った通りだったでしょ？」

なぜか自慢げに胸を張るミリア。まるでミリアのおかげで天界行きが決まったかのような態度だ。

「ほら、天界はこつちよ。早く行きましょ」

微笑んだミリアが、僕の肩を叩く。

だが、僕は未だに迷っていた。このまま数日後に来る山倉を笑顔で迎えることが、僕にできる最高の行動なのか。

と、突如脳裏に電撃が走る。確かに僕は行動という翼を折られた。だが、それは生きている人々の世界での話だ。

死者の世界では、僕の翼はまだ大きくはばたくことができる。ダメだ、やっぱりこのまま天界になんて行けない！」

「えっ？」

ミリアが事の重大さに気づく前に、素早く行動に移る。山倉を救うことに繋がらなかったとしても、まだできることがある。それが嬉しくてたまらなかった。

「エンマ様！ お願いがあります！ 山倉を助けてあげてください！」

「わっ、ちよっ、バツ、なっ、何を言ってるのよ！」

慌てて僕の口を塞ごうとするミリアをかわしつつ、僕は土下座した。どこからか鈍い音が聞こえてくる。

頭を床にこすりつけ、懇願を続ける。わずかな可能性でも、ゼロではないと信じて。

「エンマ様なら一つぐらい、死ぬ定めの人を助ける方法を知っているでしょ！ お願いします！ 僕は地界に落ちてもかまいません！ 山倉を殺さないでください！」

「ミリア、これはどういうことだ？」

僕の質問よりも、現状を理解することの方が先と考えたのか、ミリアへと問いたです。

声は冷静ではあるものの、胸の内は怒りで一杯らしい。それを表すかのように、エンマ様の全身が変化していった。

肌の色が赤黒く、大きく裂けた口から牙が生え、全身が筋骨隆々になる。僕が というよりも、生きている人が想像している恐ろしいエンマ様だ。

大地を揺るがす振動、全身を押さえつけるような強烈な圧迫感。

これでこそ中界を統括するエンマ様というものだろう。

「えっ、その、ア、アハッ、アハハハハ」

引きつったミリアの笑いは、まるで子どものおもちゃだった。それも子どもの遊ぶ意思とは関係なく動き続ける壊れたおもちゃだ。

「ミリア、ごめん。僕は山倉が死ぬのを指をくわえて待つてなんて無理だ。山倉を救うって、約束したんだ」

「アハ、アハハハハ、ハア……」

ようやくぜんまいの力が途切れたのか、ミリアは力なくその場に膝をついた。小さく何度も体を震わせながら、しばみかけの風船のように細かく息を漏らしている。

「お願いします！　お願いします！　どうかして山倉を死なずに済むようにしてください！」

再び床に頭をこすりつけ、何度もお願いしますを連呼した。

「分かった分かった、話だけでも聞こうではないか」

僕の想いが通じたのか、エンマ様からそんな言葉が漏れる。頭を上げてみると、エンマ様の顔は固く険しかった。だが、簡単に引くわけにもいかない。

大量に積んである紙の中から、再び一枚を取り出す。その紙を眺めながらエンマ様は質問をしてきた。

「君はなぜ、この山倉優美という女の子を救いたいのかね？　言っておくが、自分が好きだからというのは理由にならないからな。愛する人が死ぬというのは、だれにとってもつらいものだ」

もしかしたら……そんな想いを胸に抱きながら、僕は懸命に答えた。山倉を救える可能性を生み出せるかどうか　すべては僕にかかっている。

「山倉はいつも明るくて、笑顔で　だけどそれは、自分を犠牲にしてまで他人の幸せを考えての行動なんです。自分が苦しくてもそれを黙って耐えて、僕たちのために力を尽くしてくれて　そんな山倉が死んで嬉しい人なんているとは思えません！」

お世辞にも上手とは言えない言葉に感情をあらん限り乗せて、エンマ様へと気持ちを訴える。エンマ様はそんな気持ちを知ってか、真剣な眼差しで話を聞いていた。

「そんな優しくて頼もしい山倉が、臆病で自殺願望を持った、人命の重さもわからない男の巻き添えで、死んでしまうなんて納得できません！」

その時、うなだれていたはずのミリアからの視線を感じた。もしかしたら僕の話に聞き入って、感動しているのかもしれない。

そのおかげで、僕は少し落ち着きを取り戻せた。声のトーンを下げてから続ける。

「山倉は、とってもいい子なんです。生きていれば絶対に生きている人達に良い影響を与えてくれます。そんな彼女が死んでしまったら、世界にとつて大きな損失です！」

「フフ、フハハハハ！」

今まで黙って聞いていたエンマ様が、突然大声で笑い出していた。口から吐き出された息が、僕の髪をなびかせる。

「おっと、すまない。世界の損失などと大きなことを言うので、ついな」

謝りながらも、まだエンマ様の口元はほころんでいるのを、僕は見逃さなかった。

エンマ様は腕を組むと、座っている椅子へとよりかかったようだ。椅子の姿は確認できないが、のけぞるような仕草に合わせて金属のきしむ音が聞こえてくる。

10月25日(11)

「なるほど、君の気持ちは十分に伝わった」

「じゃあ！」

喜んだのもつかの間、すぐさまエンマ様は首を横に振った。

「だが、決まっている死は変更できない。ミリアもそう言っていただろう？」

ミリアを見やると、目に涙を浮かべながら頷いている。エンマ様の話を聞くまでもないといった態度だ。

自然と肩が落ちていく。分かっていたとはいえ、自分の無力さがはがゆかった。

山倉が数日後に、ここへ来る。

僕はいつたいどんな顔で、山倉を迎えればいいのだろうか？

ふいに浮かんだ疑問の答えを、数日の間に導き出すことができるのだろうか？

頭の中で渦巻く疑問に、動きを止める。すると、突然エンマ様はフツと笑ってみせた。

「決まっている死は変更できない。その代わりに、死を回避するチャンスをお前にあげたいと思う。どうかね？」

「エンマ様！？」

声を上げたのは僕ではなくミリアだった。

目を見開いて、小さく何度も首を振っている。信じられないといった感じだ。

「そうだな、一週間もあれば十分だろう。今から三日前　十月二十二日まで時間を戻そうではないか。それから山倉優美が死ぬ二十八日までの一週間、君は山倉優美を救うために全力を尽くすというのはどうだ？　もちろんいくつかの条件はあるが、悪い話ではあるまい？」

悪い条件どころか、これ以上の条件はないだろう。通常ではあり

えないチャンスというのは、ミリアを勘ぐれば容易に理解できる。

「は、はい！　ぜひやらせてください！」

二つ返事で返答すると、エンマ様は満足げに頷いた。

「彼女の運命を知る君なら、助けてあげられるだろう。では今から、条件について説明する」

喉の奥で、ゴクリと音が鳴る。どんな無茶な条件で受け入れなければ、山倉を救えないのだ。

「まず一つ目。君は一時的に生き返ることになるが、それはあくまで一時的だ。山倉優美の死ぬ二十八日には、再び君はここに来る。山倉優美を救えても、救えなくてもだ」

これは当然といえば当然の条件だ。本来ならすでに死んでいる僕が、完全に生き返るなどありえない　まったく期待していなかったといえは嘘になるが。

「次に山倉優美を救えなかった場合、君には地界に落ちてもらう。もちろん天界に行く予定の山倉優美には二度と会えないだろう。愛する人を救えるチャンスを逃すというのはそれだけで罪であるし、考えが変わって天界と一緒に暮らせばいい　などと考えてもらっては意味がないからな」

「そんな妥協は、絶対にありません！」

エンマ様も冗談だったのだろう。僕の抗議に反論も否定もしなかった。ただ、肯定もしなかったところは少し気がかりだった。

「一つ言っておくが、地界は甘くないぞ？」

「えっ？」

「ミリアからも説明があっただろうが、詳しく話してやる。まず地界に落ちた人間は舌を抜かれる。地界の人間同士で喋ったり、愚痴をこぼしたりできないようにな。そして無意味な肉体労働を毎日繰り返し、少しでも手を休めれば鬼達の鞭が飛ぶ。もちろん簡単には殺したりしないが、それでも勢いあまって殺す時がある。それが地界に落ちた人間の、安らぎの瞬間だ。それをきちんと理解してほしい」

僕は思わず生唾を飲んだ。手足が震えだすも、首だけは縦に振った。

「そして三つ目、これが最後の条件であり、最も重要な条件だ」再び喉が音を鳴らし、右腕が震えだす。僕は左手で右腕を押さえつけたが効果はなく、両腕が震えだすだけだった。

「天界、地界、中界など、死後の世界について語るのをいつさい禁止する。それに伴い、山倉優美の運命についても他言できない」

「山倉本人に伝えても行けないのですか？」

「当然だ。これを破ればその時点で君は中界へと強制送還される。もちろんなにも知らない山倉優美は死に、君は地界行きだ」

僕は黙って頷いたが、頭の中ではどうすれば山倉を救えるかという問答で一杯になっていた。

山倉が修学旅行で死ぬなら、修学旅行に行かなければよい。これは誰でも思いつく単純な救助方法だ。

そのために僕は、山倉を説得するつもりでいた 身に起こる不幸を説明して。

もちろん簡単には、信じてもらえないだろう。もうすぐ死ぬから修学旅行に行つてはいけないなんて戯言を、瞬時に信じるとは思えない。

ただ、山倉の性格ならば納得してくれるという自信があつたたとえ疑心暗鬼にとらわれていたとしても。

必死で訴えてくる言葉を、山倉が無碍にするととは思えない。修学旅行が終われば分かると説得すれば、納得できずとも受け入れてくれるはずだ。

だが、山倉に死の運命について話せないとなると、話は変わってくる。

真摯な気持ちを通じるのは、それに相応する理由があるときだけだ。理由もなしに修学旅行に行くなど言えば、それは単なる嫌がらせだ。山倉だって相手にしないだろう。

だからといって、条件を飲まないわけにはいかないのも確かだった。

た。

山倉が死ぬのは今の時点で百パーセント確定事項だ。それを回避するには、エンマ様の出した条件を飲むしかない。

「わかりました。条件は守ります！　そして山倉を救ってみせます！」

意を決して、エンマ様を見上げる。エンマ様も僕の返答を聞き、満足したようだった。

そのためか、今までの赤黒い体からゆっくりと最初の青い貧弱な体へと戻っていく。

「よく言った。では特に質問がなければ三日前に君を送るが？」

エンマ様の問いに、僕はある人物の存在を思い出していた。

視線を移すと、ミリアは涙を目に溜めながら、手を組んで僕に祈りを送っている。

そんなミリアにっこり微笑んでみせてから、僕はエンマ様へと告げた。

「特にないです」

「信也君！」

「冗談だよミリア。あの、ミリアが罰を受けることになるんじゃない……」

エンマ様はあごひげに触りながら、ミリアを一瞥した。

「心配せずともよい」

「よ、よかった……」

安堵の声が、ミリアのほうから聞こえてくる。それは僕も同じだった。たとえ山倉を救えたとしても、今回の事件が原因でミリアが死んでしまったては夢見が悪い。

だが、エンマ様の言葉には続きがあった。

「大した罰ではない」

「えっ、えええ！」

安心してしまった分、驚きも大きかったようだ。僕を指差して、口をパクパクさせていると、見事にエンマ様の雷が落ちていた。

「機密事項を漏洩しているんだ。罰があるのは当然だろう！」

「うつ、うつ……」

僕へ向けられていた指が、力なく下がっていく。どうやら観念したようだ。

「では、三日前に君を送り届けよう。一週間必死で頑張るんだぞ」

エンマ様が手をかざすと、僕の体が光に包まれていった。気だるさが全身に少しずつ広がり、まぶたが重くなっていく。

「帰ってきたら覚えてなさいよ！」

ミリアの叫びが、意識を失う直前の耳へと届いていた。

10月22日(1)

十月二十二日 水曜日

気がつくと僕は、レンタルビデオ屋にいた。周りにはカップルや学校帰りの学生が、ビデオやCDをあれこれ探索している。

そんな様子を眺めながら、僕はふと思考を張り巡らせる。最初に考えたのは時間が戻ったという記憶についてではなかった。

「今までの記憶は、夢だったのか？」

疲れが溜まっていて、白昼夢を見たという可能性もある。いや、その可能性のほうが高いだろう。

天界に地界、中界にドジな案内人、改めて思い出しても馬鹿げている。

顎に手を当てて思考を繰り返す。まるで夢だという検察側と、夢ではないという弁護側が裁判を行っているようだ。

結論が出ないまま、レンタルビデオ屋の中を歩く。そういえば今日は、いま話題の洋画を借りに来ていたのだ。

大量に並ぶその洋画のビデオを、手にとってみる。だが、おかしなことに、拍子を見ただけで内容が把握できてしまった。

どこで主人公がピンチになるか、どうやって切り抜けるか、ラストはどう終わるか　一つ一つ説明できる自信があった。

だが、僕は今日この洋画を借りにきたわけで、一度だって見ていないはずなのだ。

「やつぱり……さっきまでの出来事は……」

もう一度だけ、脳を回転させる。とりあえず、今日の日付の確認をした方がいい。

レンタルビデオ屋のカウンターには、今日の日付と返還予定日が書かれた、プラスチック製のカレンダーが置いてあった。

そこには十月二十二日 水曜日と記されている。やはり今日は洋画を借りに来た日に違いない。

となると、考えられるのは、すでに洋画を見ており、夢でなく本当に死んでいて、時間を戻されたという可能性……。

「いやいや、そんな馬鹿な……」

まるで自分に言い聞かせるように、声を出して呟く。自分の記憶違いなだけかもしれない。

いろいろと悩んだ結果、僕はその洋画を借りて、家へ帰ることにした。その内容を確認すれば、全ては明らかになる。

もしもまったく知らない内容なら、僕の思い過ごしであるという証明になるし、もしも予想通りの内容なら、その時は……。

カウンターで手続きを終わらせ、家へ帰るために足早に出口へと向かう。

と、なぜか背後から、明らかに僕に向かって近づいてくる足音があつた。

顔を向けると、そこには一人の女性が歩いていた。肩までの黒髪は手入れが行き届いているのか、ふんわりとしたボリュウムをもっていた。

宝石のように輝く瞳と、モデルを思わせる完璧なスタイル。素足で履いている高いヒールが大人の魅力を存分に感じさせた。

その女性の視線は、確実に僕を捕らえている。だが、僕にとってその女性は赤の他人であり、見覚えもなかった。

10月22日(2)

「あの……何か？」

恐る恐る問いかけると、女性はニツコリと微笑んでいた。友好的な態度にこちらも微笑み返す。

だが、次の瞬間には女性の蹴りが、僕のすねを的確にヒットしていた。

「つつ！」

声にならない悲鳴を上げ、蹴られた脛を押さえる。そんな僕を女性は仁王立ちで見下ろしていた。

「ふんっ、ざまあみなさい！」

「ひ、人違いじゃないかな？　僕はあなたのこと知らないんだけど……」

怒りが胸の内では躍っていたものの、冷静に対処する。なにかの間違いに決まっているのだ。

だが、女性の自己紹介は、僕が明白な関係者であることを示していた　同時に蹴られた理由も。

「わたし、ミリア＝ミリスだよ」

「ミ、ミリアだって！？」

「そっ、なんでわかんないかなあ……」

そういつて、ブツブツとなにやら呟き始める。この行為は明らかにミリアのものだ。

だがミリアの姿は、中界にいた頃とは声も姿も似ても似つかなかった。これでミリアだと分かれば相当な目利きだ。

「なんで、なんでここにいるんだよ？」

「これがエンマ様の言う罰なのよ。現界で一週間の間、信也君のサポートをしながら一緒に暮らすんだって」

罰の対象と一緒に暮らす　いったいどんな家だと思われてるのだろうか　そんな考えが浮かぶと同時に、一緒に暮らしている人

物の顔が浮かび上がる。

「一緒に暮らすって……母さんにはなんていうんだよ」

一瞬、霊安室で死体を殴打する姿が脳裏に浮かんた。涙が流れそうなのをグツとこらえて、ミリアの返答を待つ。

「えっと、なんでもわたしは信也君のお姉さんになってるらしいよ」

「姉じゃなくて妹の間違いじゃないのか？」

「ちよっと、それどういう意味!？」

ミリアが心外だとばかりに、頬をぶつくりと膨らませる。

そして仕返しとばかりに、口元を緩ませながら、

「まっ、いいわ。とりあえず、信也君が死んだのは間違いないから簡潔に述べる。一時中断していた裁判は、一瞬にして弁護側の勝利で終わっていた。」

「それから、わたしはサポートでこの世界に来たから、これから起こる未来や、信也君や優美ちゃんの運命、全部知ってるからなんでも話していいって。中界とか天界の話もね。そんなわけで、これから一週間よろしく!」

そう言うのと、ミリアは元気よく右手を差し出してきた。

死んだという現実には悲しいが、この一週間を乗り切るために、ミリアが頼りになるパートナーであるのは確かだ。

「ありがとう、助かるよ」

素直にお礼を言いつつ、握手を受ける。心の中ではエンマ様へのお礼も続いた。

だが、ミリアは口元に手をやると、僕の感謝の念を打ち砕く一言を告げた。

「まっ、いつでも相談してよ。わたしはバカンスだと思って楽しんでおくからさ」

「気楽に考えすぎでないか？」

「気楽に考えてるわよ。信也君が成功しようが失敗しようが、わたしには無関係だもん」

全身を強打されるような衝撃を受ける。本当に頼りになるんだろ

うか……。

失敗した暁には、どうにかしてミリアも道連れにしなければなら
ない　などと、ひそかな企みを胸に秘めつつ、出口へと向かって
歩き出す。

「ちよつと、どこ行くのよ」

「山倉の家さ。可能性は低いかもしれないけど、うまく話せば修学
旅行へ行かないよう説得できるかもしれない。いや、しなくちゃい
けないんだ！」

「そそつ、その意気よ。わたしが協力するんだから成功間違いなし
！　大船に乗ったつもりでいなさい！」

その自信はどこから来るのだろうか　泥舟でないことを切に願
う。

僕とミリアの二人はレンタルビデオショップを後にした。キヨロキ
ヨロするミリアを適当にあしらいながら、早足で目的地である山倉
の家を目指す。この調子では山倉の家にさぞかし驚くことだろう。

「ここが……優美ちゃんの家？」

「ああ……」

予想していた通り、ミリアは目を丸くしていた。

身長の倍はあるアーチ状の正門は、アコーディオンドアによつて
進路を防いでいた。玄関まで伸びる道は両脇が木々で囲まれており、
林道を思わせる。

ただ大きいというよりも、巨大という言葉のほうがよく似合っ
ている。

山倉は山倉の両親が一代で作り上げた会社の令嬢なのだ。

「ここに優美ちゃん、一人で住んでるの？」

「よく分からないよ。なんだか複雑な家庭環境みたいだし」

「そんなことも知らないの？」

「悪かったな」

嘆息気味に、ミリアが首を振る。どうやら呆れているようだ。

山倉と僕は生前、特に仲がよかったわけではない　というより

も、これからという時に死んでしまったのだ。

ただ病院での会話を聞く限りでは、山倉と両親が時間を共有して過ごしているとは思えなかった。

家も三村から場所を聞いていただけで、実際にくるのは二回目、インターホンを押すのに至っては今日が初めてだ。

「今から山倉を説得してくるから、ミリアは先に帰ってろ」

「ええ！？ それはないでしょ！」

「ミリアがいると話がややこしくなるだろ。ミリアの紹介とか関係とか説明が難しいし、なんで一緒に来たのかも分かんないだろ？」

「やだっ、ここにいてわたしも優美ちゃんを見る！」

こうなると、ミリアはてこでも動きそうになかった。仕方なく僕はミリアの肩に手を乗せながら、山倉の家を見上げる。

「じゃあ、こうしよう。ここにミリアがいてもおかしくない、上手な言い訳を思いつけたらいてもいいよ」

「えっ、えっ？」

「山倉にミリアのことを、説明しないってわけにも行かないだろ？ 僕が納得できる言い訳を考えてくれ」

「い、いいわよ。受けてたとうじゃないの」

うーんと唸りながら必死に考えるミリア。当然そんな言い訳を簡単に思いつくはずがない。それは短い付き合いでも、十分に把握できている。

「ブー、時間切れだ」

ころあいを見計らって告げると、ミリアは必死の形相で懇願してきた。

「あと一分……いや、三十秒でいいから！」

「ダメだ。先に帰って待っててくれ」

ミリアはふてくされながらも、しぶしぶ来た道を引き返し始めた。

「さて……」

ミリアが立ち去るのを確認してから、改めて山倉の家を見上げる。山倉を救うのは僕しかないという想いが、ふつぶつと沸き起こり

始めていた。

10月22日(3)

一度咳払いをしてから、震える手でインターホンのボタンを押す。押してから親が出てきたらどうしようという迷いが生じたが、聞こえてきたのは山倉の声だった。

「どなたですか？」

「あ、あの、同じクラスの鷹野信也だけど」

「……信也君？ ちょっと待ってね」

ドタバタと音がしてから、プツンと通信が途絶える音が聞こえる。しばらく待っていると、普段着であるうトレーナーにジーパンという格好で、駆けてくる山倉の姿が見えた。

「あつ、本当だ」

僕の顔を見るなり、山倉が微笑みながら呟いた。

「まさか、嘘だと思ってたの？」

「いや、なんていうかき。突然の訪問だったから信也君の名前を語る誰かになって気がしたの。悪気はないから気にしないでね」

確かに突然の来訪だった。先に連絡を入れておいたほうがよかったかもしれない。

山倉の電話番号は知らないが、三村に聞けばきっと知っている。

「ごめん、ちょっと急いでたから」

「別にいいよ。ちょうど退屈してたし。で、何の用？」

迷惑はしていないが歓迎もしていない。そんな面持ちで僕を見つめてくる山倉。いぶかしげな視線が、突き刺さってくる。

「その、頼みがあるんだ」

「頼み？ わたしにできるなら……もしかして、好きな女の子相手に、恋のキューピッド役でもやらせるつもり？」

口に手をやり、楽しそうに微笑んでいる。

だが、恋のキューピッド役なら、間違いなく山倉以外を選ぶだろう。

「いや、そうじゃないんだ」

「うーん、じゃあなんだろう？ 勉強はダメだよ？ わたし苦手だから」

「勉強でもないんだ」

「他にわたしができそうなことなんてないけどなあ。何を頼みたいの？」

考え込むのをやめて尋ねてくる。僕は意を決すると、両手を合わせた。

「修学旅行に行かないでほしいんだ」

「はひっ？」

まったく予想だにしていなかったのか、すっとんきょうな顔で固まってしまっている。

僕は瞬間的に土下座をして、頭を地面にこすり付けていた。

「理由はいえないけど、修学旅行に行かないでほしいんだ！」

簡単に理解してもらえないのは分かっている。それでもどうにかして納得してもらわなければならなかった。

「いや、その……とりあえず頭上げてよ」

「うん……」

山倉が僕の肩をつかむ。それに合わせて僕は体を起こした。

「鷹野君はわたしに、修学旅行へ行ってほしくないんだ」

「うん……」

「他の人は行ってもいいの？」

「うん……」

理由を話せないとはいえ、陰鬱な返事をしたのがいけなかった。

山倉は節目がちに、

「要するに、鷹野君はわたしが嫌いななの？」

口の中でもごもごと、力なくつぶやく。

「ちがう！ そうじゃないんだ！」

「じゃあどういうこと？ なんでわたしだけ修学旅行に行っちゃいけないの？」

「理由はいえないけど、修学旅行に行くと大変なことが起きる。それだけは間違いないんだよ！」

「じゃあ聞くけど、どうして他の人は行ってもいいわけ？ 大変なことが起こるんだったら、みんな行かないほうがいいと思うけど」

山倉の言うことはもっともな意見だった。本当の理由を言えない現状では。

「わたし、修学旅行をずっと楽しみにしてたんだから。理由もなしに行くなって言われてもね……」

予想通りの展開だった。やはり本当の理由を話さなければ納得してもらえそうにない。

もちろん本当のことを話した瞬間、僕は中界へと強制送還されることになるのだが。

「やっぱり、そうだよね……」

うつむいた僕の視界に、山倉の両足が入ってくる。

『あれ？』

胸中に違和感が沸き起こった。そしてそれが突破口へと変わるのに、そう時間はかからなかった。

「骨折してない！」

「へっ？」

山倉の肩をがっしりとつかむと、顔を赤らめていた。

「ちょ、ちよつと鷹野君？」

「山倉、骨折してないんだよな？」

「骨折？ してないけど……」

僕は後ろを振り向き、山倉に見えないようガッツポーズをしていた。すぐにまた、山倉と顔を合わせる。

「ごめんね、修学旅行に行くななんて変なこと言っちゃって。忘れていいからさ」

「そ、そう……」

「それじゃあまた明日、学校で会おうね！」

「えっ？ あ、うん、また明日……」

呆然としている山倉に手を振り、そのまま自宅へと走っていった。
僕の作戦が可能かどうかを、ミリアに相談するためだ。

10月22日(4)

すでに辺りは暗くなっているが、建ち並ぶ家から漏れる光のおかげで、真っ暗にはなっていない。

山倉の家から自宅まで、走って帰ると十分ほどで着く。

目の前にある我が家も、なぜか無性に懐かしい気がした。

「待つて、信也君」

僕が家の中へ入ろうとすると、背後から声が聞こえた。ミリアである。

「なんだ、まだ帰ってなかったのか？」

「うん、いろいろあつてね、信也君を待つてたんだよ」

「僕を？」

「自分の家になつてゐるついても、ちょっと不安だからさ。信也君と一緒に、さすがに追い返したりはしないでしょ」

「そりゃそうだけど。こんな時間に見知らぬ女の子を連れ込んだら、それはそれでボコボコにされそうだなあ……」

僕は自分で言いながら、少し怖くなっていた。ミリアが姉になつていなかったら、僕は母さんにどんな目で見られるだろうか……想像しただけで鳥肌が立った。

「ただいま」

「た、ただいま」

僕の背後から、おどおどした挨拶が聞こえる。

玄関に入ると、すぐ目の前には二階に上がる階段と、風呂やトイレへと通じる廊下がある。

右手には居間へと通じる扉、左手にある扉の先にはダイニングキッチン。

と、そのダイニングキッチンのほうから母さんが姿を現していた。

「おう、帰ったか。遅かったな？」

「うん、ちょっと寄り道してたから」

「学校が終わったらずくに帰れとは言わないが、あんまり道草くつてんじゃないぞ?」

母さんに注意され、頭をかきながら愛想笑いを浮かべる。

乱雑な黒い短髪に、白いシャツと紺のジーパンの格好、黄色のエプロンをつけているのは、夕食の支度の途中だからだろう。

大雑把な格好から想像できるように、母さんは男勝りな性格だった。いつも僕に男らしくない、父さんを見習えと愚痴を言う。

ただ、僕を大切に思ってくれているのは間違いない。僕が死んだ時に流れた涙が、その証だ。

父さんかというと、僕が小学校に入る前に亡くなっただけ。

となると、父さんも中界に行き、エンマ様の審判を受けたのだろう。曖昧な記憶しかない父さんも、そう考えると妙に親近感が沸いてくる。

母さんは台所へ戻ろうとした　が、僕の後ろに隠れているミリアを発見すると、ピタリと足を止めた。

「なんだ、美利亚も一緒だったのか。お前もいいかげんブラブラしてないで、母さんに楽させてくれよ」

見慣れた娘を諭す口調で、母さんはそのまま台所へと去っていった。どうやらミリアがここで生活するのに、支障はないようだ。

「よかったな、ミリア」

「ま、まあわたしはエンマ様の言うことを信賴してたけど」

ケラケラと笑い飛ばすミリアに、

『じゃあ一人で家に入ってもよかったじゃないか』

という無粋なツツコミをいれようかとも考えるも、口を開いたところで止めておいた。変にへそを曲げてもらっては、後々困るのは自分だろう。

「ねえ信也君、家の中を案内してよ」

「その前に一つ、家の中では僕のことを信也と呼び捨てにしてくれ。僕もミリアを姉さんと呼ぶから。弟を君付けで呼ぶ姉はあまりないだろうし」

「わかったよ、信也」

ふざけ気味に返答するミリアに、一抹の不安を感じる。それでも、理解したものと判断することにした。

もっとも、ミリアを信頼していたわけではなく、君付けをしたところで、今回の目的に影響はないだろうと判断したからだ。

「じゃあ、ついてきてよ」

僕は廊下を進み、風呂場とトイレを軽く説明すると、二階へと上がっていった。居間は基本的に母さんの部屋で、僕が入るのをあまり喜ばない。ダイニングキッチンは夕食のときにでも教えればいいだろう。

二階に上がると、まっすぐ伸びた廊下の左右に二つの扉がある。手前のドアが僕の部屋だ。

もう一つは父さんの部屋だったが、父さんが死んでからは物置になっている。

ふと、そこで疑問が浮かんだ。ミリアはどこで寝るのだろうか？

とりあえず僕は、自分の部屋をのぞいてみた。薄汚れた緑色のカーペットに、普段見慣れた机とインターネット用のパソコン。ベッドは一つ、もちろん枕も一つだけだ。どうやらここではないらしい。「どうかしたの、信也。キョロキョロして」

知らず知らずのうちに、落ち着きがなくなっていたようで、心配そうな面持ちでミリアが尋ねてくる。

「いや、姉さんはどこで寝るのかなって。もしかして廊下かな？」

「なんでそうなるのよ！　ここが信也の部屋なら、反対じゃないの？」

「いや、そっちは物置……」

僕の話を聞かずに、ミリアは反対側の扉の前へと立った。ふわふわの髪がボールのように弾んでいる。

ミリアは扉を開けると、そのままポカーンと口を開けた状態で固まってしまった。

「どうしたんだよ？」

「わ、わたしの部屋……」

「はっ？」

ミリアに続き、部屋の中を覗き込む。その変わりように、僕の動きも完全に止まってしまった。

物置だったはずの一室が、きちんと整理された、生活観のある部屋へと変貌を遂げていたのだ。

ただ、家具に高そうなものはなく、むしろ質素で地味なものが多かった。

「わ、わたしの部屋……わたしの部屋！」

同じ言葉を繰り返しながら、フラフラと部屋の中へと入っていく。いい部屋じゃないか。でも、物置の荷物はどこにいったんだ？」

だが、部屋の中を見回しても、それらしき物は見当たらなかった。わたしの部屋だよ！」

振り返ったミリアが絶叫する。

「そんなに何度も言わなくなたっていいよ。廊下で寝ずに済んでよかったじゃないか」

「違う、わたしの部屋なの！ わたしが中界で使ってる部屋！」

「へっ？」

「わたしが中界で暮らしてる部屋が、そっくりそのままここにあるの！」

これはエンマ様の仕業だな 僕は瞬時に悟っていた。となると、物置の荷物はいま中界にあるのだろうか？

「住み慣れた環境でいいじゃないか」

「そ、それは、そうだけどさ」

「それよりも、物置にあった荷物、後で返してくれるよう、ちゃんとエンマ様に伝えておいてよ」

ブツブツとなにやら呟きだすミリア。これが出るとなにを言っても聞こえなくなる。

「信也、美利亞！ ご飯ができたぞ！」

一階から母さんの声が聞こえてくる。僕は仕方なくミリアを引っ

張り、一階へと降りていった。

10月22日(5)

ダイニングキッチンにたどり着くと、テーブルには母さんの料理が並んでいた。

今日のメニューはどうやらおでんと味噌汁らしい。

「今日はミリアの好物だからな。しっかり食べて母さんに楽しませてくれよ」

ご飯を茶碗へとよそいつつ、ほがらかに笑う。どうやら今日は機嫌がいいようだ。

「それにしても姉さんの好物が、おでんだったとはね」

あくまで仲のよい姉弟を装いながら、尋ねる　も、よく考えたらいまの質問自体、この年齢まで一緒に暮らしてきた姉弟としてはあり得ないだろう。

だが、ミリアは僕の言葉を無視し、大量に盛られたおでんとにらめっこをしていた。

「どうかした？　早く食べなよ」

「どうしておでんなのよ……」

「姉さんの好物なんでしょ？」

ミリアは突如、僕の胸倉をつかんだ。

「な、どうしたんだよミリ……姉さん」

「おでんが好きなんていつ言ったのよ……」

「いや、それは……」

それは母さんの記憶にあるんだろう　といいかけて、僕は止めた。どう考えてもミリアの様子がおかしい。

「もしかして？」

恐る恐る尋ねると、ミリアは嗚咽を吐き出すように、

「おでん、大嫌いな……」

予想通りの言葉を口にしていて。

「じゃあ、なんで母さんはおでんを姉さんの好物だなんて言ったん

だろ」

「知らないわよそんなの……あっ！」

僕の胸倉からパツと手を離し、祈るように組み合わせる。そのま
ま天井を見上げて、諦めたようにため息を吐いた。

「……エンマ様の仕業だ」

「エンマ様が？　なんでそんな手の込んだことを……」

「いつも言ってるのよ、好き嫌いがあるようじゃ立派な案内人には
なれないって」

「どういう理屈なんだ、それは」

僕の言い分を無視して、ミリアはブツブツとつぶやきながら大根、
白滝、牛筋など順番につつついていく。

「なんだ、行儀が悪いな。そんなに待ちきれないなら先に食べてて
もいいぞ」

屈託のない笑顔を向けられ、ミリアは困ったように愛想笑いを発
していた。気の毒だがどうしようもない。

「んじゃ、先に食べとくね。いただきます」

「い、いただきます」

「おう。おでんのおかわりたつぷりあるからな。しっかり食べるよ
！」

いきなり出鼻をくじかれ、飲みかけた味噌汁をミリアが吹きだす。
それ以降は何事も起こらず、食事は進んでいった。表向きは。

僕は見逃さなかった。ミリアが母さんの目を盗んでは、僕の皿に
おでんを移しているのを。

「う、ごちそうさま！」

当然、ミリアの方が食べ終わるのも早かった。だが、母さんは軽
く首をかしげている。

「なんだ美利亚、もういらないのか？」

「う、うん、もうおなか一杯！」

「いつもだったら鍋一杯に作っても、一晩でたいらげるじゃないか。
どうか具合でも悪いのか？」

「鍋一杯のおでん……」

想像してしまったのか、ミリアの口がぷっくりと膨らむ。そのままドタドタとダイニングキッチンから出て行ってしまった。

「ご、ごちそうさま！」

「こらっ、信也！　ちゃんと食べないとダメだろ！　おでんなんてほとんど残ってるじゃないか！」

そのほとんどはミリアのものだ　　と言えるわけもなく、一杯になった胃に無理やり詰め込む。皿を空にしたところで、ようやく母さんは僕を解放してくれた。

二階に上がってミリアの部屋をノックすると、

「どうぞ……」

か細い声で、返事が聞こえる。中に入るとベッドの上でミリアがうつ伏していた。

「信也君……」

顔を上げたミリアの瞳が、いままで以上に輝いて見えた。うつすらと浮かんだ涙が原因らしい。

「ほら、また君付けする」

「そんなことより、なにか食べ物。おでんの臭いを忘れられるような、美味しくていい香りの食べ物を、ちょうだいよう」

「おかげで僕はおながが破裂しそうなぐらい満腹だけだね。そんなことよりも……」

「そんなこと！？　信也君にとってわたしの空腹よりも大事なことがあるっての！？」

「ある」

はつきり言っていると、どうやらミリアは観念したようだった。

「じゃあ、その用事が済んだらなにか食べ物持ってきてよ」

「分かってるさ。確かリンゴがあったから、剥いて持ってきてやるよ」

「リンゴ……じゅる」

垂れたよだれを袖で拭う。なにを持ってくるかは黙っていたほう

がよかった。

「それで、わたしになんの用？」

ようやくミリアはこちらの話を聞く体勢になった。やっと話を進められそうだ。

「山倉について聞きたいんだ。山倉は骨折していたせいで、サーカス会場から逃げ出せなかったんだよね？」

「そうだよ。あの足で走るなんて無理だったでしょうからね。それがどうかしたの？」

心の中でガッツポーズをする。僕の予想は間違っていなかった。

「だったら、山倉が骨折してなければ逃げ出せるはずだよな？」

「そうだと思うけど……」

「山倉が骨折するのは明日なんだ。それも昼休みに階段から転げ落ちたのが原因でだ」

「どういうこと？」

「つまり明日、山倉の骨折を防げばいいってことだよ。そうすれば山倉は問題なくサーカス会場から逃げ出せる」

ようやくピンと来たのか、ミリアが何度も頷く　だが、すぐに

しかめっ面になってしまった。

「でもどうやって助けるのさ？」

「それを今から考えるのさ」

「なあんだ、ダメダメじゃない」

僕の精神がグサツとナイフで刺されたような感覚に捕らわれる。

言うとおりで、そこまではつきりといわれたくはなかった　特にミリアには。

「とにかく、山倉の骨折を防げば大丈夫だよな？」

自身ありげに尋ねるも、ミリアはなぜか神妙にしている。

「うーん、骨折してるときよりは助かる可能性は高くなるんじゃないかな？」

「なんで断定できないんだよ？」

半ば逆切れ気味に、ミリアに問いかける。

だが、ミリアは冷静な面持ちを崩さなかった。

「わたし達の知っている未来とこれから起こる未来は別なのよ」

「どうということだ？」

今度はこっちが、ミリアへと尋ねる番になってしまった。

「わたし達が知っている未来だと、優美ちゃんが骨折して、信也君が交通事故で死ぬ。それから、サーカス会場で優美ちゃんが、爆発に巻き込まれる」

「そうだ。それは変わらないだろ？」

「変わるかもしれないわよ。っていうか、変えなきゃ優美ちゃんは救えないでしょ」

言われてハツとする。当たり前のことか理解できていない自分が、恥ずかしくなった。

山倉を救うということは、山倉が死ぬという未来を変えということだ。つまり、僕の知っている未来とこれからの未来を、違うものにしなければならぬのだ。

「小さい部分まで広げると、今日わたし達は優美ちゃんに会いにいったじゃない？」

「ミリアは会ってないだろ？」

「こ、細かいことはいいの！ でもわたしたちが知っている未来……正確には過去だけだね。信也君は優美ちゃんの家を訪ねてないでしょ？」

「ああ、訪ねてない」

「ほら、もう変わってるじゃないの」

僕は無言で頷いた。これから先どんなことが起こるか、正確には分からないのだ。

「だから優美ちゃんの骨折を防ぐことが、優美ちゃんの死を防ぐことに繋がるかもしれないし、繋がらないかもしれない。たとえ骨折していなくても、何らかの理由で逃げ遅れる可能性だってある」

「うん、そうだね。ミリアの言うとおりだ」

初めてミリアの話に感動を覚えた瞬間だった。ここにミリアがい

なければ、僕はとんでもない過ちを犯していたかもしれない。そう思うと背筋がゾツとした。

「だけど、変わる未来はわたし達がかかったことだけだからね。今のままだと優美ちゃんの間違いなく骨折するよ」

「でも僕がかかわれば、その未来も変えられる」

「そういうこと！　わたし達の行為は要約すると未来を変える行為ってわけ」

「ありがとう、ミリア」

頭を深く下げる。顔を上げるとミリアは得意げに腕を組みながら、頷いている。

僕はミリアの部屋を後にして、自分の部屋へと戻った。僕の行為は山倉の死という悲惨な未来を変える行為だ。その第一歩として、山倉の骨折という未来を変えなければならぬ。

「よし、やるぞ！」

気合を入れて、腕を振り上げる。

直後、入り口を叩く音が聞こえてきた。

「ちょっと、信也君！　リングはどうしたのよ！」

高まっていたテンションが、一気に落ちていく。ミリアの空腹な感じですっかり忘れていたのだ。

約束どおりリングを剥いて、ミリアへと渡す。それから自室へと戻り、早めに寝た。

電気を消して、布団へともぐる。山倉の笑顔を思い浮かべながら、僕は夢の中へと落ちていった。

10月23日(1)

十月二十三日 木曜日

授業は完全に上の空だった。先生の声は耳の中をつきぬけ、どこかへと消えていってしまふ。

僕はノートを取るふりをしつつ、記憶の整理をしていた。そうしなければ、山倉を救う決定的なチャンスを逃してしまふ。

山倉が骨折したのは昼休み これは間違いなかった。

正確な時間は覚えていないが、僕に山倉の骨折を伝えに来たのが三村である。それも確かだった。

昼食時、僕と三村はいつも一緒に弁当を食べる。三村が弁当を食べ終わって、トイレへ行くと行って教室から出て行き、僕は教室で待っていた。

それから数分後、三村が山倉の階段から落下したという事実を伝えるに、血相を変えて教室へと戻ってきたのだ。

そしてとうとう昼休みになった。だが、山倉を助けるプランはまだ半分しか完成していない。

「なんだ、信也。ボーっとして。山倉のことでも考えてたのか？」

「ああ……」

歩み寄ってきた三村の足元で、ガチャンと音がする。どうやらちやかすつもりが肯定されたため、思わず弁当を落としてしまったようだ。

顔を上げると、山倉が三村いとしての吉沢を含む数人と、教室を出て行くところだった。

山倉たちはいつも屋上で食事を取る。今日も同じようにして過さずだ。

「お、おい、ちょっと待てよ」

三村の制止を背に、山倉へと歩み寄る。

「山倉、ちょっといいかな？」

山倉が目を見開いて見返してきた。僕の目の前を長い髪が、流れるように通り過ぎていく。

なぜかその横では、吉沢が警戒心を露にしていた。

「ああ、鷹野君。昨日は大丈夫だった？」

「はっ？」

「いや、修学旅行に行くなとか言っつて、その後一人で頷いて帰ったでしょ？ 調子でも悪いのになっつて」

どうやら山倉に突飛な行動をとる、おかしい人物だと誤解されているようだ。

「それはもういいんだ。それよりも、階段の上り下りには注意したほうがいいよ。すべて転んだりしたら危ないからね」

「あ、う、うん……ありがとう」

立ち去りながら、山倉はしきりに首を傾げていた。これではおかしい人という認識を強くしただけの気がする。

やはり僕が現場に行かないとダメだ。

自分の机へと戻ると、三村がポカーンと口を開けて、僕を迎えた。

「なんだよ三村、はとが豆鉄砲を食ったような顔して」

「お前、はとが豆鉄砲を食った顔、見たのかよ？」

「いや、見てないけど」

もちろん、三村が言いたかった重点はそこではなかった。

「お前、いつの間に山倉と仲良くなったんだよ？ ちよつと前までは見てるだけで幸せとか言っつて、話しかけるのもやっとなっつたに」

三村に言われてハッと気がつく。そういえば以前は、今のよう切羽詰った状態ではなかったたので、山倉の笑顔を見ているだけで幸せだった。

だが、そんな悠長にしている暇はない。僕の行動一つ一つが、山倉の命を左右するかもしれないのだ。

「なあ、なにがあっただよ？ 俺の情報網に引っかからないなんて……」

「なんでもないって。しいて言えば心境の変化ってやつかな？」

「なんだよ、心境の変化って」

小さく微笑んで、三村の質問をかわす。

中界に行つて、少しは成長したのかもしれない　そんな気がした。

だが、死んでようやく成長するなど、悲しい話だ。

三村が弁当を広げる。僕は席を立ち上がると、教室から出て行くとした。

「おい、飯も食わないでどこに行くんだよ」

「後で食べる。今はお腹がすいてないんだ」

「後で食べる時間なんかないだろ。それよりもいい話があるんだ」

「あ、おい！」

僕の肩に手を回し、席へと連れ戻す。自慢の情報について語りだす三村の前に、落ち着きがなくなっていくのが自分でも分かった。

三村が食事を終えるまでには、まだ時間はある。だからといってギリギリに行つて間に合わなければ、目も当てられない。

「おい、聞いているのか？」

「ああ、三組の足立先生のカツラが数十万するって話だろ？」

正直に言つと、三村の話などまったく聞いていなかった。だが、僕にとってこの光景は二度目である。

三村は目を丸くして僕を凝視していた。

「いや、今は一組の山下先生と二組の高山先生ができてるといふ噂の話だったんだけど、どうしてカツラの話、知ってるんだ？　次に話そうと思つてたのに」

背中にサアーツと鳥肌が立っていく。内容は把握していても、話してくれた順番までは覚えていなかったのだ。

「お前、もしかして俺を超える情報網を持つてるんじゃない……」

「そ、そんなわけないだろ！　ちよつとトイレに行つてくる！」

追求される前に、教室から飛び出す。三村は僕を追って来なかった。

帰ってきてから話を聞けばいいだけで、追う必要はないと判断したのだろう。

ようやく教室から脱出できた僕は、足早に山倉の骨折する階段へと向かった。

ほとんどの生徒はまだ昼食中で、廊下に人影はほとんどなかった。

「ここだよな……」

屋上へと続く階段の前に立ち、見上げる。山倉たちの姿はなかった。

空腹を我慢しつつ、階段の手すりへと寄りかかる。時間が分らない以上、積極的に動かないほうがいい。

あとは山倉が降りてくるのを待つだけだ。

昼食を取り終わった生徒が、ちらほらと姿を現す。

屋上へと上っていく人影は何人かあるものの、降りてくる人影はまだなかった。

10月23日(2)

緊張から高鳴り続ける動悸が、胸を何度も殴打する。三村の昼食の進み具合から来たほうで、緊張を持続させずにすんだ気がする。だからといって、緊張をきるわけには行かないのも事実だ。

階段を見上げ、ひたすら山倉を待つ。

刹那、階段を猛スピードで下りてくる山倉の姿が現れていた。

「山倉！」

呼んだ瞬間、僕の瞳はあり得ない光景を捉えていた。

それは、山倉の背中を、力いっぱい押す人影の存在だった。

すさんだ茶色の髪に、同じような色とツヤの肌。放課後によく屋上でたむろしてる、不良連中の一人。隣のクラスの間宮涼子だ。

「えっ？」

僕の呼び声に反応して、動きを止めていた山倉は、次の瞬間には階段から宙を舞っていた。

「きゃああ！」

山倉の滑らかな黒髪が、扇状に大きくたなびく。

「山倉！」

僕は階段を駆け上がると、山倉の落下しそうな地点で陣取ったつもりだった。

だが、そんな余裕もなく、山倉が覆いかぶさってくる。

「くっ！」

落下してくる山倉をがっしりとつかみ、安心したのもつかの間だった。

僕の両足が、あっさりと階段から離れる。山倉が落ちてくる勢いを殺せなかったのだ。

そのまま山倉と僕の体は、再び空中へと投げ出される。何もできないまま、僕と山倉は踊り場へと落下していった。

「きゃうー！」

「んぎゅー！」

僕の体は廊下と山倉でサンドイッチにされた。背中全体を一度に打ち付けた衝撃が肺に響き、僕の呼吸を止める。

喀血したと錯覚するような、乾いた息が口から吐き出された。直後に喉を襲った不快感が咳を連発させる。

「た、鷹野君！」

目の前にいる山倉が、心配そうに僕の様態を確認する。

「大丈夫！？　しっかりして！」

山倉は即座に僕の体を抱えると、どこかへ向かって走り出した。情けないうめき声を上げながら、僕の意識は混濁していった。ことなくデジャヴのような感覚に捕らわれながら……。

気がつくと、視界には白い天井が広がっていた。体を覆うように、柔らかな生地感触がある。

左右を見渡すと、白いカーテンが周りを囲んでおり、辺りの様子を確認することができない。

起き上がろうと体を動かすと、直後に背中とお腹に激痛が走る。

その痛みが、ゆっくりと僕の記憶の回路を修復していった。

「山倉！」

絶叫に近い呼びたてが、自然と飛び出す。

すると、閉まっていたカーテンが軽い金属音をたてて開く。そこに山倉の姿があった。

「鷹野君、気がついたんだね」

婉然と微笑みかけてくる。僕は山倉の足を即座に確認していた。ギブスどころか、シップの一つも張られていない。

「山倉、骨折とかしてないよね？　特に足とか」

「うん、大丈夫。鷹野君が下敷きになってくれたおかげかな？」

「そっか。よかった。本当によかった。ハハハハ」

こみ上げてきた笑い声を、抑えられなかった。訝しげに僕を見る山倉に、大丈夫だと手で合図する。

山倉が僕の寝ているベッドへと、腰をかけた。黒髪の脇からのぞく首筋に、僕の心臓が太鼓を連打するかのような鼓動を生み出す。

「ここは、保健室？」

「うん。背中を強く打ってるって言ってた。しばらくは痛いだろうけど、安静にしとけば大丈夫だって、保健の先生が言ってた」

「先生は？」

「職員会議とかで、出て行っただけかな」

保健室で山倉と二人っきり　鼓動がよりいっそう早さを増していった。

「でも、よくあんなところにいたよね」

山倉はそんな僕の気持ちも知らずに、足をぶらぶらと揺らしている。

「なんとなく、山倉に危険が迫っているような気がしてさ」

「フツ、変なの。昨日のことといい、未来を知ってるみたい」

「まさか、そんなはずないだろ？」

「そうだよ。単なる偶然だよ」

二人して笑いあいながらも、僕は背筋に冷たいものを感じていた。あまり調子に乗って語らないほうがよさそうだ。

とにもかくにも、山倉の骨折を防げた。助けたというよりも助けられた感じで格好は悪いものの、結果的には目的は達せられた。

これで山倉の死ぬ可能性は低くなった。確率はゼロではないが、百からは遠のいてくれている。

だが、その原因が山倉の背中を押した生徒にあるというのは、大きな衝撃だった。

だれからも愛されている山倉に、恨みでもあるのだろうか？

「本当にありがとうね、鷹野君」

「気にしないでいいよ。それよりも、さっき階段から落ちたとき、誰かに背中を押されてなかった？」

山倉は意表をつかれたのか、一瞬だけ顔を曇らせていた。だが、すぐさま顔を緩めると、

「そんなわけないよ。なに言ってるの？」

はぐらかそうとしてきた。少なくとも僕はそう感じていた。

「いや、確かにこの目で見たんだ。山倉の背中を押した誰かがいたんだ」

「気のせいだって。そんなことされてたら、わたしだって黙ってないよ」

山倉の信頼を得ていない僕に、本音は吐き出されなかった。

どうにかして信頼を得なければ、苦しみはいつまでたっても山倉を襲い続ける。

僕は山倉に、告白する決心を固めつつあった。山倉の苦しみを排除するには、信頼できる人物になるしかない。

「あの、山倉」

「ん？　どうかした？」

心配そうに、山倉が僕のようなすを伺ってくる。山倉を支えるために、意を決して、告白を口にしようとした　まさにその瞬間だった。

『支えてくれるって約束したのに！』

脳裏に霊安室の山倉が、フラッシュバックする。

『わたしのせいだ。わたしが迎えに来てなんて言ったから！』

「大丈夫鷹野君？　まだ傷が痛むの？」

脳裏で絶叫する山倉と、心配そうに覗き込む山倉が同時に声を発する。

手も当てていないのに、心音が聞こえた。

先ほどまでとは違う、巨大な太鼓が力一杯に打ち鳴らされるような動悸だ。

今なら山倉を支えられる。それは確かだ。

山倉は前と同じように、二つの質問をしてくるだろう。それでも同じように、僕の気持ちをぶつければ、山倉の信頼を得られる。

今はそれでいいかもしれない。だが、その後はどうなる？

五日後、僕は死ぬ。たとえ山倉を救えたとしても、絶対に変わら

ない現実だ。

僕が死んだあと、山倉はどうなる？　いたずらに僕が山倉の支えになれば、靈安室の再現になるのではないか？

泣き叫ぶ山倉なんて、もう二度と見たくない。僕が山倉にとって普通の友達なら、僕が死んでも、深く思いつめたりしないはずだ。

ならば、山倉の支えにはならず、命を救うためだけに、全力を尽くしたほうがいいのではないか。

瞬時に結論へとたどり着いた僕は、無理やりに笑みを作っていた。
「なんでもないよ」

「そう？　本当に大丈夫？　わたしにできることがあったら、いつでも言つてね」

「ありがとう。助かるよ」

お礼を述べると、山倉はベッドから立ち上がった。その動きにあわせて、バラのようなかくわしい香りが漂ってくる。

「そろそろわたし帰らないと。鷹野君はどうする？」

「僕はもう少し休んでから帰るよ。一人でも大丈夫さ」

「そっか。それじゃ、また明日！」

元氣一杯に手を上げると、山倉は部屋から去っていった。

「これで、これでいいんだ」

手を振りながら山倉を見送る。込みあがる山倉に対する想いが、一筋の涙となってこぼれ落ちた。

数分の間を空けてから、僕は教室へと戻った。すでに教室には誰もいない。

窓から差し込んでくる夕日が、やけに眩しかった。

荷物をまとめていると、飾られた一輪の花が視界へと入ってくる。再びこみ上げそうな想いを振り切ると、僕は教室から飛び出していた。

学校を出た後は、背中痛みも忘れて帰路を駆け抜ける。

僕の行動は間違っていない　そう胸中で連呼しながら……。

10月23日(3)

家の前で息を整えてから、念のために瞳を拭った。袖に残った小さな染みが、正しい判断だったと教えてくれる。

「ただいま」

「おう、お帰り」

家に入ると、母さんが出迎えてくれた。ミリアの姿は見当たらない。

ミリアについて聞こうと口を開くと、それより早く母さんが尋ねてきた。

「信也、美利亞をみなかったか？」

「姉さん、まだ帰ってないの？」

「ああ。遅くまで出歩くなって口がすっぱくなるほど言ってるのに、なにを聞いてんだかな。まったく、鍵をかけて外に締め出してやるうか」

天井を見上げて、僕はため息をついた。母さんを怒らせるという行為が、どんな災難を呼ぶか、ミリアは分かっているのだ。

だいたい、僕のサポート役として来ているミリアに、出歩く用事などないはずだが。

「信也、悪いけど探してきてくれないか？」

「僕が？」

「いいだろ？ どうせ暇なんだし」

暇ではない。勉強　はどうでもいいが、山倉を救うために全力を尽くすという使命がある。

かといって、ここで母さんを敵に回すのは頭のいい行動とはいえない。

「わかった。行って……」

僕が嫌々ながらも承諾しようとしたところで、背後から扉の開く

音がした。

当然、帰ってくる人間は一人しかない。

「ただいまあ！」

元気よく、そしてタイミング悪く、ミリアが帰宅の挨拶を飛ばす。予想通り、母さんのカミナリがミリアへと落ちていった。

「美利亞！　こんな時間までどこほつつき歩いてたんだ！」

「えっ？　信也もいま帰ったんじゃ……」

「信也は学校に行ってたんだ！　いつまでもぶらぶらしてるお前とは違うんだよ！　罰として明日は外出禁止！」

「えっ、えええ！？」

元気一杯だったミリアの顔が、いつきにしぼんでいく。エンマ様に罰について宣告された場面の再現だ。

「まったく、この年齢になってまで外出禁止を使うとは思わなかったぞ！　信也も言うことを聞かないほうだったが、美利亞は輪をかけてひどい！」

確かに僕も、よく外出禁止を受けた。

大抵は僕のいたずらが原因だったが、たまに母さんの虫の居所が悪かったために、理不尽な外出禁止を食らう場合もあった。

その内容は単純明快で、外出してはならないというもの。学校にも行けない。

そして母さんが仕事で家にいなくても、僕が外出すれば、すぐに察知する。その理由は未だに説明されていない。

だが、そんな罰を受けていたのも小学生までだ。

中学生になってからは、母さんの恐ろしさを悟っており、無意味ないたずらなどしなくなった。

「いいか、もう何度も言わせるな。早く家に帰れ！　働いてわたしに楽をさせる！　わたしの言うことを素直に聞け！」

「何度もって、言われたことないのに……」

「なんか言ったか！？」

体を震わせながら、涙目で頭を乱雑に振りまくる。

ミリアの整った黒髪が、僕の顔に当たっているのにも気づかずに「とにかく、今日はもう夕飯を作る気分じゃない」

「あちゃ……」

「信也、なんか言ったか！」

僕も負けじと、全力で首を振っていた。

「カップラーメンでも食べとけ！　ちゃんと片付けもしろよ！」

母さんは鼻を荒々しく鳴らすと、自分の部屋である居間へと引込んでいった。

勢いよく閉められたふすまが、ビンタのようなするどい音を発する。

「信也君のお母さん、すごいねえ……」

ようやく母さんの雷から解放され、ミリアが顔全体をふつくらとさせている。

「まったく、こっちはいい迷惑だよ。ミリアのせいで夕飯がカップラーメンになっちゃったじゃないか」

「わ、わたしのせいなの？」

「機嫌が悪くなると、母さんはご飯を作らないんだ。そんな時は、決まってカップラーメンなんだぞ」

「カップラーメンって……なに？」

予想外の反応が返ってきて、一歩だけ足を引いてしまった。どうやら中界にカップラーメンはないようだ。

「まったく、食べさせてやるよ」

ダイニングキッチンへと移動すると、ミリアを席へと座らせる。

カップラーメンを二つ持ってきて、お湯を入れる。その後三分待ってから、蓋を開けさせた。

「わぷっ！」

興味津々で覗いていたミリアの顔を、濃厚な湯気が襲い掛かる。

あたふたしてるミリアに苦笑しながら、先に食べる。まずくはないものの、手料理に比べれば、どうしても劣ってしまう感が否めなかった。

だが、ミリアは初めて食べたカップラーメンに舌鼓を打っていた。
「美味しいじゃない！ しかもお湯入れるだけでいいなんて。仕事に疲れた夜にはピッタリね」

丸い瞳を細長く伸ばし、うっとりとしている。

はたから見ればモデル級の美少女であるミリアが、カップラーメンで感動している。そのギャップが妙におかしかった。

食事を終えた僕たちは、素早く二階へと上がった。もちろん片付けは済ませてある。

僕が自分の部屋へと入ると、ミリアが続いて入ってきた。

「どうかした？」

尋ねると、ミリアは目を吊り上げていた。

「どうかした？ じゃないでしょ！ せっかく今日も信也君に協力してあげようとしてるのに！」

また弟に君づけしている。だが、何度言っても無駄のようなので、諦めた。

「今日は特にないよ」

「報告とかあるでしょう？ 例えば優美ちゃんの骨折は防げたの？」

「ああ、それは大丈夫だよ。ただ……」

「ただ？」

僕は黙っていた。ミリアが顔を覗きこんできても。

「どうしちゃったのよ。急にしおらしくなっちゃって。優美ちゃんを必ず救うって宣言したのは嘘だったの？」

無意識の内に、僕はミリアをにらみつけていた。ミリアの得意げな笑顔が怯えへと変わる。

嘘なわけがない。山倉を救いたいという気持ちはいまも同じだ。なのに、心の中心に空洞が開いているのはなぜだ？

「なあ、ミリア」

「なに？」

「僕は、あまり山倉と仲良くしない方がいいよね？」

「なんでそうなるわけ？」

ミリアが困惑しながら、逆に聞き返してきた。そこで保健室の出来事と考えをミリアへと伝えてみた。

ミリアなら僕とは違う答えを出せるかもしれない　そう期待しながら。

「簡単なことじゃない。優美ちゃんを見守りながら、仲良くならなければいい。信也君の言う通りだと思うよ」

「そう、だよ。ただどこにかしっくりこないんだ」

「なにがしっくりこないのよ」

「いや、なんだろう。自分でも分からないんだ」

「なによそれ、変なの」

ミリアが勢いよく、ベッドへと腰掛ける。

はつきりしない態度の僕に、いらついているようだ。

「もしかしてさ、優美ちゃんの気持ちとか関係なしに、信也君が仲良くしたいだけじゃないの？」

またも脳裏に衝撃が響いた。ミリアの何気ない一言は、いつも僕の脳細胞を活発にさせてくれる。

僕と仲良くなれば、山倉は苦しむ可能性がある。そう思うのなら、山倉と距離を置けばいいだけの話だ。

だが、それを僕の心は拒否している。せめて一週間だけでも、山倉との思い出を作りたい。

それが心に空洞を作っている理由　交通事故で死んでしまった僕の未練なのだ。

「どうしたいのかは知らないけどさ。あまりいろんなことに手を出すと、肝心の優美ちゃんの命を救うっていう、最初の目的がおろそかになるよ。今は自分のやるべきことをやれば、それでいいんじゃないかな？」

ミリアのいうとおりだ。山倉との恋愛にかまけている場合ではない。

肝心なのは山倉を救うこと。その一点だけだ。

「うん、ありがとうミリア。なんだかふっきれたよ」

「まったく、信也君たら、わたしがいないとなにもできないんだから」

子どもをあやすように、微笑むミリア。抗議したいのは山々だったが、確かに今の時点ではミリアの言った通りだ。

きつと中界での経験が、生きた人間には理解しがたい死者の心理を、容易に汲み取らせるのだろう。

「困ったときはいつでも相談しなさいよ。わたしは信也君のパートナーなんだから」

「頼りになるパートナーで助かるよ」

「……なんか、言い方に棘があるような」

「ないない。本当に頼りにしてるって」

無然としながらも納得したのか、ミリアは部屋から出ていった。

ミリアを見送ると、僕は机の上のパソコンを立ち上げて、調べ物を始めた。

山倉と仲良くならずに守るには、まず山倉を突き落とした奴らはどうにかするべきだと考えたのだ。

僕の調べ物が効果を発揮すれば、山倉に手を出すものはいなくなるし、発揮しなくともハツタリにはなる。

調べ物をノートに書き込みながら、頭へとつめこんでいく。寝る前にもベッドの中で復唱した。

明日の行動次第で、また未来は変わる。山倉を救うための未来が、着々と形成されていくのだ。そう考えると、興奮してあまり眠れなかった。

10月24日（1）

十月二十四日 金曜日

学校の授業は瞬く間に過ぎていき、放課後になった。

はつきり言ってしまうえば、すぐに死ぬ身として、勉強をする気が起きなかった。勉強などする暇があれば、山倉を救う術を考えたいが、有意義に過ごせる。

今日の目的は、すでに決まっている。家に帰ったり、部活に出る生徒が、昇降口へと向かう中、奴らは人気のない場所 体育倉庫へと集合する。

奴らとは、この学校のはぐれ女子の集まりだ。山倉を突き落とし、間宮涼子もその一人になる。

学校の生徒達は、奴らが放課後に体育倉庫へと集まると知っている。女だからと甘く見ると、痛い目にあうことも。

部活動に使う道具の数々も、いまは部室へと押し込められているという話だ。

だからといって、僕はひくわけにはいかなかった。

連中が、故意に山倉へと嫌がらせをしているならば、それを止めなければならぬ。

「よしっ！」

気合を入れると、僕は体育倉庫へと向かった。一度は死んだ身だ。なんでも来い と何度も呟きながら。

体育倉庫の建物が見えてくる。同時に、見慣れた人影が体育倉庫の前でうろついているのが目に入ってきた。山倉である。

山倉は入り口の前をいつたりきたりして、ノックをしようと手をかまえた。その動きが止まり、またうろつろし始める。

どうやら山倉も僕と同じ考えらしい。

だが、僕一人でならともかく、山倉一人はさすがに無茶だ。

「山倉？」

何も知らないフリをしつつ、声をかける。

「う、うあああ！ な、なんだ。鷹野君か。ど、どうかしたの？」
わかりやすい動揺の仕方だった。まるで猫にみつかったネズミのようだ。

「山倉こそ、こんな所でなにしてるの？ ここは変な噂が多いから近づかないほうがいいよ」

「う、うん、分かってる。だけど……」

気まずそうに僕の顔を伺いながら、たまに体育倉庫へと目をやる。その潤んだ瞳が、僕の決意を強いものになっていた。

山倉を落ち着かせるようと、僕はできるだけ安らぎを与えるよう、柔らかな微笑むと、山倉の手を握った。

「それじゃあ、行こうか」

「えっ？ どこへ？」

「体育倉庫の中さ。間宮涼子に話があるんだろ？」

一度はおびえた目つきになった山倉も、最後には深く頷いていた。錆びた鉄の扉を開ける。戦車の走行のような仰々しい音をたてて、ゆっくりと開いた。

中からカビとたばこの混じった、異様な臭いが漏れてくる。僕と山倉は顔をしかめていた。

10月24日 (2)

「あれ？山倉じゃない。そっちは鷹野？」

「来るところ間違つてない？」

そんな言葉が、体育倉庫の中から聞こえてくる。

開いた扉から差し込む光が、体育倉庫内を部分的に照らす。

そこには女生徒四名の姿があつた。全員が全員、こちらをにらみ返している。間宮涼子の姿はもちろん、連中のリーダー格である亀山春香もいる。

他の三人は学校の制服だが、亀山だけは派手な色彩の私服で身を包んでいた。

亀山は親が暴力団だという噂で、学校指定の制服などに身を包まず、気分で服装を変えてくる。

それをみても、先生たちは遠巻きに見るだけで、注意をしようとしなかった。

一步、前に出ようとする。すると山倉が手を出して僕を止めた。自分一人で説得するつもりなのか。とりあえずは山倉に任せた。

「間宮さん。あなたに話があるの」

「あたしに？ なんの話さ」

全員の視線が間宮へと集中する。それでもまったく悪びれていない間宮に、僕は自然と拳を握り締めていた。

だが、山倉はまったく気にしたようすもなく続けた。

「昨日、わたしのこと突き落としたよね？」

「はあ？ 変な言いがかりはよしてよ」

「ふざけないで！ あなた自分がなにをしたか分かつてるの！？ 打ち所が悪かったら死んでたかもしれないのよ！」

誰でえぐられるような衝撃が、僕の心臓へと響いた。山倉にはどんな理由があろうと、死という言葉を口にしてほしくない。

「ゾツとしたわ。落ちた直後に階段を見上げたら、間宮さん笑って

た。人を突き落として笑えるなんて、神経を疑っちゃう！」

間宮たち四人はお互いに顔を見合わせて、大口を開けて爆笑し始めた。

「な、なにがおかしいのよ！」

「だったらさ、証拠はどこにあるのさ？」

「しょ、証拠……」

山倉の動きが止まる。ここは僕の出番のようだ。

「証拠はないが、証人ならいる。山倉が間宮に突き落とされる瞬間を僕は見たんだ」

一瞬にして、間宮の顔色が変わった。

「み、見たって証拠はないだろ？」

「ああ、だけど僕が現場にいたのは、あの場にいたものならだれでも知ってる。もしかしたら、僕以外にも間宮の残虐非道な行動を、目にした人がいるかもね。三村に任せれば、その程度の情報、一時間で見つけてくれるだろ。知ってるよな？ 校内のニュースキャスターと呼ばれる三村だよ」

淡々と告げると、間宮がおびえた顔つきになり、助けを求めるように他の三人の顔を次々と見やった。

やはり山倉を落としたのは、間宮の単独行動ではなく、全員一致の謀略だったようだ。

「いいか、一つ言っておく。今後、山倉に手を出したら、絶対に許さないからな」

「へえ、やけにその女に入れ込むんだね」

「もしかしてその女のこと、好きなんじゃないの？」

締めりのない笑い方で、勝手に盛り上がる四人に、僕は頭に血が上ってしまった。

「ああ、そうだよ！ だからなんだっていうんだ！ お前らのやってることは立派な犯罪なんだぞ！」

四人が同時に笑いを止める。相手の動揺が功を奏して、心中が余裕で包まれていった。

「傷害罪って知ってるよな？ 人に傷を与える罪さ。確か十年以下の懲役、または三十万以下の罰金だ」

僕は昨日インターネットで得たばかりの知識を、四人にぶつけた。罪の意識のない奴らに罪の意識を生まれさせるには、正確な罪状を突きつけなければいいのではないか　そう考え、前もって調べておいたのだ。

「何を言ってるのよ！ その女は怪我なんてしてない！ 傷害罪になんてならないわ！」

慌てふためいた間宮が、必死の形相で僕に訴えてくる。

それこそが僕の狙いだと、気づかずに。

「傷害罪にならない？ それって自分がやったって認めてるのか？」

「えっ……」

「だって、そうだろ？ 怪我をしてないから傷害罪じゃないって言うなら、怪我をしてたら傷害罪だって認めるってことだろ？」

「……………」

がつくりとうなだれる間宮。

仲間の失言に、亀山はいらいらをぶつけるよう舌打ちをしていた。

「それに、たとえ怪我をしなくても、怪我をさせようとした行為だけで立派な暴行罪になるんだよ。確か二年以下の懲役……」

「もういい」

吐き捨てるように、亀山がつぶやく。女性にしては低く、ドスの利いた声だった。

「もう山倉には手を出さない。そっちも間宮のことは黙っている。」

それですべては解決ってことだろ？」

「そういうことさ」

「さっさと消えろ。目障りだよ」

「そうさせてもらうよ」

山倉を連れて、体育倉庫を後にしようとする。山倉も一度は足を進めるも、入り口付近で止まってしまった。

「なんだい？」

睨みつけてくる山倉に、亀山は不敵に微笑んでいた。

「わたしに手を出さなくても、他の子に手を出すんでしょ？」

「さあね」

「とばけないで！ 虐めなんてやって、いったいなにが楽しいのよ！ あなたも一度、いじめられる側の立場になってみればいいんだわ！」

「くく、くははは！」

男のように、野太い笑い声だった。亀山は立ち上がり、ゆっくりと山倉に近づいていく。

「やめろ！」

「心配するな。手は出さない」

間に入る僕を押し分け、山倉の目と鼻の先にまで顔を近づける。

山倉は一步も引かなかった。だが、足は震えていたし、涙も目に溜まりかけていた。それでも逃げずに、力強く口を一字につぐんでいた。

「わたしに手を出してきたら、ぶちのめしてやるだけだよ」

「そ、そうやって、暴力ですべてを解決しようとして！」

「わたし達に虐められたくない奴は、強くなればいいのさ。男でも女でも。そうすれば誰からもしじめられずに済むって寸法さ」

「そんなに強いなら、弱い者の味方になってあげればいいでしょ！」

「くつくく、はっはっは！」

笑いながら、亀山は山倉の肩を叩く。周りの取り巻き達は分けも分らず、顔を見合わせているだけだ。

「気に入ったよ、山倉優美。そんなに虐めをやめてほしいなら、お前がわたし達を監視したらどうだ？」

「わ、わたしが？」

「わたし達はお前には手を出さない。約束したからな。お前が体を張って、いじめられている生徒を見つけて、止めればいいだろ？ わたし達はわからないように、うまくいじめる。おまえはわたし達がいじめないよう監視する。面白そうだろ？」

「そ、そんな。まるでゲームみたいに……」

「ゲームさ。わたし達は毎日が退屈なんだ。退屈だからいじめをする。ただそれだけなのさ」

「そんなの……絶対に許さない！」

「ああ、そうだろうな。じゃあ楽しみに待ってるよ。あんたがわたし達を止めに来るのをね」

元の位置に亀山は戻ると、僕達に向けて手の甲で何度も払うしぐさをする。もう帰れという意味だろう。

「行こう、山倉」

「いいわ、絶対に止めてみせるから！ 覚悟してなさいよ！」

山倉の宣告が終わるか終わらないかぐらいで、勢いよく扉が閉まる。

僕は緊張をほぐすために、ゆっくりと息を吐いた。心音は未だ治まることを知らない。

「鷹野君。その、ごめんね？ ありがとう」

声をかけてきた山倉に、僕は返事の代わりとばかりに微笑んだ。

「どうってことないよ。これくらい」

口とは反対に、足は震えていた。

自慢にもならないが、ケンカには自信がない。逆ギレでもされたら、たとえ女子が相手でも醜態を晒していただろう。

「そんなことより……あんな約束して、大丈夫だったの？」

「うん……ああでも言わないと、わたしのような目にあう子が増えていくだけだから。大丈夫、なんとかなるよ」

苦笑いを浮かべる山倉に、自信という色は伺えなかった。それもそうだろう、これから毎日のように、海千山千の亀山たちと戦わなくてはならないのだから。

「鷹野君こそ、大丈夫？ あいつらに狙われたりしないかな？」

「そうになったら、山倉に助けてもらってことで……」

冗談交じりにいうと、二人の口から笑い声が漏れ始めた。僕は大口を開けて豪快に、山倉は口に手を当てた清楚な笑い方だ。

「じゃあ、帰ろうか。明日から大変だろうけど、僕もできることは手伝うから」

「うん、ありがとう!」

山倉と二人で教室へと戻る。

教室内には二人の生徒がいたものの、僕たちと入れ替わるように外へと出ていった。

10月24日 (3)

荷物を鞆へとまとめていると、すぐ横に山倉が立っている。僕と山倉の席は離れているはずなのだが。

「山倉、もう帰る準備できたの？」

「うっん、鷹野君に一つ聞きたいことがあってさ」

「聞きたいこと？」

荷物まとめを一時中断して、山倉と向かい合う。山倉は両手を背中へと回して、うつむいている。頬が少し赤らんでいるように見えるのは気のせいだろうか？

「さっき言ったこと、本当なのかなって」

「さっき言ったこと？」

「ほら、亀山さんたちにさ……」

その続きは唇を噛むだけで、山倉からは発されなかった。

亀山たちとの言動を一つ一つ振り返る。

そして山倉の差している言葉がなにか気がついた瞬間、僕の顔が一瞬にして燃え上がった。顔全体が湯たんぽになったような、そんな感覚だった。

「あ、あれは、その、売り言葉に買い言葉ってやつで」

「じゃあ、でまかせだったの？」

「そ、そういうわけじゃ……」

口ごもっていると、山倉は隣の席へと座った。

「あのさ、鷹野君」

「うん」

「わたし、いままで好きな人って、いなかったんだ」

山倉は僕と目を合わせようとせず、独白のようにどんどんと続けていった。

「何度か告白されたことはあったけど、いつも断ってた。だれを信じていいかわからなくて。わたしが狙われてることを知って、きち

んと助けてくれるのか、本当にわたしを想ってくれているのかって。見せ掛けじゃない、本当のわたしをね」

狙われているというのは、亀山や間宮たちのことだろう。見せ掛けじゃない本当の自分とは、胸に秘めた苦しんでいる自分。病院での山倉に違いない。

「だから、ずっと、ずっとね、だれも好きにならなくていいと思ってたし、だれにも好かれなくていいと思ってた。一人で生きていけば、だれにも迷惑かけなくてすむから。だけど……」

一度口を塞いだ山倉は、顔を上げて僕の顔を見返してきた。

涙が、こぼれていた。

「今日、初めて人を好きになっちゃった」

流れる涙をそのままに、山倉は口元を緩めていた。僕の胸に、その笑顔が刃となって突き刺さる。

「その人は足が震えるほどの恐怖をかかえながら、わたしのために戦ってくれた。わざわざ法律まで調べて、狙われてるわたしを、救ってくれたの」

一度だけ涙を拭い、なおも続ける。

「その人の背中をずっと見てて、すごく頼りがいのある人だと思った。本当にわたしのことを愛してくれてるんだって、感じた。きつとその人なら、わたしを苦しみから解放してくれる。本当のわたしを知っても、変わらず接してくれるって。初めて男の人を信用できたの」

山倉が席から立ち上がり、おぼつかない歩みで僕の方へと近寄ってくる。

僕が山倉の肩を支えてあげる。

山倉の体は震えていた。今度は手だけではない。全身に渡って震えていた。

「その人ってだれか、わかるよね？」

無言のまま頷くと、山倉は僕の胸に顔をうずめてきた。

山倉の体は、病院の時よりも華奢だった。少なくとも、僕にはそ

う感じられた。

「好きな、鷹野君。できたらわたしと付き合ってほしい。あのときの言葉がでまかせでも本当でも、わたしの心は変わらない。だって、こんなにも胸が苦しい。こんなにも鷹野君が愛しいから……」

山倉が両手で、制服を力強く握り締めてくる。だが、僕にとっては制服ではなく、心臓を握り締められたかのような感覚だった。

僕が山倉の支えになれば、霊安室の再現になる。もう結論は出ていたはずだ。

だが、今回は病院のときとは違う。僕が山倉に告白したのではなく、山倉が僕に告白してきたのだ。

ここで告白を無碍に断れば、それだけで山倉は傷つくだろう。場合によっては泣き叫ぶかもしれない。

心の葛藤が、繰り広げられる。いったいどうすれば、山倉も僕も救われるのだろうか。

そのとき結論を出したのは、心の空洞だった。頭ではわかっていても、心では山倉との思い出がほしかった。

そんな想いが、背中を強く押していた。

「うん、いいよ」

「鷹野君！」

「こっちからお願いしたいくらいだよ。さっき僕が亀山たちに言った言葉は、嘘でもなんでもないんだから」

山倉の手から力が抜けて、今度は僕の背中へと回してきた。僕も同じように、山倉を抱きしめる。

「ありがとう、鷹野君……わたし、わたし」

「山倉を支えてみせる。山倉の笑顔が好きなんだ。絶対に悲しい顔なんてさせないから」

「わたしも鷹野君に悲しい顔なんてさせないよ。だからずっと、ずっと一緒にいてね」

ずっと一緒に　それは僕にとって、重たすぎる言葉だった。だからといって、ここで山倉を突き放すわけにはいかない。

どうにかして、僕が死んでも山倉が泣かずに済むよう、思慮を張り巡さなければ。

「そうだ！ 良かったら今日の夕飯、わたしの家に食べに来ない？ これからの二人を祝して手料理をご馳走するよ！」

「えっ、いいの？」

「もちろん。家にはだれもいないから、遠慮しなくてもいいよ」

快く承諾すると、山倉は僕の手を引っ張った。早く家に向かいたいのだろう。

「あっ、山倉」

「なあに？」

「荷物、持って帰らないの？」

尋ねると、山倉は口を大きく開けた後に、照れ笑いをした。

「いつけない。ちょっと待っててね」

自分の席へと戻ると、あたふたと鞆に荷物をまとめ始めた。僕も途中までだった荷物の整理を終わらせる。

「それじゃあ、行こっか」

再び僕の手をつかみ、足早に教室から飛び出していく。まるで貨物列車のように、僕は引かれるだけだった。

昇降口で靴を履き替えて、さらに引っ張られる。男性としては情けないが、山倉は僕よりもパワフルだった。

そして山倉の家までたどり着く頃には、僕は肩で息をしていた。

山倉のペースは、僕よりも数段はやいペースだったのだ。

「さっ、ついたよ……鷹野君？」

ようやくそこで、僕の異変に気がついたのだろう。怪訝な面持ちで顔を伺ってくる。

「やま、くら、足、速いね」

息も絶え絶えながら、できるだけ微笑みつつ尋ねる。頭を掻きながら、申し訳なさそうに答えてきた。

「毎朝五キロ走ってるから。ごめんね？ 嬉しすぎて前しか見えなかったの」

「いや、いいよ。大丈夫、だから」

ふらつきながら、山倉宅の塀へと寄りかかる。普段から周囲に気を配っている山倉が、僕しか見えなくなる。それだけ愛されているという気概が感じられた。

「それじゃあ入ろっか」

山倉に続いて、僕も中へと入っていく。家の中に入るのは、当然のごとく初めてだ。

10月24日 (4)

アコーディオンドアを抜けると、玄関へと伸びる道を木々が囲っている。

「庭は全部森なの？」

「そんなことないよ。木で囲まれてるのは入り口の両脇だけ。庭は芝生が張ってあって、日向ぼっこすると気持ちいいんだよ」

「へええ」

感心しながら、木と木の隙間に目をやる。確かに奥のほうには緑のスペースが広がっていた。野球場の外野を思い出させる。

「鷹野君」

振り向くと、山倉が腰をかがませて、上目遣いで微笑んでいた。

「一緒にひなたぼっこしようよ」

「いいね、しようしよう」

「決まり！今日はもう日が暮れるから、また今度ね！」

それだけ言って、玄関へと向かって再び歩みを進めた。

また今度……山倉の何気ない言葉が胸に刺さるのは、これで何度目だろうか。

僕に今度はあるのか？ そんな想いが脳裏をよぎる。

それを打ち消すように首を振ると、僕は山倉の後を追いかけていった。

林道を進んでいくと、目の前に噴水が姿を現した。その周りをぐるっと回って、ようやく玄関が姿を現す。

玄関から家の中に入ると、中は洋風の屋敷だった。両脇に伸びていく道は、その先がどこへ通じているのかすら分からない。

正面に見える二階へと上る階段は、大人が五、六人、並んで歩けるような広さだ。

間取りという点では僕の家似てるかもしれない。もちろん、スケールは段違いだが。

吹き抜けになっている天井から、下がっている電灯は、どうやらシャンデリアをモチーフとしているようだ。

火は使っていないが、ろうそくの形をした電灯が、玄関を照らしている。

「こつちだよ、鷹野君」

山倉が靴を脱いでスリッパを履くと、左の通路へと入っていく。

僕も同じようにして、一步を踏み出すと、ふわふわの絨毯が僕を出迎えてくれた。

山倉の行った先は、どうやら談話室のようだった。

革張りのソファー、巨大なテレビ、数百冊はゆうに並ぶであろう本棚、厚さが布団並みのカーペット　どれをとっても一般人である僕には無縁のものだ。

「すぐ作るから、ちょっと待っててね」

制服の上から赤いエプロンをまとい、髪をゴムで結んだ山倉が姿を現す。ただの制服姿とは違い、母性的でおしとやかな魅力を感じさせた。

「鳥のから揚げだけど、大丈夫？」

「うん、大好きだよ」

「よかった。テレビでも見て待っててね」

制服の袖を捲り上げてから、部屋を出て行く。どうやらその先にはキッチンがあるらしい。

言われるままにテレビをつけた。どのチャンネルを見ても、同じようなニュースをやっているだけだ。

僕はテレビを消してから、ソファーに体重を預けた。ソファーの柔軟さが、張り詰めていた疲れを吸収していく。

「そうだ。電話貸してくれない？」

山倉に声をかけると、すぐに山倉は僕の前へと姿を現した。

「電話？ 別にいいよ。すぐ持ってくるね」

山倉はそそくさと、姿を消してしまった。

待っている間に近辺を探すと、電話はすぐ側にあった。レトロ風

の黒いダイヤル式の電話だ。

わざわざ今の時代に使っているのは、お金持ちとしての道楽なのだろう。

とはいうものの、勝手に使ってはいけないだろうと、山倉が戻ってくるのを待った。

すぐさま戻ってきた山倉の手には、電話の子機が握られていた。こちらは普通の、特に特徴もない市販されている子機だ。

「はい、これ使って」

「これじゃダメなの？」

そばにあつた電話を指差すと、山倉の口がへの字に曲がる。

「それはお母さん用の電話機なの。わたしの家は電話番号二つ持つてね。一つがお母さんの、もう一つがわたしのなの」

「山倉が電話するときは、自分の電話機じゃないとダメなの？」

「そう。お母さんの電話を使うと、すごく怒られるのよ」

「ふーん、滅多に帰ってこないのに？」

山倉の顔が一瞬にして凍りつき、その場に嫌な沈黙が流れる。

その沈黙の意味に、僕はまったく気がつかなかった。山倉の言葉を聞くまでは。

「お母さんが滅多に帰ってこないなんて、よく知ってるね」

背中に走る冷や汗と、髪を逆撫でする寒気が、あつという間に全身を襲った。

形容しがたい衝撃が脳裏を貫き、僕の意識を飛ばそうとする。

それにかろうじて耐えながら、どうにか相槌を打った。

「うん、まあね」

「だれにも話してないはずだけどな。それも三村君からの情報？」

「そんなとこかな。それより料理大丈夫？」

今の話題を一段落させるべく、話を別の方向へと向けようと試みた。

企みが功を奏し、山倉の質問攻めは中断された。

「いけないっ！ 火に油をかけっぱなしだった！」

それだけ言い残して、山倉は台所へと走り去っていった。

「ふう、骨折した山倉から聞いたなんて、言えないもんなあ」

山倉から受け取った子機に、自宅の電話番号を入れる。

すぐに呼び出し音が聞こえてくる。五度のコールのあと、受話器の外れる音がした。

相手はミリアだった。

「はい、ミリアです」

「鷹野ですだろ……」

第一声から、頭痛が始まるポ力をやってくれる。頼りになるのかならないのか、まったく分からない困った相棒だ。

「信也君？」

「ああ、母さんいる？」

「いや、まだ帰ってきてないよ。信也君こそまだ帰らないの？」

だらけた口調から、退屈なミリアの現状が伝わってくる。

そういえば今日、ミリアは外出禁止を命じられていた。

「できるだけ早く帰るよ。とりあえず母さんに晩御飯はいらないとだけ伝えておいて」

「もしかして……優美ちゃんのところ？」

ミリアの勘の鋭さに、僕は息を呑んだ。昨日の今日で仲良くしているなどとは言いづらかったが、嘘をつくわけにもいかない。

「ああ、そうだけど……」

僕が恐る恐る話すと、突然にミリアは声を荒げていた。

「ダメよ信也君！ 優美ちゃんと仲良くなっちゃダメ！」

明らかに昨日とは違う。僕と山倉が仲良くすると悪いことが起こるといった、確信を得ている言い方だった。

「なんでダメなんだよ？」

「そ、それは、その……理由はエンマ様に喋るなって言われてるから」

「なんで喋っちゃいけないんだ？」

「エンマ様の判断だから、ダメなものはダメなの。ごめんね、信也君」

口ごもるミリアは、なにかを隠している。それは間違いないだろう。

だが、ミリアの言い分に、僕は従うしかなかった。

エンマ様の言い分なら、ミリアも従うしかない。僕が直接エンマ様に聞こうにも、中界へと行く術を知らないのだ。

「理由を言えないのは分かった。だけどミリア、山倉を放っておくわけには、いかないんだよ！」

「信也君！」

僕はミリアの反論を聞かずに、電話を切った。ミリアが隠すこととなると、きつと未来に関係している事象なのだろう。

僕と山倉が仲良くすると、山倉を救える可能性が下がるのかもしれない。

だからといって、いま山倉を拒絶するなどできるだろうか？ 僕に救いを求めてきている山倉を、見捨てるなんて……。

「どうかしたの？」

ミリアの制止と僕の意見が、脳裏で水掛け論を繰り返していると、心配そうに山倉が声をかけてきた。

「いや、なんでもないよ」

「本当？ だったらいいけど……」

不満げに顔を曇らせながら、再び台所へと戻っていった。

10月24日 (5)

すべて話せたなら、どれだけ楽だろうか。

そんな無意味な想いが、ふつふつと生まれてくる。

「おまたせ！」

次に台所から、山倉が戻ってくると、ウェイトレスのように、お盆に乗せた料理を持っていた。

皿の上にはレストランで並んでそうな鳥のから揚げと、付け合せにレタスとプチトマトが乗っていた。

塩コショウの匂いが、鼻の奥を刺激する。

「おいしそうだね」

「へへっ、腕によりをかけて作ったんだよ。味にはあんまり自信ないけど」

炊き立てのご飯を茶碗に盛って、僕の前へと置く。

「それじゃあ、いただきます！」

「どうぞ、召し上げれ！」

鳥のから揚げに、僕は遠慮なくかぶりついた。口の中に生臭い、異様な味が広がっていく。

「どう、おいしい？」

「うん、うん、おいしいよ」

山倉に聞かれ、僕はとっさに頷いた。くりくりした目を輝かせ、山倉が胸を弾ませる。

だが、正直に言うと、山倉の手料理は壊滅的にまずかった。

見た目も匂いも完璧なのに、なぜこんなに味が悪いのか。

疑問に思っていると、鶏肉の骨が真っ赤に染まっているのが分かった。

どうやら火が通っていないらしい。

「本当においしい？」

「うん、もちろん」

「本当に、本当においしい？」

「大丈夫だって。よくできてるよ」

少し躊躇していた山倉の面持ちが、太陽のように明るくなった。

「よかった！　まずいつて言われたらどうしようかと思ってたよ」

山倉は皿に盛られた鳥のから揚げを、躊躇なく食べ始めた。平気なのだろうか……。

そういえば何かの本で、毒物でもごく少量ずつ摂取していくと、その毒物に対する耐性ができるという話を聞いたことがある。

火の通っていない鶏肉も、同じ原理なのだろうか？

「あの、鷹野君？　おなかいっぱいだったら残してもいいからね？」

突如山倉が申し訳なさそうに述べた。思考中に手を止めていたので、お腹いっぱいだと思っただけ。

「大丈夫。おなかにはペコペコさ」

「そう……」

山倉はそのままうつむいてしまった。心なしか山倉の目が、潤みはじめた気がした。

「どうかしたの？」

「い、いや、なんでもないよ。美味しいって言われて嬉しかったからさ」

「大げさだな、山倉は」

「そ、そんなことないよ……」

山倉はそれ以上何も言わずに、食事を続けた。僕も負けじとから揚げを食す。お腹がペコペコだと言った上に、美味しいと宣言したのだ。残すわけにはいかない。

ご飯を同時に食べることで、どうにかして口中の生臭さを緩和させながら、無事に完食する。もちろん、無事だというのは今の話であって、これから先はどうなるか定かではないが。

「う、ごちそうさま」

安堵感からか、自然と息が漏れていた。

「お、お粗末さまでした。すぐに片付けてくるからね」

来たときと同じように皿を持ち、山倉は台所へと戻っていった。そんな後姿を見ながら、僕は不意に笑みが溢れる自分に気がついていった。

確かに料理はおいしくなかった。だが、不思議と失望はない。むしろ山倉をもっと好きになれた気がする。

いままで山倉は、なんでもできる女の子だというイメージがあった。

スポーツは万能、勉強は良くはないが決して悪くはない。容姿も端麗で、非の打ち所がない。僕にとって山倉は、まるで雲の上の人のような存在だった。

そんな山倉の意外な一面を、覗くことができた。なんでもできる人間なんて、この世には存在しない。山倉も僕たちと一緒になんだと実感できた。

それがたまらなく、嬉しかった。

「少し、話でもしようか」

山倉はすぐに戻ってきていた。手にはコップとお茶を持ってきている。食器はきつと食器洗い機でも設置されているのだろう。

「うん、何の話をしようか？」

「そういえば、お母さんの話をしたね」

コップにお茶を注ぎながら、山倉が呟く。

先ほどで終了したと、安心していた話題だけに、思い切り不意をつかれてしまった。

「さっき言ってた通り、お母さんはいつも家にいないの」

「ずっと一人暮らしみたいなもの？」

「そんな感じかな。銀行の口座に生活費が振り込まれるだけで、まったく連絡ないし。たまに帰ってきてるみたいだけど、顔を合えず機会もほとんどないよ」

お茶を注ぎ終わった山倉が、隣へと座る。

想像していたよりも、山倉の母と山倉のわだかまりは、ずっと大

きいらしい。

「お金なんかより、お母さんと一緒にいる時間が欲しいんだ。広い家があっても、一人で生活するんじゃ、まったく楽しくないもの」
山倉の言うとおりだと思った。こんなに広い家に一人暮らしとなれば、寂しいことこの上ない。

「いつか、お母さんがわたしの気持ちに気づいてくれれば……って、暗い話になっちゃったね！」

「いや、凄く嬉しいよ。苦しみがあったらどんどん吐き出していいんだから。山倉の気持ちが少しでも楽になるよう、力の限り協力するし」

「鷹野君ならそう言ってくれると思った。だから話したんだよ」

はにかんでうつむく山倉を、そっと抱き寄せる。一瞬こわばった体も、すぐに僕へと寄りかかってきた。

「こんなに心が安らぐなんて、初めての経験だよ」

僕の肩へと頭を預け、目をつぶる。山倉の髪から、以前とは違うスミレの香りが漂ってきた。

「このままずっと、鷹野君と一緒にいらればいいのに」

まだだ。山倉に悪気はないのは分かっている。だが、現実を引き戻されるのは確かだ。

「山倉……」

「んっ？」

瞳を開き、僕を見上げる山倉。信頼を得た相手にだけ向けられる、安らぎの眼差し。

僕は最終的に、この瞳を裏切らなければならない。そう思うと、胸が急激に締め付けられた。

「山倉、よかったら僕の家に来ない？」

「えっ？ いまから？ でも迷惑なんじゃ」

「こんなに広い家で、一人の時間を過ごすなんて、ほとんど拷問じゃないか。僕の家に来れば、母さんや姉さんもいるし」

「えっ？ 鷹野君ってお姉さんがいたの？」

言われて一瞬だけ、思考が停止する。ミリアについて、言わないほうがよかったのだろうか？

どっちにしろ、家に連れて行けば分かる事実だ。僕は隠さず貫き通した。

「年上の割には役に立たないんだけどね」

「そうなんだ。仲良くなれるかな？」

「大丈夫さ。何も考えてないから」

「ひ、ひどい言われようだね……」

半ば呆れながらも、山倉は楽しそうだった。

姉妹がいない山倉にとって、軽口を叩ける存在というのは、憧れなのかもしれない。

「それじゃあ行こうか」

「ちよつと待って。着替えてくるから」

言われてみれば、山倉は制服のままで料理をしていた。

談話室から出て行った山倉は、五分程度で戻ってきた。黒いシャツと紺のジーンズの上に、薄手のコートを羽織っている。

精悍な顔立ちと調和が取れており、まるでやり手のキャリアウーマンのようだ。

「鷹野君、行こう！」

山倉は僕の手をつかんで、家から出た。ただ、今回は引つ張るわけではなく、普通に歩いている。

外はすでに真っ暗になっていた。街頭の光が、帰る家をなくした蛍のようにたたずんでいる。

「山倉の家と比べると豆みたくに小さい家だから、覚悟しておいてね」

「そんなの全然、気にしないよ。それだけ温かいと思うし」

狭いという感覚しかない僕にとって、山倉の考えは斬新だった。

確かに山倉の家は広いが、一人でいれば寒すぎる。

それは体感的なものだけでなく、精神的にも言えるだろう。

その点、僕の家は狭いが、温かみがある。

口が悪い母さんも、決して僕を見捨てはしなかった。いつも僕のそばにいてくれた。

強い風が吹き抜け、山倉の黒髪をたなびかせる。髪を押さえながら山倉が、苦笑いを浮かべている。

「寒い？ 走って帰ろうか？」

提案するも、山倉は首を振った。

「うつん、ゆっくり帰ろう」

腕と腕を絡ませ、山倉が寄り添ってくる。

暗闇のおかげで助かった。ひそかに僕はそう思っていた。首から上だけが、焼けるように熱い。

そのまま僕と山倉は無言のまま、自宅へとたどり着いた。

10月24日 (6)

「ただいま」

玄関のドアを開けると、すぐ目の前にミリアの姿があった。

「あ、お帰り信也！ 優美ちゃんは？」

なんだか嫌な予感がする。

「この人が鷹野君のお姉さんか。大人の女って感じだね」
背後からひょいっと顔を覗かせて、山倉が耳元で呟く。

「そ、そうかな？ 根っからの子どもだと思うけど」

そんな会話をしていると、ミリアが唐突に声をあげた。

「ゆ、優美ちゃん！？」

嫌な予感はあるさりと的中していた。

頭の中で、頭を抱える自分の姿が浮かぶ。

「えっ？ わたしの名前、どうして知ってるんですか？」

「あ、そ、それは、その……」

当然の疑問を投げかける山倉に、これまた当然の反応をみせるミリア。

慌てふためくミリアを見るのは、これで何回目だろうか？

「ちよつと前に、山倉の話をお姉さんにしたんだよ。どんな人かも話したから、想像通りの姿だったんじゃないかな？」

仕方なくミリアに、助け舟を出す。

ミリアの目に輝きが灯り、何度も頷いてみせる。

「そうだったんだ。これからよろしくお願いしますね、お姉さん。

えっと、名前は……」

「み、美利亚です！ 初めまして！ よ、よろしく！」

ミリアが必要以上に、はきはきと自己紹介する。まるでエンマ様の前にいるかのような緊張ぶりだ。

「美利亚さんですね。こちらこそ、よろしくお願いします」

二人は笑顔で握手を交わす。だが、なぜかミリアは顔を引きつら

せていた。

「お帰り。信也、そつちの子は？」

声が聞こえたのだろう。居間から母さんが姿を現す。

「ただいま。えっと、付き合ってる女の子なんだ。山倉優美さん」

「は、初めまして！ 山倉です！」

今度は山倉が硬くなっている。初対面でも畏怖を与えるほど、母さんの迫力はすさまじいものなのだろうか？

「初めまして山倉さん。で、こんな夜中に女の子を連れ込んで、どうするつもりだ？ まさか……」

指の関節を鳴らしながら、不敵に口元を緩める。このままでは命が危なかった。

「それでちよつと話があるんだ。姉さん、山倉を僕の部屋へと案内してくれない？」

「わかった。こつちよ」

ミリアと山倉は階段を上って、僕の部屋へと入っていった。

僕は母さんの部屋である、居間へと移動した。母さんを納得させなければ、僕の命は風前の灯だ。

もつとも、すでに亡くなっている命なのだが。

「あのさ、実は……」

「いいよ、言わなくても」

「へっ？」

いざ説明をしようとすると、母さんはあっさりと受け入れてしまった。呆気にとられる僕の肩に手を回し、母さんが引き寄せる。

「わけがあるんだろ？ 大体想像がつく」

「ほ、本当に？」

「伊達に三十年も生きちゃいないさ」

「母さん今年で三十五歳……」

言い終わる前に、肩に回っていた腕がヘッドロックへと変わる。数秒間の首絞めは、僕にとって分単位に感じられた。

「とにかくだ。長い間じゃないんだろ？」

「うん、まあ」

「変なことするわけでもないんだろ？」

「もちろん！」

「だったらいいさ。その辺の常識はわきまえてると、母さん信じてるからな」

「ありがとう母さん！」

「いいさ、気にしなくても」

少し照れながらも軽く微笑み、僕を送り出してくれた。

居間から出ると、僕は自分の部屋へと向かった。

一時はどうなるかと思った難関も、無事突破したといえる。

あとは山倉を楽しませてあげればいい。今後どうするか、話してみるのもいいだろう。

「大丈夫だった？」

自分の部屋に戻ると、山倉が顔を曇らせながら尋ねてきた。

母さんの説得は難しそうだと、山倉の目にも映ったらしい。

「うん。なんとか」

「よかった、大喧嘩になったりしたらどうしようかと思ってたのよ」

「そうになったら、母さんに全身殴打されて、部屋に戻る気力も無くなってるよ」

「冗談まじりに言うと、山倉から細かい笑みが何度かこぼれた。

「あれ？ 姉さんは？」

「会わなかった？ 飲み物を持ってくるって言って、部屋から出て行ったんだけど」

と、山倉が説明した直後、狙っていたように、なにかが割れる大きな音がこだました。

10月24日 (7)

部屋の外に出てみると、ミリアがグラスを落として割ってしまった。

立ち尽くすミリアの周りに、大小まばらなガラスの破片が散乱している。

「し、信也君……」

ミリアが目元に涙を浮かべながら、僕に何かを訴えている。

散乱しているグラスの破片を、ミリアと一緒に拾う。いつの間にか側にいた山倉も手伝い、三人で破片を拾い集めていると、

「いま、なんか変な音しなかったか？」

母さんの部屋にまでグラスの碎ける音は聞こえたようだ。居間から母さんが出てきたのが階段から見える。

「ど、どうしよう」

赤子のような怯えた目で、ミリアが助けを求めてくる。

僕はミリアの肩にそっと手を乗せてあげると、ミリアに安堵の表情が生まれた。

そんなミリアの期待を裏切るよう、笑顔で言い放つ。

「すっかり怒られてきなよ、姉さん」

「えっ、えええ!？」

最初は嫌だと首を横に振っていたものの、実際に割ってしまったのは事実だ。

ミリアはしぶしぶと母さんに報告へ向かった。哀愁漂う背中を向けて。

「鷹野君、ちょっとお姉さんにひどくない？ お姉さんと仲悪いの？」

「そんなことないよ。大丈夫だって。母さんも鬼じゃないから、正直に謝れば許してくれるよ」

怒られているであろうミリアの代わりに、せっせと床に散らばっ

た破片を掃除する。

すっかり床が綺麗になった頃、ようやくミリアは新しいコップを持って上がってきた。

今度は紙コップだった。

「はい、信也君」

「ああ、ありがとう」

ミリアはコップを僕に渡すと、おずおずと自分の部屋へと戻っていった。

母さんにこっぴどく、怒られてしまったのだろっ。それならば、そっとしておいた方がいいかもしれない。

僕と山倉は部屋へと戻り、しばらく談笑をした。それは何気ない好き嫌いや趣味などの会話から、小、中学校のアルバムによる思いつき話になっていった。

楽しい時間は過ぎていき、時計は二十三時を回った。

僕と山倉は、必然的にそろそろ寝ようという話になった。

僕は普段使っているベッドを、山倉へと譲った。僕は居間から運んできた、布団を敷いて、中へと潜り込む。

「電気、消すね」

「うん」

部屋の電気を消して、僕は布団の中へともぐりこんだ。辺りを暗闇が支配し、静寂に包まれていく。

「鷹野君……」

「んっ？」

突如静寂を破った山倉の呼び声に、慌てて相槌を打つ。

息を吐きだすような、か細い声がベッドから聞こえてきた。

「今日は本当にありがとう。こんなに楽しい夜は本当に久しぶり……」

「いや、初めてかも」

「楽しんでもらえたのなら、僕も嬉しいよ」

家に連れてきた目的の一つは、山倉を楽しませることだ。

そう考えると、今日の一日は大成功だったといえる。

「本当に、鷹野君と出会えてよかった。これからもよろしくね。鷹野君もつらい時があったら、遠慮なく言っていから」

「うん、そうさせてもらうよ」

「約束だよ。それじゃあ、おやすみなさい」

「おやすみ」

再び静寂に包まれ、ベッドから早くも寝息が聞こえてくる。

僕もゆっくりと目を閉じる。ふと脳裏に、電話越しのミリアの言葉が、思い浮かんだ。

『優美ちゃんと仲良くなっちゃダメ!』

あの言葉には、いったいどんな意味が含まれているのだろうか？

僕と仲良くなると山倉がサーカス会場から逃げられないという意味なのか、それとも別の何かが。

いろいろと考えていく内に、僕の意識は自然と薄らいで……心地よい睡魔が、体を包みこんでいった。

10月25日 (1)

十月二十五日 土曜日

鉄扉のように重かったまぶたが、ゆっくりと開く。目の前には、愛しい山倉がやんわりと微笑みながら、僕を見つめていた。

「なんだあ、夢かあ」

「なにが夢なの？」

夢の住人に声をかけられ、一瞬で意識が覚醒する。

勢いよく飛び起きると、僕はベッドの上にいた。

山倉が口元に手をやりながら、小さな声でこっそりと笑っている。

「や、山倉？」

「どうしたの？ もしかして寝ぼけてる？」

寝癖のついた髪の毛を押さえながら、頭の中を整理する。

ようやくそこで、昨日山倉が泊まったことを思い出していた。

「あれ？ どうしてベッドで……」

「わたしが運んだんだよ。そんなに長い距離じゃないし、体力なら自信あるからね」

山倉は力瘤を作りつつ、おどけてみせた。

彼氏よりも彼女が頼もしいというのは、少し複雑な心境ではある。

「鷹野君のお母さんが怒ってたよ。さっさと朝ごはん食べてくれないと片付かないって」

「そっか。いま何時？」

「九時過ぎだよ」

「山倉は、もう食べたの？」

山倉は首を振ってから、恥ずかしそうに呟いた。

「まだだよ。鷹野君の寝顔見てたからさ」

これでいったい何回目だろう。首から上だけがまるで別の次元に飛ばされ、炎で熱されたような感覚だ。

「それじゃあわたし、先に降りとかからね」

部屋を出て行った山倉に続き、階段を下りていく軽やかな足音が聞こえてくる。服を着替えると、山倉の後を追った。

ダイニングキッチンへと行くと、テーブルの上に朝食が準備され、その上にラップがかけてあった。

どうやら今日の朝食はパンとハムエッグらしい。

「やっと起きてきたか、この万年寝太郎が」

奥から出てきた母さんから、第一声で罵声を浴びせられ、浮き足立った気分がなえていく。

「優美ちゃん、こいつの寝坊癖、なんとかならないか？」

「いつも遅刻寸前ですからね。治らないかもしれませんよ」

「山倉まで……」

がつくりとうなだれる僕を見て、二人が大声で笑う。

気分としてはあまり良くないが、山倉の笑顔は今までに見たことのないような、とてもすがすがしいものだった。

「冗談だよ、鷹野君。今度から迎えに来るから、一緒に学校に行こうよ」

「それはいいアイディアだ。信也、まさかお前、女の子を待たせるなんてデリカシーの欠けたこと、しないよな？」

母さんから脅威のプレッシャーをかけられて、僕はおずおずと頷いていた。

般若のような眼差しで凝視され、否定などできるわけがない。

「それじゃあ、月曜日から迎えに来るね」

「そうしてくれるか、優美ちゃん。悪いな、信也が迷惑かけて」

「迷惑だなんてとんでもない。鷹野君がいなかったら、わたし……」

口ごもる山倉に、僕は胸が苦しくなった。

少しずつ恐れていた事態へと向かっている。

山倉が僕に依存しすぎると、僕が死んだときの苦しみが増すだけだ。

山倉の支えになれる、心からの友達を作ってほしい。もちろんそれは、僕以外のだれかでなければ。

僕のことを忘れてほしくはない。だが、僕だけを思い続けないでほしい。

それが僕の、正直な想いだった。

「鷹野君、今日はどうするの？」

不意に聞かれて、我に返る。

「えっと、今日は……」

考えつつ、ふとカレンダーを見やる。十月二十五日 自分で言

うのもなんだが、今日は僕の命日だ。

山倉を迎えに行く途中、僕は子どもをかばって。

「まずい！」

「んふ？」

「どうした、信也？」

勢いよく立ち上がった僕を、目を丸くした二人 山倉はパンを

くわえたまま が僕を見上げる。

「ごめん、山倉。ちょっと用事があるんだ。悪いけど待っていてくれるかな？」

「信也……」

母さんの冷たい視線が突き刺さる。だが、これだけはどうあつても譲れなかった。

「いいよ。わたしも着替え持ってきてなかったから、一度家に帰ろうと思ってたし」

「じゃあ、用事が終わったら山倉の家に行くよ。ごめんね！」

「うん、じゃあ家で待ってる」

山倉と別れ、僕は急いで外に出た。目指す場所は一つ、病院前の交差点だ。

秋空にしては強い日差しを浴びながら、記憶を簡単に整理する。

初めて体験した今日、僕は一人の少女を助けた。その結果として、命を落としてしまったのだ。

二度目である今日、少女は同じように横断歩道へと飛び出すだろう。その場に僕がいなければ、少女の運命は 考えただけでも鳥

肌が立つ。

全力で住宅地を駆け抜け、吉沢総合病院へと向かう。件の横断歩道にたどり着いた時、幸いにも少女の姿はまだなかった。

僕は横断歩道を渡った。反対側から飛び出すよりも、そばにいた方が助けやすい。

十分ほど経過して、少女とその母親が姿を現す。

僕の記憶どおり、そこで少女の母親は知人と出会い、立ち話を始めた。

少女はよたよたと横断歩道へと進み、道路に飛び出す直前で、僕は少女を引きとめた。

「子ども、危ないですよ？」

「あつ、す、すみません」

その直後、横断歩道へ突っ込んでくるトラック。僕にとっては二度目でも、少女の母親には、壮絶すぎる光景だった。

トラックは交差点を横切った時点で、急ブレーキを踏んでいた。辺りの人影から、ざわめきが起こる。

刹那、僕の両手をがっちりつかみ、少女の母親が涙目で僕に訴えかけてきた。

「あ、ありがとうございます！ 娘の命の恩人です！」

「あ、いや、そんな大した……」

「あなたがいなければ、娘は今頃あのトラックにはねられていました！」

「いや、まあ、そうかもしれませんね……」

母親の必死の形相にうろたえつつも、なんとか返事をする。少女は何が起こったのかいまいち分かっていないらしく、きょとんとしていた。

母親は知人への挨拶もそこそこに、僕を引っ張った。

「ぜひともお礼をさせてください！」

「いや、別に、そんな気を使っていたただかなくても」

「いえいえ、娘の命の恩人ですから。ただで返すわけにはいきませ

ん」

「いえ、本当に大丈夫ですから」

「でしたら、喫茶店でコーヒーでも。せめてそれぐらいはさせてください！」

母親は僕の手を引く力を、まったく緩めようとしなかった。仕方なく僕は了承し、近くの喫茶店まで移動した。

10月25日 (2)

駅前にあるレトロな雰囲気をただよわせる喫茶店『チュ・ターク』へと入る。

わざと焦げ目のような模様をつけた木造の内装と、流れるクラシックが、店内を落ち着かせる役目を担っている。

「あれ？ 信也じゃない」

カウンターに座ろうとした僕たちの背後から、不意に声をかけられ振り向く。

そこにはミリアの姿があった。

「ミリ……姉さん！ どうしてここに！」

「どうしてって、デートに決まってるでしょう？」

「デートって……」

確かにミリアの向かいには、あたふたと慌てふためく男性が座っていた。ただ、年齢的には僕と同じぐらいで、ミリアの恋人としては不釣り合いな気がする。

そもそも、僕のサポートとして来ているはずのミリアが、なぜ無責任にもデートを楽しんでいるのか。少しいらだつ僕へと、ミリアの恋人は挨拶をしてきた。

「は、初めまして。竹下聡史です」

丁寧に挨拶をして、頭を下げる竹下聡史。

軽く会釈を返すも、ミリアへの不満が爆発しそうだった。

「あのさ、姉さん……」

「わたしよりも、信也こそどうしたの？ まさか優美ちゃんをほったらかしにして、不倫でもしてるんじゃない……」

側にいる親子に目をやりながら、ミリアがきつい視線で睨みつけてくる。

「ま、まさか！ ちょっとこの子を助けたから、お礼にコーヒーでもって……」

「それで、優美ちゃんをほったらかしにしてるわけだ」

「そういうわけじゃ……」

「あーあ、信也君の愛情なんて、そんなもんだったのね」

お別れの挨拶を無駄だと表するミリアに、愛情がどうのこうのと語られたくはない。

だが、ミリアの言う通り、いまの僕は山倉の元へと向かったほうがいい気がする。

僕の到着を、家でいまかいまかと待ち続けているのだから。

「あの、すみません……やっぱりいいです。僕はちよつと用事があるんで」

「そうですか……」

ミリアと僕の会話を聞いていたらしく、母親は先ほどとはうって変わって、あっさりと引き下がった。

「よかったら、そのの二人にご馳走してあげてください。僕の姉とその彼氏で、初デートらしいんです」

「わかりました。では、そうさせてもらいます。今日は本当にありがとうございました」

「お兄ちゃん、ありがとうね！」

母親の真似をしたのか、可愛らしげな仕草で、少女も僕に頭を下げた。

「もう道路に飛び出しちゃだめだよ？」

「うん！」

少女の頭を撫でてから、僕は喫茶店チュ・トークをあとにすると、すぐに山倉の家へと向かった。

日が昇ってきたせいか、じりじりとした暑さが体を包んでいる。僕はハンカチで汗を拭きながら、早足で進んでいた。

おかげで予想よりも早く、山倉の家へと着いた。インターホンを鳴らすと、山倉の声が聞こえる。

「どなたですか？」

「鷹野だけど」

「待つてたよ！　すぐに開けるからね！」

山倉の活発な声に続き、アコーディオンドアが開く。家の中のスイッチでも開くのだろう。

林道を進み、噴水を回って玄関前まで行くと、山倉が手を振っていた。

「やつほお！」

「お待たせ」

「うっん、そんなに待つてないよ。わたしの部屋に行つて、少し話でも……」

いまままでにこやかだった山倉の顔が、突然に曇った。僕の背後へと視線が移る。

振り向くと、玄関から一台の車が入ってきていた。

ドラマやドキュメンタリーなどで見かけるお金持ちの象徴、確かロールスロイスとかいう車のはずだ。

「行こう、鷹野君」

山倉は僕の腕をつかむと、引つ張つて玄関の中へと入った。

昨日と同じ豪壮な家具たちが、僕を迎えてくれる。

「早く、わたしの部屋に行こう！」

なぜか慌てる山倉に、僕は首をかしげながらも従う。

だが、僕の疑心暗鬼が、すべての行動を鈍らせていた。

10月25日 (3)

背後の扉が開き、若作りをした女性が入ってくる。

手にはビー玉よりも大きな宝石の指輪が、バッグや服装はブランド品が、そして周りを包む空気には、えも言えぬ香水の匂いが漂っている。

顔に塗りとくられた厚化粧に、紫がかったレンズのメガネ。あきらかに成金といった、そんな風貌だった。

「優美」

「何よ……」

山倉を呼び捨てにする女性と、普段の山倉からは考えられない仏頂面。

この女性が山倉の母親だと理解するのに、そう時間はかからなかった。

山倉よりもお金を大事にするという、山倉の母親は、葉巻に火をつけながら山倉をにらみつけた。

「この子はだれなの？」

僕を顎で指し、山倉の答えを待つ。山倉は僕のそばへと寄り添い、強引に腕を組んでみせた。

「わたしの彼氏だよ。文句ある？」

「あるに決まってるでしょう」

「そう。でもわたしには関係ないわ。わたしが愛しているのは鷹野君だけなんだから」

普段の僕なら必要以上に照れて、顔を真っ赤にしていただろう。だが、その場の雰囲気、僕を更なる緊張の領域へと運んでいった。

「あなたにはすでに婚約者がいると、何度も言っただけです」

「いやよ！ 会ったこともない男と結婚するなんて！」

「いやなんて言葉は言わせません。これは山倉コンツェルンの未来

のために必要な結婚なのですよ」

「ようするに政略結婚でしょ！」

食い入るように向かい合い、目をぎらつかせる。

山倉の母親が先に目をそらすと、そのまま僕に近寄り、睨みつけてきた。

「あなたがどこの誰かは知りませんが、優美はすでに婚約者がいるわ。すぐにお引取り願います」

「うそ！　でたらめだよ！　鷹野君！」

二人に挟まれて戸惑う僕に、母が吐き捨てるように言い放った。

「どうせ財産目当てでしょうが」

「へっ？」

完全に思考になかった意見に、僕は反応できなかった。代わりに山倉が目を吊り上げ、母の胸倉を強くつかみあげる。

「鷹野君はそんな人じゃない！」

「なぜ断言できるの？　人間なんてみんな、お金の前では本性を現す。この子もすぐにそうなるわ」

「な、なりませんよ！」

慌てて否定する僕に対しても、母は平然としていた。

「お金目当てではないと？」

「も、もちろんですよ！」

「先ほどもってますが、それでも違うと言い切れるのかしら？」

「当然ですよ！」

半ば苛立ちで我を忘れながら、僕は強い調子で怒鳴った。山倉も母から手を離し、僕に同意してくる。

「そうよ。鷹野君はお母さんとは違うのよ」

「どう違うのかしらね」

「お母さんには、お金で得られない友情なんて、分らないのよ」
片方の眉毛だけを吊り上げ、僕を見下してくる。山倉の母を嫌う気持ちも、いまなら嫌というほどよく分かった

「鷹野君、わたしの部屋に行こうよ」

山倉が僕の手を引っ張る。背後から重いものが動く、低い音が聞こえた。

振り返ると、玄関においてあった装飾用の壺を掴んだ、山倉の母親の姿があつた。

「危ない！」

僕の声はわずかに遅かった。振り下ろされた壺は、的確にターゲットへと振り下ろされた。鈍い音が耳を襲う。

だが、直後のつばが弾け飛ぶ乾いた音で、その音は辺りには響かなかった。

そのまま山倉は、床に散らばる破片と一緒に沈んでいった。

「山倉……山倉！」

慌てて山倉を抱き起こす。

壺で殴られた山倉のこめかみから、ドロツとした赤い鮮血が染み出てくる。その液体は頬を伝って、床へと滴り落ちていった。

肉体から力は消えうせ、目を閉じたままピクリとも動かなかった。延々と血を流していくだけの山倉を、冷たい視線で見下ろす母親。

「ふう、高い壺なのに……」

手に残っていた壺のふちを床へと捨て、母親は平然と立ち去ろうとする。

「どこへ行くつもりですか！ 早く、救急車を呼んでください！」

「自分で呼べばいいじゃない」

「な、なんだって！？ アンタの娘が死ぬかもしれないんだぞ！」

慌てもせず、母親はポケットの中から、葉巻を取り出す。

「必要なのは、大手業者の御曹司と結婚できる道具よ」

「道具！？」

「反抗なんてされたら、先方に悪い印象しか与えないわ。もっと聞き分けのいい道具を養子として迎えたほうがよさそう。だから、その子はもう用無し」

「ふざけるな！」

「ふざけてないわ。それじゃあ会議があるから、あとはあなたの好きにしてちょうだい。」

救急車を呼ぶなら優美の電話でね」

高笑いしながら去っていく母親を、追っていつて殴るのはたやすいだろう。

だが、そんな暇はなかった。一刻も早く山倉を病院に連れて行かなければ。その先は考えただけでも背筋が凍る。

山倉の母親の言葉を当たり前のように無視して、食事をした部屋に備えられたレトロ風の黒い電話から、一一九番へと通報する。

僕は救急車の到着までに、知りうる限りの応急処置を施した。

出血部位に布をあて、指で骨に向かって圧迫する。これで大量出血を防げるはずだ。

「鷹野、君？」

かすれ声に反応し、山倉の様子を伺う。意識を取り戻してはいるが、顔面は蒼白で目も虚ろだった。

「救急車は呼んだから。喋らなくていいよ。ゆっくり、落ち着いてね」

「ありがとう。鷹野君にはお世話になりっぱなしだね」

山倉が再び目を閉じる。そこでようやく救急車が山倉邸に到着した。

救急員が慌てて山倉を運び、僕も一緒に救急車へと乗り込む。山倉の生死が問われている今、山倉を救うために来た僕が、放っておけるわけがない。

山倉と僕は、そのまま近くの病院　吉沢総合病院へと運び込まれた。

二時間ドラマでよく見かける、緊急治療室に運び込まれる光景を目のあたりにする。

そのまま手術中の赤いランプが、煌々と灯る。騒々しかった病院内は、瞬く間に静かになっていった。

手術室の前に備えられた長いすに、腰を下ろす。組んだ手の上に

額を乗せて、がつくりとうなだれた。

もしかしたら、このまま死んでしまいかもしれない　頭をよぎった仮定と沸き起こる悪寒を、打ち消すように何度も首を振る。

とにかく早く結果を知りたかった。もしも山倉が死ねば、念願の山倉救出は当然、失敗となる。

そうなれば、僕は史上最悪の罪人だ。愛する人の死期を早めてしまったのだから。

その時、ふと頭にミリアの顔が浮かぶ。人の失敗を哀れんでいる悔しくも、そんな表情だった。

ひよつとして、ミリアに中界へと戻ってもらえば、山倉の生死が分かるのではないか？

わらにもすぎる想いで、病院内に設置された公衆電話を探し、自宅へと電話をかける。

残念なことに、電話に出たのはミリアではなく、母さんだった。

「はい、鷹野ですけど」

「母さん！　ミリアは帰ってきた！？」

「美利亞？　いや、まだ帰ってないぞ。それよりお前、なんで姉さんを呼び捨てにしてるんだ？」

水が下流を流れていくような音で、頭から血の気が引いていく。

「そんなことより！」

「そんなこと？　年長者を呼び捨てにする無礼が、どうでもいいことだつてのか？」

「ああ、もう！　訳はあとで説明するから、姉さんが帰ってきたら、すぐ吉沢総合病院へ来るように言つて！」

母さんの返事を聞く前に、電話を切る。手術室の前へと戻り、再び長いすに座った。

手術中のランプはまだ消えていない。山倉の無事を祈る、それしかできない自分がはがゆかった。

何度もランプを見上げては、赤い光を確認し、すぐに顔をうつむかせる。

時間は淡々と過ぎているだろう。だが、僕にとってその時間は止まっているように感じていた。

灯りっぱなしのランプ、人影のない手術室の前、聞こえてくるのは、自分の呼吸と鼓動の音だけ。

手足が、意に反して震えだす。こぼれそうな涙をこらえるのに、僕は必死だった。

10月25日（4）

時が動き始めるきっかけを作ったのは、手術中のランプの消灯だった。

手術室から、医者と看護師が数人、姿を現す。山倉はベッドで寝かされたまま、どこかへ連れて行かれた。

まさか、霊安室へ？

おぼろな足取りで、山倉の後を追おうとすると、背後から肩を叩かれた。

「もう大丈夫ですよ。命に別状はありませんから」

振り向くと、看護師が微笑んでいる。

ようやく、僕の心に余裕と安らぎが生まれた。後を追うと、三六号室へと山倉は運ばれていった。時計を見ると、すでに十四時を回っている。

いったい何時間ほど手術をしたのか　逆算しようとしたが、すぐにやめた。

手術が何時間続いたのかなど関係ない。大事なのは、いま山倉がこうして生き残っている嬉しい事実だ。

ベッドに寝かされ、落ち着いた寝息をたてている山倉は、死の恐怖など微塵も感じさせなかった。

病室に配備された緑色の丸椅子に座り、胸をなでおろす。あとは山倉が目覚めるのを待つだけだ。

山倉の寝顔を、頬杖をついてみつめる。山倉の痕に巻かれた包帯が、事の重大さを物語っていた。

「鷹野君？」

「うわっ！」

声を掛けられ、椅子ごとひっくり返りそうになるのを、どうにか踏ん張る。

山倉は丸い双眸を大きく見開き、僕の顔をまじまじと眺めていた。

「大丈夫？」

「な、なんとか。山倉の方こそ、気分はどうだい？」

「うん……大丈夫だよ」

顔をそらし、口を一字に結ぶ。山倉特有のから元気が、ふつふつと伝わってきた。

「無理しなくていいよ。ここには僕しかいないんだから」

「そうだよ、やっぱり、鷹野君しかいないんだよね？」

山倉は自分の体を起こそうとしていた。

「まだ寝てたほうがいいよ」

「ううん、大丈夫だから」

僕の制止も徒労に終わり、山倉は上半身を起こす。

大量の涙が溢れ出す山倉の瞳。そのまま涙を拭うことなく、山倉はぼつりと呟いた。

「道具、だもんね」

息が一瞬止まり、鼓動が速度を上げる。

「聞いてたの？」

「殴られた後も、かろうじて意識はあったからね」

「そっか」

できれば聞かないでほしかった。あんな言葉を実の親から聞いたら、僕もショックで立ち直れないだろう。

「悪い夢だっと思って思ったけど、やっぱり夢じゃなかったんだ」

わななく体を押さえ込むように、両手で自分の体を包んだ。

「わたしが、わたしがね、今までやってこれたのはね……」

震える体をそのままに、山倉が語りだす。

「希望があつたからなの」

「希望？」

「昨日、話したよね？ わたしはお母さんと一緒の時間がほしいって。お金なんか要らないんだって。いつか、わたしの気持ちに、お母さんが気づいてくれるんじゃないかって、そんな願望があつたの」
僕は無言で耳を傾けていた。余計な口を挟むよりも、いまは山倉

の告白を受け止めるべきだと判断した。

「だけど、認識が甘かったんだって身をもって知ったよ。お母さんはまったく気づいてくれてなかった。当然だね。わたしは道具なんだもん。愛情なんて与えてもらえない。今までも、そしてこれからもね」

山倉は青い顔色で、腕にさらなる力を込めた。山倉の白い肌に、爪が食い込んでいく。

「それにもし、気づいてくれるような人だったら、お父さんだって……」

「山倉、もういいから、今はゆっくり休むといいよ」

山倉の腕を体から引き離すと、今度は両手で僕を抱きしめてきた。「もう、ダメ。もう限界だよ。もう、もう生きたくない!」

絶叫は僕の耳元で叫ばれた。山倉の頭を逆に抱きしめて、頭を撫でる。

「山倉、落ち着くんだ」

「いやだ、もういやだ! わたしはなんで生きてるの? ただお母さんに利用されるためだけ? 道具としての価値しかないのに、どうして生きなきゃいけないのよ!」

「山倉!」

「みんな、みんな気がついてよ! 張り裂けそうな苦しみで、今にも心は碎ける寸前なのに! どうしてわたしの苦しみに誰も気づいてくれないのよ!」

山倉を抱える腕に、力を込める。山倉の感情が伝わり、胸に激痛が走った。

「山倉……死ぬなんて、もったいないこと言うなよ」
「だって!」

反論しようとした山倉の口を、手で塞ぐ。落ち着きを取り戻すのを待ってから、僕は手を外した。

「死んだら、みんなとお別れなんだぞ」

「いいよ、わたしが死んだって、だれも悲しまない」

「そんなことないさ。僕はもちろん、三村や吉沢だって悲しむよ」
頭を撫でながら、なだめるように諭す。

だが、山倉は小さく首を振った。
「だめだよ、やっぱり。いつだって、わたしは一人なんだ。誰もわたしのこと、友達だなんて思っていないよ。本当の友達なら、わたしの苦しみを、分かってくれるはずだもの」

山倉は一人で苦しみ続けていた。それが痛いほどよく分かった。だれにも頼らず、自分一人で解決しようと躍起になり、うまくいかないのもすべて自分ひとりで抱え込む。その悪循環が、山倉の心を八つ裂きにしてしまったのだ。

「ねえ、山倉」

山倉が顔を上げる。

「友達ってどういう人だと思う？」

「わたしを信頼してくれて、分かってくれる人。わたしを友達と思ってくれる人だよ」

山倉の定義に、僕は小さく首を振った。

「僕の考えは少し違うかな？」

「じゃあ、信也君にとっての友達ってなんなのよ？」
少しいらついているのか、荒々しい口調で聞いてくる。

僕は一呼吸おいてから、山倉へと話した。僕にとっての友達の定義を。

「僕にとっての友達は、僕が友達だと思える人だ」

「何よそれ。わたしと一緒にじゃない」

「違うよ。山倉は友達だと思ってくれる人と言った。僕は友達だと思える人だ。相手から友達と思ってもらえるかどうかは関係ない。大事なのは、自分が相手を友達と思えるかどうかだ」

「じゃあ、鷹野君にとって友達って、相手が自分をどう思っても関係ないってこと？」

「そうだよ」

「そんなの、おかしいよ。友達ってお互いに助け合うでしょ？」

「もちろん」

「だったら、相手から嫌われてても友達なんておかしいじゃない」

「山倉の言うことはもつともだよ。だけど、それは結果だけを求めている。安易に友達を手に入れようとしてるだけだ。それじゃあ本当の友達は手に入らないよ」

山倉の瞳に、再び脅えが生まれていく。

僕の言葉は山倉にとって厳しいものかもしれない。だが、山倉にいま必要なのは、僕の存在よりも、信頼しあえる友人のはずだ。

「相手が山倉をどう思っているかなんて関係ないだろ？ 山倉が友達だと信じるのが大切だと思う。そうすれば、みんな友達のはずだろ？ そして僕たちの周りに、信じてくれる山倉を、見捨てる人なんていないさ」

「確かに、鷹野君の言う通りかもしれない。だけどどうすればいいのか、わたしには分からないよ」

下唇をかみながら、山倉は顔をしかめた。心なしか瞳に涙が浮かんでいる。

「信頼してるって、口で言うのは簡単だと思う。だから僕は、本当の信頼は行動で示すものじゃないかなって」

山倉は黙っていた。聞いてくれているものと判断して、僕は続ける。

「山倉は今まで、苦しみや悲しみを胸の内に溜め込んでいた。自分の本音を伝えるのを怖がっていた。本性を出すと、嫌われるんじゃないかって脅えてた。僕たちは魔法使いじゃない。話してくれなければ、山倉の本心なんて分からないんだ。じゃあどうして、山倉は僕たちに、悩みを打ち明けられないのか。それは、相手を心から信頼していないからじゃないか？」

首を左右に振り、山倉は僕の言葉を否定した。だが、反論はしてこなかった。

「確かに自分の悩みを、他人に打ち明けるのには勇気があるよ。だけど、僕はその勇気こそが信頼だと思ってる」

「勇気が……信頼？」

「勇気を出して、悩みを告白するということは、その人を信頼しているからだろ？　僕に悩みを話した時だって、かなりの勇気が必要だったと思う。だけど、僕はそこに山倉の信頼を感じたんだ」

今度は頷いてみせる。僕も自然と、頭を下げていた。

「悩みを話したからって、すぐに解決するとは限らない。だけど、山倉には思いつかなかった解決方法を、誰かが思いつくかもしれないだろ？　山倉が勇気を出せば出すほど、その可能性はあがるんだ」細かく震えていた山倉の体が、ゆっくりと落ち着きを取り戻し始めた。

ベッドへと腰掛けて、山倉の肩に手を乗せる。顔を上げる山倉に、僕は精一杯の笑顔を送った。

「僕の言ってること、分かってくれた？」

涙を拭いながら、山倉は首を縦に振った。

「鷹野君、わたしが間違ってたよ。回りのこと気にしてるって言いながら、一番に自分のこと　自分が傷つかずにすむ方法ばかり考えてた。鷹野君の言葉で目が覚めたよ。だけど……」

「だけど？」

「もうみんな、呆れてるんじゃないかな？　誰も信頼できないわたしに、愛想を尽かしてるんじゃないかな？」

山倉の頭を抱えて、僕は優しく教えてあげた。

「間違いに気がついたのなら、それを直せばいいだけさ。いまならまだ間にあう。山倉は幸せになれるんだ。だから死ぬなんて……生きたくないなんて言わないでくれよ」

しばらく僕たちはそのまま動かなかった。山倉のすすり泣く声だけが、僕の耳を捉えて離さなかった。

先に動きがあったのは、山倉だった。抱きしめる僕の手を優しく振り解き、にっこりと微笑んでみせる。

「鷹野君に出会えてよかった。鷹野君がいなかったら、わたし、絶対にダメになってた」

「山倉の力になれたなら、僕も嬉しいよ。だから、元気出して。もう……」

「うん。死にたいなんて言わなくて済みそうだよ。みんなにも全部話してみる。果歩ちゃんにも、すごく心配かけてると思うし、三村君は…… ニュースキヤスターだからなあ」

「大丈夫だよ。三村がいくらニュースキヤスターでも、本当に苦しんでる人の悩みを、暴露したりなんかしない。そんな奴なら、僕は最初から友達になったりしてないよ」

「そうだね。鷹野君の親友だもんね」

山倉は大きく背伸びをしてみせた。目の前を見据えた瞳は、燦然としている。

「なんだか、すごく世界が輝いてみえる。いままで濁った泥水のような世界だったのに」

僕の肩を引き寄せると、山倉は明るい声で笑っていた。

「もう大丈夫だよ、信也君！ わたしの中にあつたわだかまりが、薄れていってる気がする。わたしは一人じゃない。一人で苦しむ必要はないんだよね！」

山倉にほおずりをされてしまい、慌てて僕は山倉から離れた。

「あはは、真っ赤になっちゃってる。そんなに照れなくてもいいじゃない」

「て、照れるよ……」

口ごもる僕に、山倉は口元を緩ませた。

映える微笑みに、僕は確信する。山倉はもう大丈夫だ。

「それじゃあ、そろそろ帰るよ。明日また来るから」

「うん、待ってる」

山倉に手を振り、部屋を出ようとすると、

「鷹野君……」

背後から山倉の声が聞こえ、振り返った。

山倉は僕から視線をそらしつつ、なにやら手をもじもじとさせていた。

「あのね。果歩ちゃんにも三村君にも、全部話すつもり。だけど、やっぱりわたしの一番は鷹野君なの」

「ありがとう。山倉にそこまで想ってもらえるのは嬉しいよ」

「うん。だから……ずっと側にいてくれないといやだからね？」

山倉が脅えた表情で、僕を見つめてくる。

動悸が一度だけ高鳴る。それでも、後戻りはできなかった。

「当たり前じゃないか。山倉が僕を必要としている限り、ずっと一緒にいるよ」

「本当に？」

「嘘なんていわない。山倉さえよければ、僕の家に住んだっていいさ」

「えっ、いいの!？」

「もちろん。自宅にいたら心が休まらないでしょ？ 僕の家だったら狭いけど、母さんもいるし。ちよつと怖いけど、悪い人じゃないからさ」

「ありがとう、ありがとう鷹野君！」

ベッドの上で何度もお礼を言いながら、頭を下げ続ける。

僕はそんな山倉に軽く手を振り、病室を後にした。

10月25日 (5)

部屋の扉を閉めると、すぐさま僕の元へと人影が近づいてきた。
ミリアである。

「ミリアか……遅かったな」

「そんなことより、ちょっと話があるの」

「話？」

「いいからついてきて」

淡々と、まるで怒ったように述べると、ミリアは僕の手を引っ張り、足早に病院を出て行くとする。

「どこ行くんだよ」

「いいから」

仏頂面でそれだけ言うつと、あとは無言で手を引っ張り続けた。

外はまだ日が照っている。雲ひとつない晴天は、いまだ変わらない。
い。

ただ、秋場にしては強い日光の影響か、少し暑苦しかった。

そんな僕の愚痴を聞いていたかのように、冷たい風が吹き抜けていく。

ミリアが足を踏み入れたのは、子どもが遊ぶために作られた児童公園だった。

最近の子どもは、あまり外で遊ばないらしく、時間の早い今の段階でも、誰もいない。

風に吹かれてわずかに揺れるブランコが、蚊の鳴くような金きり音を、ため息のように漏らす。

ミリアは乱暴にベンチへと座ると、きつい眼差しで僕を睨みつけてきた。

「どうしたんだよ、ミリア」

「優美ちゃんを助けられたのは、さすが信也君といったところね。
おめでとうと言っておくわ」

「ああ、ありがとう……」

ドスの聞いた声で称賛されても、あまり嬉しくはなかったが、一応お礼を告げる。

だが、ミリアの機嫌は一向によくなる気配を見せなかった。

「問題はその後だよ。信也君、優美ちゃんになんて言った？」

「えっと……僕の家に住んでもいいって」

「その前よ！」

「な、何をそんなに怒ってるんだよ？」

「いいから！」

赤く染まつた顔色と、こめかみに浮かんだ青筋からは、容易に怒りを読み取れる。

ミリアの感情を逆なでしないように、落ち着いて山倉へと言った言葉を振り返る。

「確か、ずっと山倉の側にいるよって」

「それよ！」

勢いよく立ち上がったミリアは、僕の胸倉をつかみあげていた。

「は、放せよミリア！」

「信也君は来週の火曜日には死ぬのよ！ もう分かっているはずですよ！」

「とりあえず、落ち着けて！」

腕をつかみ、力ずくで振りほどく。ミリアは息を荒げて、涙を瞳に溜めていた。

「ずっと一緒になんて不可能なのよ！ どうしてあんなことを言ったの！」

「じゃあなにか？ 火曜日に死ぬから、ずっと一緒にいるなんて無理ですって、答えればよかったのか？ そうやって山倉を絶望に追い込めっていいのかよ？」

「そうじゃない、そうじゃないけど！ あんなふうには断言しなくてもよかった！ このままじゃ信也君が死んだら、優美ちゃんは信也君の後を追うかもしれない！」

「大丈夫だよ。吉沢や三村がなんとかしてくれる。僕がいなくなつて、山倉は……」

ミリアに手を振り解かれて、僕の言葉が止まる。そのままミリアは、僕の鼻先を指差してきた。

「じゃあ聞くけど、信也君が逆の立場になつたとしたら、平穩にやつていける自信があるの？ 愛する優美ちゃんを失つても、励ましてくれる友人がいれば、それで満足だつていうの？」

ミリアの設問に、僕はあつさりと言葉を失ってしまった。

山倉がいなくなり、そばには三村がいる。

三村は僕を一生懸命に、励まそうとしてくれるだろう。

だが、僕の心はそれだけで癒されるのか？ 山倉のいない隙間を埋められるのか？

答えは……ノーだ。

「ぜ、絶対に自殺なんてさせない！」

苦し紛れの言い訳に、ミリアが鼻で笑う。

「どうやって？」

「それは……今から考えるさ！」

大きくため息をついてから、ミリアは僕を思い切り突き飛ばした。転倒した僕を見下しながら、吐き捨てるように述べる。

「話にならないわ。やれるもんならやってみなさいよ！ もしも優美ちゃんが後を追つたら、信也君なんて地界行きなんだから！」

目に涙を溜めたまま、ミリアは公園から走り去ってしまった。昼間会つたミリアとは、別人ではないかと疑うような変わりようだった。

「なにがあつたんだ、ミリア……」

ぼやきつつ立ち上がり、お尻についた砂を拭う。とりあえずミリアの後を追つて、家の方角へと向かった。

「ただいま」

「ああ、お帰り」

帰宅すると、母さんが仏頂面で、僕を迎えた。そばには同じ年ぐ

らの男子が、僕に頭を下げる。『チュ・ターク』でミアと一緒にいた　確か、竹下聡史だ。

「お邪魔してます」

「ああ、どうも……姉さんに用事？」

「ええ、だけど、会ってもらえないみたいなんで、帰ります。夜分遅くにすみませんでした」

もう一度頭を下げてから、男子は玄関を後にしていった。悲しげな背中が、小さくなっていく。

「母さん、姉さんは？」

「泣きながら帰ってきたみたいで、すぐに自分の部屋へと入っていた。ノックしても泣き叫ぶ声しか聞こえないし、鍵もかかっているからな。そつとしいてやれ」

「うん……」

母さんの言う通り、今は放っておくのが最善だろう。たとえ顔を合わせたとしても、落ち着いた会話などできないまま、また口論になるのがオチだ。

お風呂に入ってから、大人しくベッドに入る。ミアのようすが気になりつつも、僕の意識は緩やかに遠のいていった。

10月26日(1)

十月二十六日 日曜日

午前九時過ぎに起きると、いち早くミリアの部屋へと向かった。

三度ノックをするも、まったく反応はなかった。

玄関へ降りる。ミリアの靴は昨日と変わらず、乱雑に転がったまま。どうやら外には出ていないらしい。

昨日のようすは、明らかに尋常じゃなかった。腕を組んで、ミリアと話す手段を考えてみる。

火事だと言つてドアを叩く、おいしそうな食事の匂いで部屋からおびき出す、エンマ様の真似で部屋から出てこいと怒鳴る　正直、どれもうまくいきそうにない。

ダイニングキッチンへ入ると、母さんが朝食の支度をしていた。

もちろん、ミリアの姿はない。

「母さん、姉さんは？」

もしかしたら、母さんなら何か知っているかもしれない　そんな淡い期待に賭けてみたのだが、そう上手くはいかなかった。

「美利亜か？　まだ起きてきてないぞ。昨日から様子が変だったけど……彼氏にでも振られたんじゃないか？」

そつえば喫茶店で、竹下聡史と名乗る男の子にあった。彼ならなにか分かるかもしれない。

同じくらいの年齢だった彼なら、もしかすると三村が分かるかもしれない。そんな想いから三村に連絡を取ってみる。

だが、返事はノーだった。竹下聡史という名前自体、三村は知らなかった。

「ところで、信也」

僕が家の受話器を置くと、待っていたかのように母さんが声をかけてきた。

「なに？」

「なに？　じゃないだろ。昨日病院から電話してきたじゃないか。何かあったんだろ」

そういえば後できちんと説明すると、約束して電話を切ったんだった。

「あ、あれは、大した用事じゃないから」

「たいした用事じゃないならどうしてどもるんだよ。大体だな、病院から電話なんて普通しないだろ？　お前は元気そうだから、優美ちゃんの身にでも何か起こったのか？」

こんな時の母さんは、妙に目ざといというか、勘がいい。

「いや、それは……たまた姉さんに用事があったんだけど、近くにある目立つ建物が病院だったからさ」

「ほう……じゃあお前は、待ち合わせ場所として駅よりも病院を選ぶんだな？」

がつくりとうなだれる僕を、勝ち誇ったような笑みで見下ろしてくる。

やはり付け焼刃の言いわけでは、母さんに太刀打ちできるわけがなかった。

仕方なく僕は母さんにすべてを話した。もちろん怪我を負わせたのが実の母親だという事実は伏せたが。

「まったく、最初からそうやって説明すればいいんだ」

「うん、ごめん」

「なにかあったら、いつでも言うんだぞ？　優美ちゃんに信也がついているように、信也にも母さんや姉さんがついていて。一人ですべてを背負う必要はないんだ」

「分かってるよ。ありがとう」

頭を下げると、母さんは照れくさそうに頬を掻いた。

「それじゃあ今日も優美ちゃんのところへ行くのか？」

「もちろんだよ」

「そうか。とりあえず朝食くらいしっかり食べていけ。信也が元気な姿を見せないと、意味がないんだからな」

「うん。分かった」

母さんに声をかけられなければ、いち早く山倉の元へ向かうとしていただけに、するどい指摘に目からうろこが落ちる。伊達に三十五年も生きていない。

もつとも、母さんにそんなことを言えば、三十年だというツツコミと共に、首を絞められそうだが。

準備されていた朝食を食べていると、母さんは嬉しそうに僕の顔を見つめていた。なんだが照れくさい。

「いい顔になったな、信也」

朝食を終えて玄関で靴を履いていると、母さんはそう声をかけてきた。

「そうかな？」

「ああ、昔の父さんにそっくりだよ」

正直に言つと、あまり覚えのない父さんに例えられても、褒められているかどうか微妙だった。

「あのさ、父さんって……」

「ああ、やっぱり覚えてないのか？」

僕はこくりと頷く。すると、母さんは遠い目をしながら、僕に「いい男だったさ。わたしにはもったいないくらいだね……」

「母さん……」

寂しそうな目をしていた。そう感じた。

だが次の瞬間、機関銃のようにまくし立て始める。

「でも女たらしでね、浮気をよくしてた！ まったく、こんないい女を嫁に迎えといて、しょうがない男だよな！」

先ほどの言い分とまったく逆のことをいっている気がしたが、気づかないフリをしておく。

「その現場を見つけては、わたしのコブシが唸ったもんだ。あと酒が好きだったね。リンゴ酒で作ったブランデーが、大のお気に入りだったよ。でも飲み比べじゃ、わたしに勝ったことなかったけどね！」

父さんの話が、いつの間にやら母さんの武勇伝に変わりつつある。
「好きだったんだよね？」

話の腰を折るようだったが、武勇伝がいつまでも続いてもらっては困る。

母さんは頬を染めながら、小さな声で、

「ああ……」

言った後で、両手で顔を隠すように覆う。こういった恋愛話は、
どうも苦手らしい。

母さんの性格を考えれば、分からなくもないが。

「お前も父さんも、母さんの自慢の親子だった。今までも、そして
これからもな」

なんだかんだ言っても、やっぱり母さんは父さんが大好きなんだ。
その父さんに似てるということは、間違いなく褒め言葉なのだ。

「ありがとう。じゃあ行ってくるよ」

「ああ、気をつけてな」

玄関から出て行く僕に手を振りつつ、母さんが見送ってくれた。

10月26日(2)

病院内に入り、幾人かの病人や看護士とすれ違いながら、三六号室へと向かう。

ノックをすると、山倉の元気な声が聞こえてきた。

「どうぞ！」

ノブを回し、ドアを開ける。山倉は元気に手を振っている、以前にも見た光景だ。

ただ、あの時と違うのは、山倉の瞳に涙のかけらすら浮かんでいないことだ。

「おはよう、信也君！」

「おはよう」

昨日と同じ丸椅子へと腰をかける。今日は特にこれといった用事はない。

そばにいて、談笑をかわすのが、一番の目的ともいえるだろう。

「そういえば、明日から修学旅行だよ。楽しみだなあ」

芸能人やドラマなどの話がひと段落ついたころ、不意に山倉の口から出たのは、そんな言葉だった。

「山倉……修学旅行に行けるの？」

「うん。先生に聞いたら大丈夫だって。こんなところで一人落ち込んでるより、友達と一緒に遊んだほうが楽しいだろうって」

確かに事情を知っている先生ならば、そう言うだろう。

だが、それは表向きの事情だけ知っている者の意見だ。

裏の事情を知っている僕としては、修学旅行へ行ってほしくなかった。

修学旅行に行かなければ、サーカス会場にも行かない。そんなれば、必然的に山倉の命が救われるという結果になるからだ。

「そうなんだ。よかったね」

僕なりに心情をうまくごまかして、嬉しがっているつもりだった。

だが、山倉はすぐに顔を曇らせて、首をかしげる。

「あんまり嬉しくなさそう。わたしと修学旅行に行きたくないの？」

「そ、そんなことないよ！」

「フフツ、分かってるって。冗談だよ」

白い歯を見せる山倉に、必死になってひきつった笑顔を返す。

「簡単に運命は変えられないって事か……」

「えっ？」

僕のぼやきに、素早く反応を示す。

「いや、なんでもないよ」

「本当に？ 苦しんでるんだっいたらいつでも相談してよ？ わたしだって信也君の力になりたいんだから」

「分かってる。僕だって無理はしないさ」

心配そうな山倉に、修学旅行の予定について話すと、山倉はすぐに食いついてきた。

こうなった以上、覚悟は決めなければいけない。未来は分かっているのだから、慌てる必要はない。

要するに、僕が山倉を死なせなければいいんだ……。

10月26日(3)

山倉と分かれて家に帰ると、母さんが出迎えてくれた。

「どうだった？」

「うん、大分元気になってるみたいだよ。もう大丈夫じゃないかな？」

靴を脱ぎながら、答える　と、二階から玄関の方へと足音が聞こえてきた。

「本当に大丈夫かしら？」

沈んだ面持ちで、僕を見つめ返すミリア。

「姉さん……」

「優美ちゃんは、信也君が側にいるから元気なだけ。あなたが側にいなくなったら……」

「そ、そんなわけないだろ！？」

慌ててミリアの口を塞ぎ、階段を登る。そのまま部屋へとミリアを放り込み、急いでドアを閉める。

ミリアは僕の顔を真剣な眼差しで睨みつけていた。

「全部ばれたらどうするつもりだ！」

確実に反論してくるだろうとの予測を裏切り、ミリアは素直に謝った。

「ごめん。ちょっとしたやつあたりなの」

「やつあたり？　どうしてやつあたりなんかする必要があるんだ？」
僕の問いかけにミリアは答えず、ただ唇を噛み締めている。

湧き上がる憤怒を押さえつける僕へと、今度は逆にミリアが質問してきた。

「明日から、修学旅行だよな？」

「ああ……」

「優美ちゃんも？」

「残念ながらね。でも絶対に山倉を死なせはしない。もちろん後を

追わせたりもしない」

根拠のない自信だったが、ミリアに僕の気持ちは届いたようだ。
髪を軽くかきあげてから、潤んだ瞳を向けてくる。

「信也君、なんでそんなに落ち着いていられるの？ もうすぐ、好きな人とお別れだよ？ 次はいつ会えるか分からない。それなのに、どうして？」

一瞬戸惑いながらも、僕は考えてみた。確かにミリアのいう通り、良くも悪くも明後日で山倉とはお別れだ。

それでも僕の心中は妙に落ち着いている。

「うーん、ミリアが前に言ってたろ？ 今は自分がやるべきことをやれって。多分そのおかげじゃないかな？」

「自分がやるべきこと？ そんなこと、言っただけ？」

「言ったださ。だから僕は、自分がやるべきことを全部やってる。それで山倉を助けられなければ仕方がないさ。それに『あなたは明後日死にます』って、急に言われたんなら落ち着いていられないけど、明後日死ぬのは、前から決まっていたからね。だから落ち着いてられるんだと思う。本当のところは自分でも分かんないけどね！」

そう言っただけで飛び出す僕にも、ミリアは表情を変えなかった。

「なあ、何があったんだ？ 最近のミリア、ちょっとおかしいぞ？」

「なんでもない。なんでもないの」

ミリアは僕を押しつけて、部屋を飛び出そうとした。

「待てよミリア！」

声に反応して、ミリアが振り向いた。その目にはまた、涙が浮かんでいる。

「信也君、頑張ってるね。応援してるから。絶対に優美ちゃんを救わなきゃダメだよ？」

それだけ言っただけで、ミリアは僕の部屋から飛び出し、また自分の部屋へと引きこもってしまった。

ミリアも気にかかったが、ノックをしても返事はない。

僕は明日の準備を終わらすと、早い時間から寢床へとついた。

布団に入り、疲れもあったせいか、すぐに寝息をたて始める。

その眠りが途絶えたのは、夜の二十三時になってからだ。全身を襲った悪寒で、いままでの熟睡が嘘のように、あっさりと目を覚ましたのだ。

寝汗で全身が濡れており、喉が異様な渴きを訴える。

ミリアの様子が気になっていられるのかもしれない。それとも他のなにかが。

渴ききつた喉を潤すためにベッドから起きると、僕は台所へとお茶を飲みに行った。

階段を下りていくと、ダイニングキッチンから、廊下へと光が漏れている。

覗いてみると、母さんがなにやら書き物をしているようだった。

中へと入っていくと、母さんは驚き戸惑ったようすで、慌てて背中へと隠した。

「何してたの？」

「いや、ちよつとな。赤字の家計簿つけてたんだよ。気にするな」「ふーん」

母さんの背後に回った家計簿に興味を引かれつつも、向かい側に腰を下ろす。

「なんだ？ 修学旅行が楽しみで眠れないのか？」

「いや、なんとなく目が覚めちゃったんだ」

返事をして、ふと思いつく。明日から僕は修学旅行へと旅立つ。

それはつまり、母さんとのお別れを意味していた。

なぜなら、修学旅行から僕が帰ってくることはないのだから……。

「そっか、それで目が覚めたんだ」

一人で勝手に理解を示すと、視察する母さんを背に、いったん台所へと向かった。

冷蔵庫からお茶を取り出し、コップ二つと共に手中へと納める。

テーブルの上に二つのコップを置き、お茶を注ぐと、一方を母さんへ渡した。

「おつ、気が利くな」

「そう？　当たり前じゃないかな？」

「その当たり前ができない奴が多いんだよ。世の中にはな」

コップに注がれたお茶を一気に飲み干し、空になったグラスを勢いよく置く。

そのコップに再びお茶を注ぎつつ、僕は質問を試みた。

「ねえ、母さん」

「なんだ？」

「もしも、僕が死んだら悲しい？」

「お前、もうすぐ死ぬのか？」

「い、いや、そうじゃないけどさ」

思わず聞いてしまったが、やはり聞くべきではなかった。

後悔の念に囚われている僕を、怪訝に見ながら、母さんがまたお茶を一口飲む。

「悲しくないさ。家計が浮いて逆に喜ぶかもしれないな！」

笑い出す母さん。冗談だったのだろうが、逆に悲しみを増す言葉でしかなかった。

あの時の母さんが泣く姿は、いまもまぶたに残っている。

「もし……」

「なんだよ今度は。もしの話ばかりして」

「もし僕が死んで……」

先ほどと同じように話し始めると、母さんの顔から瞬時に笑顔が消えた。

「なあ、信也。冗談でも死んだらなんて話をするもんじゃないぞ？」

どう考えてもお前より母さんの方が早く死ぬんだしな」

『違うんだ！　先に死ぬのは僕なんだ！』

心の奥底から飛び出しそうになる絶叫を、グツと堪える。

「大事な話なんだ！　お願いだから最後まで聞いて！」

「死ぬ前の大事な話か。縁起でもない」

テーブルを両手で叩きつけ、母さんは自分の部屋へと戻ろうとし

た。

その後姿に向かつて、僕は力いっぱいに叫んでいた。

「僕が死んでも、山倉をここに住ませてあげてほしい！」

振り向かず、立ち止まる母さんへと、声をさらに張り上げる。

「自分の娘のように可愛がってほしいんだ！　僕や姉さんを大切に思う気持ちを、山倉にも向けてあげ……」

「それに合意すれば、気が済むんだな」

話に割り込むように、ボソリと母さんが呟く。

「うん……」

「わかった。お前の遺言として覚えておいてやるよ。その代わり、わたしの前で二度と死んだらなんて話をするな！」

僕に顔を見せないまま、母さんは出て行ってしまった。

渾身の力を込めて閉めた扉が、家全体を揺らす轟音を辺りに響かせる。

わずかに震える扉の前に、僕は深々と頭を下げた。

「ありがとう母さん。ごめんね！」

我慢できずにこぼれ出した涙は、止まる気配をまったく感じさせなかった。

打ち震える体を無理やり押さえつけて、自分の部屋へと戻る。

これで僕に残された仕事は、山倉の救出だけだ。

10月27日(1)

十月二十七日 月曜日

のっそりとベッドから起き上がると、僕は制服に着替えた。

部屋を出て、まずミリアの部屋にノックをするも、返事はなかった。

この家の住人が僕だけではないのかと、錯覚するくらい静かだった。階段を下りる足音、ダイニングキッチンへとつながる扉を開ける音。僕の行動で生み出される物音以外に、耳に入ってくる情報はなかった。

ダイニングキッチンに入るも、だれも見当たらなかった。代わりに、朝食だけは準備されている。

ゴージャヤンプルにもずく、ご飯は炊き込みご飯。嫌がらせのように、僕の苦手なものばかりだ。

だが、僕はそれを残らず食べきった。これが母さんの最後の料理かと思うと、不思議と不味くはなかった。

食器を流しに置いてから、母さんの部屋へと向かう。ノックするが、こちらも返事はなかった。

朝食が準備されていたのだから、どう考えても一度は起きているはずなのだ。

「母さん、起きてる？」

ドア越しに声をかけても、反応はない。

「いないの？」

もう一度ノックをしながら、声をかける。それでも返事はなかった。

額をドアに付けて、大きく息を吐く。時計を見ると、そろそろ山倉が来てもおかしくない時間だった。

「さようなら、お元気で……」

その言葉を残して、階段を駆け上った。

流れ出る涙は、なかなか止まらなかった。

すぐに家のチャイムが鳴り響く。僕は涙を拭き去ると、無理やりに笑顔を作った。

荷物を持って階段を下り、玄関の扉を開ける。

「おはよう、鷹野君！」

そこにいたのはもちろん山倉だった。長くてしなやかな髪の間から、ちらちらと覗く大きなガーゼが痛々しい。

制服姿の背中には、赤いリュックサックをかるっている。

「おはよう。それじゃあ行こうか」

「うん！ 楽しい修学旅行を満喫しよう！」

山倉に手を引っ張られ、僕は自宅を後にした。愛着のある家がどんどん離れていくも、僕は背後を振り返らなかった。

未練を断ち切るため、そして山倉を救うという最重要事項に専念するために。

学校へと着くと、すでに多くの生徒がグラウンドへと集合していた。

「信也……お前」

山倉と二人で、整列場所へと向かっていると、血相を変えて震える指を、僕に向けてくる三村がいた。

「ああ、三村。おはよう」

「おはよう、三村君」

二人で同時に挨拶をすると、三村が僕の胸倉を突然つかんだ。

「な、なんだよ、三村……」

「お前、なんで山倉と一緒になんだよ」

「えっ？ なんでって……ああ！」

ようやく三村の驚嘆の意味が分かり、僕は何度も頷いた。

「山倉と付き合ってるんだ」

「マジか！」

三村の視線が、一瞬にして山倉へと移る。

山倉は少し頬を染めたまま、無言で頷いていた。

「良かったじゃないか信也！　もつと早く教えてくれればいいのに、水臭いじゃないか」

「いろいろと忙しくてさ。悪かった」

「いいってことよ。これからは二人の恋の行く末を見守ってるからな。何かあったらすぐに相談してくれよ」

「ありがとう、三村君」

僕よりも早く山倉がお礼を述べる。三村は何気に照れながら、僕たちの元から離れた。

「修学旅行は学問の一環です。あまりはしゃぎすぎないように気を付けましょう」

全員が集合を終わらせて、先生が注意を促す。

だが、そんなものは全員、耳から抜けているようだ。

あきれ顔の先生が、各クラスごとにバスへと乗せる。そこで三村が再び近づいてきた。

「信也、山倉と席交換しといたからな」

「えっ？」

小声でつぶやく三村に、僕は目を丸くしていた。本来なら僕は三村と隣の席で、山倉は吉沢と隣の席だったはずだ。

「俺も吉沢の隣のほうがいいからな」

「自分のためかよ!？」

「そう言うなって。二人の仲を深めるチャンスだろ？」

「そりゃ、まあ……」

相槌を打ちながら、僕は内心ショックを受けていた。ここはできれば、山倉と別々の座席がよかったからだ。

本当なら、飛び上がって喜びたかった。だが、今は僕よりも、他の友人との友好を深めてほしかった。僕が存在を山倉の中で、大きくすぎないように。

といっても、これは三村にとっても、吉沢と隣同士の席になれるという、利益に基づいた行動だ。逃れようのない事態だったのかもしれない。

「どうかしたの？」

考え込んでいると、背後から山倉が僕に声をかけてきた。隣には吉沢の姿があり、僕の肩をポンと叩いてくる。

「優美をよろしくね、鷹野君」

それだけ告げると、手を振りながら、吉沢は自分の座席へと向かった。三村もそれに続いて、積極的に声をかけている。

いつまでも車内で呆けているわけにもいかず、僕と山倉も座席へと座った。

「はい、鷹野君」

すでに買っていたのか、オレンジ色のキャップのペットボトルの緑茶を、僕へと渡してくれた。熱すぎず冷たすぎず、ちょうどいい温度になっている。

「ありがとう」

「どういたしまして！」

山倉に微笑まれて、僕の口元にも自然と笑みが生まれていた。

バスがゆっくりと動き出し、目的地へと向かう。

今から高速道路へと上がり、六時間かけて目的地へと向かう。バスの中では目的地につくまでの間、バスガイドさんによる挨拶と予定の説明があった。

目的地についた後は昼食を済ませ、歴史的建造物をいくつか回る。それが今日の大まかなスケジュールだ。

それが終わると、生徒の間でカラオケ合戦が始まる。

盛り上がる車内で、ただ一人僕だけはその場の雰囲気についていけなかった。

残した母親、山倉の救出、そしてこの世から永遠に姿を消す自身。頭の中はすでに一杯で、処理し切れなかった。

「鷹野君、マイクだよ」

マイクを目の前に差し出され、ようやく我に返る。

「ごめん、歌はちょっと苦手なんだ」

「そう？　じゃあ次はわたしが歌うよ！」

マイクを高々と掲げる山倉に、車内から歓声と口笛が巻き起こる。
「曲名は『いつもそこに』で！」

それを聞いて、バスガイドさんが準備を始める。山倉の歌声は、まるで地上に舞い降りた天使のように、甘く柔らかい歌声だった。

歌の内容は、ふとした瞬間に恋心を抱き、愛し合うようになった二人は、いつまでも幸せに暮らすといった内容だった……。

歌い終わり、一礼をすると、山倉は歓声に包まれながら、次の人にマイクを渡す。

「ふう、久々に歌ったから緊張しちゃった」

「ご苦労様」

「へへッ、どうだった、わたしの歌」

「うん、すごくよかったよ」

「そう？ その割にはあまり楽しくなさそうだけど……」

とつさに僕は、目をそらしてしまった。怪訝そうに、僕の顔を覗

きこんでくる山倉。

「気分でも悪い？」

「いや、そういうわけじゃ……」

「本当に？ 無理しないで休んでたら？ 着いたら起こしてあげるから」

「うん、ありがとう……」

目を閉じて、山倉の姿を視界から消す。

あの歌の内容に、山倉の意図が含まれている。それはほぼ間違いないだろう。

僕は山倉の想いが伝わるたびに、心に重しをつけられている気分だった。喚起と悲痛が交じり合い、いままで味わった試しのない感情が沸き起こるのを、抑えきれない。

覚悟していたはずなのに、いまは恐怖に震えている。山倉と離れ離れになる恐怖だ。

まぶたの隙間から、涙がこぼれ落ちる。

それを拭うように、柔らかな布の感触が伝わってきた。山倉がハ

ンカチか何かで、拭ってくれたのかもしれない。

それでも僕は目を開けなかった。いま目を開けてしまっでは、きつと止め処なく涙が溢れ出してしまうだろう。

目をつむったまま、気持ちいを落ち着かせていく。そうしていく内に、聞こえていたクラスメイトの歌声が薄れ、頭の中が暗くなっていた。

10月27日(2)

「鷹野君、起きて。着いたよ」

肩を揺すられて、僕はようやく目を覚ました。変な体勢で寝てしまったせいか、首筋が痛い。

「ああ、山倉……」

「大丈夫？　なんだかうなされてたけど」

「うん、なんとか……」

寝ぼけている頭をはつきりとさせ、席から立ち上がる。

少し離れたところで三村と吉沢が心配そうにこっちを覗き込み、他のクラスメイトはすでにバスを降りていた。

「何をやってんだよ信也。彼女をほったらかしにして眠るなんて」

三村のもつともな意見を受け、耳が痛い。

「三村君、わたし気にしてないから。信也君ちょっと疲れてたみたいだったし」

「まったく、先に行ってるからな」

あきれながら三村が去り、それに吉沢が続いていく。

「ごめん、山倉」

「気にしてないって。ほら、行こうよ」

山倉が僕の腕を引っ張る。バスを降りた僕たちは、木造の古風な観光客用の食堂で、昼食を取った。

その後はバスで所々の観光地を巡る。歴史の教科書でしか見たことのない威風堂々の建造物が、まるで僕を鼓舞しているように見えた。

今日のスケジュールを終わらせ、一日目の宿泊施設へと赴く。いかにも観光地らしい、和風の旅館だった。

黒色の瓦屋根に、板張りの廊下。室内に入ると畳のい草の匂いが、鼻をくすぐる。

さすがに部屋は男女別なので、僕は三村と話をしてた。どうや

ら三村も吉沢と順調にいつているらしい。ただ、まだ付き合つとか告白するといった状況ではなさそうだ。

「まったく、信也がうらやましいよ」

そう言つてため息をつく三村が、妙に印象的だった。

夕食の時間になり、大広間へと移動する。食事も席がすでに決められており、山倉とは離れて座つていた。

目の前の食事は刺身、ステーキ、エビチリなど、和洋中のおかずが丹精込めて作られていた。

さすがは旅館の料理人というか、だれもが舌鼓を打ち、箸を進ませていた。

あまり食欲のなかった僕も、ちよくちよく手を出していく内に、ほとんど口の中へと食事が入っていく。

気がつけば、普段より明らかに量の多い夕食を、いとも簡単に完食していた。

食べ終わった食器を片付けていると、山倉が僕の方へと小走りでかけてきた。

「どうかした？」

山倉に尋ねると、僕の耳元で山倉は一言だけ告げると、またそそくさと離れていった。「消灯五分前、部屋の前で待ってるね」

それが山倉の言葉だった。

10月27日(3)

ついに修学旅行の初日も就寝を残すだけとなり、明日が僕にとって最後の一日となる。

悔いを残さないよう、明日は全力を尽くさなければならない。

「あれ？ 信也、どこ行くんだ？」

山倉に言われた時間、こっそり部屋から出ようとする僕を、三村が呼び止める。

隙がないというか、妙に目ざとい。さすがはニュースキャスターだ。

「いや、ちよつと自動販売機でジュースでも買ってこようかなって」
なぜだかわからないが、山倉に会いに行くとは言えなかった。三村も何の疑いもなく、

「ジュースって、もうすぐ消灯だぞ？ 寝る前に水分取って、朝になつて布団を濡らしててもしらないからな！」

壮快に笑い飛ばす。適当な愛想笑いを返すと、すばやく部屋の外へと躍り出た。

部屋のドアを閉めて、ため息一つ漏らす。

瞬間、僕の腕は引つ張られていた。

「なっ!？」

慌てて引つ張られた方向を見ると、力の主は山倉だった。どこかに連れて行くこうとしているのだろう。

黙ってついていくと、二階と三階をつなぐ階段の踊り場で、山倉は止まった。

「ふう、だれにも見られなかったね」

額に溢れた汗を拭って爽やかな笑顔を見せる。実際は僕たちの疾走を前に、みんな呆気にとられていただけなのだが……。

「修学旅行って楽しいけど、二人きりになれないから嫌だよね！」
薄暗い踊り場に腰を下ろしつつぼやく。僕もその隣へと腰を下ろ

した。

「今日はすつごく楽しかった！ 明日も楽しみだね！」

「ああ、そうだね」

曖昧な返事をした僕の顔を、バスの時と同じように覗き込んでくる。

わざと気づかないフリをして、僕はそっぽを向いた。

と、僕の腕に突然激痛が走った。山倉が力いっぱいにつねったのだ。

「いたっ！」

「もうっ、本当に大丈夫なの？ 心配で、食事も喉を通らなかったんだから！」

「ごめん、大丈夫だから。気にしないで」

山倉には悪いが、明日の対策で頭がいっぱいなのだ。

口をへの字に曲げ、今後は逆に山倉がそっぽを向く。

どうやって謝ろうかと考えている最中に、突如、山倉が顔を近づけてきた。まるで何事もなかったかのように。

「鷹野君、明日はなんの日か知ってる？」

「えっ！？」

飛び出さんばかりに目を見開き、僕は山倉の両肩を掴んでいた。

「ど、どうしたの？」

僕の形相に驚き、目をパチクリさせながら問いかけてくる。

「あ、いや……なんでもないよ」

山倉から目を背け、曖昧に言葉を濁す。

知っているはずがない。知っているなら落ち着いてなどいられないはずだ。

「えっと、なんの日なの？」

明日の事件について、ふせたまま山倉に尋ねる。

すると、山倉はかなりのショックを受けたようだった。のけぞって倒れそうな全身を、なんとか手で支えている。

「本当に？ 本当に知らないの？」

「う、うん。ごめん」

「別にいいけど、ショックだなあ。鷹野君なら絶対に知ってると思
ってたのに」

深くため息をつき、山倉はがつくりとうなだれてしまった。

「で、結局なんの日なの？」

「もう、わたしの誕生日だよ！ 本当に知らなかったの！？」

言われて初めて気がつく。そういえば明日は山倉の誕生日だった。

「そ、そうだった！ ごめん、忘れてたよ」

「忘れてた！？ ひどい、ひどすぎるよ！」

「そ、その、ごめん！」

潤んだ瞳でうつむいた山倉に、頭を床にこすりつけて土下座をする。

だが、山倉は言うほど怒ってはいなかったようだ。土下座する僕を見て、クスクスと微笑んでいる。

「大丈夫。全然怒ってないから。それで、誕生日に欲しいものがあるんだけど」

「も、もちろん！ なんでも言ってくれ！」

明日の事件で頭がいっぱいで、誕生日を忘れていた僕の、せめてもの償いだった。山倉の望む願いを叶えてあげたい。

そう思い軽く引き受けた山倉の望みは、予想を大きく超えたものだった。

「……キス」

「えっ？」

思わず聞き返す。山倉はトマトのように顔を赤くし、もう一度つぶやいてきた。

「鷹野君のキスが欲しい」

「えっ、なっ、そ、それは！」

慌てふためく僕の目を、山倉がまじまじと見つめてくる。

ただ、山倉の望みがそれだけなら、簡単に承諾したかもしれない。僕も山倉が好きなのだから、キスで悩む必要などない。むしろこ

ちらからお願いしたいぐらいだ。

だが、山倉の次の言葉が、僕の胸へと深々と突き刺さり、大きな圧力としてのしかかっていた。

「いまのところ、わたしの支えになってくれているのは鷹野君だけなの。もちろん、他の友達にも自分の本心を打ち明けようと思ってるよ。だけど、鷹野君以上に、わたしの心を癒してくれる人はいないと思う。それを考えると、心の隙間から不安が染み出してくる。いつか鷹野君が、わたしから離れていくかもしれない。それが怖くてたまらないの。だからずっと側にいてくれるっていう証明に、鷹野君のキスが欲しい」

言われて、瞬間的に頭へと浮かんできたのは、ミリアの警告だった。

『このままじゃ、信也君が死んだとき、優美ちゃんも信也君の後を追うかもしれない』

このままでは、ミリアの言った通りになってしまう。それではまったく意味がない。

「ダメかな？」

無言で考え続けていた僕に痺れを切らし、山倉は問いかけてきた。こちらの返答も聞かず、山倉はすでに、潤んだ唇を近づけようとしていた。

「いや、ダメじゃないけど……」

四苦八苦していると、山倉は愛想をつかして、無言で立ち上がった。

「山倉、待ってくれ！」

どう弁解すればいいか悩みつつ、山倉を呼び止める。きっと怒っているだろう。

だが、振り向いた山倉の表情は、予想に反して笑顔に包まれていた。

「急いで決断しなくてもいいよ。わたしの誕生日は明日なんだし。それに、断られたとしても、嫌いになったりしないから。わたしに

は、鷹野君しかいないからさ！」

山倉が三段飛ばしで階段を上っていく。自分の部屋へと帰るつもりなのだろう。

「それじゃあお休み！ 明日も一緒に楽しもうね！」

階段を昇り終わった後、もう一度僕の方を向き、そう言って山倉は走り去った。

「山倉とのキス……か」

自分の部屋に戻りながら、腕を組んで考える。ミリアの言った通りにならないようにするには、そして山倉を救うにはどうすればいいのか……。

部屋に帰ると、三村が目を丸くして僕を見ていた。

「ジューズ、もう飲んだのか？」

「あ、うん。買ったその場で」

「なんだよ、少し分けてもらおうと思ってたのに。まったく、山倉と初旅行だからって、緊張しすぎなんだよ」

僕の背中を思い切り叩く三村。よく考えたら、三村とも明日でお別れなのだ。

初めて出会ったときから馬が合い、僕が山倉を好きだという事実を、唯一知っていた親友だった。

そして、自分の情報網を駆使して、僕に協力してくれたのだ。

「三村、吉沢さんとうまくやれよ」

「当たり前だ。お前こそ山倉とうまくやるんだぞ？」

応援するつもりが、逆に応援されてしまったようだ。せめて三村だけでも、本当のことを告げなかった。

もちろん、それを言ったが最後、僕は中界へと呼び戻されてしまっただろう。

最終日を前にして、整理しなければいけない事象は山ほどある。

だが、無常にも時間は待ってくれなかった。

10月28日(1)

十月二十八日 火曜日

ついにこの日が来てしまった。山倉にどんな結果が降りかかるかと、僕は今日でこの世を去る。

今日の予定としては、午前中はサーカスを見学し、午後からは自由行動になっている。

当然、サーカス以降の時間帯は僕には関係ない。今日の正午には、僕の運命も山倉の運命も決まっているだろう。

ほとんど睡眠が取れないまま、僕は朝を迎えていた。うつすらと目の下に隈が浮かんでいる。

山倉を救う術、山倉に後を負わせないようにする激励、三村への御礼、そして山倉の願い。どれも結論が出ないまま、今という時間を迎えていた。

「おはよ！」

あくびをしながらも、頭をフル回転させていると、元気一杯に山倉が挨拶をしてきた。

「おはよう」

「なんだか眠そうだね。あまり眠れなかったの？」

「うん、ちよっとね……」

チラチラと覗くように、僕の顔色をうかがう山倉。顔を曇らせて心配しているのが手に取るように分かる。

全員がバスに乗り込み、サーカス会場へと向かう。目的地が近づいていくのが、僕には死への階段を登っているように思えた。

ずっと窓の外を見つめていると、僕の袖が引つ張られた。振り返ると、口を一文字につぐんだ山倉が、うつむいていた。

「鷹野君、昨日のこと……忘れていいから」

「えっ？」

「それで、悩んでるんでしょ？ 楽しめないんでしょ？」

どうやら山倉は、僕が物思いにふけっている原因が、山倉の願いにあると思っているらしかった。

間違いではないが、真実でもない。だが、山倉をこれ以上落ち込ませるわけには行かなかった。

「分かったよ、山倉」

「えっ？」

「全部教える。何に苦しんで、何を悩んでいたのか。サーカスが終わったら、全部包み隠さず話すから」

「本当だね？ 絶対だよ」

「ああ、約束する」

僕と山倉は指切りをした。すべてが終わった後なら、何を話しても問題ないだろう。

もちろんそれが原因で、僕は地界へと落とされるかもしれない。それも覚悟の上だ。

僕のせいで山倉を苦しめてしまった。それぐらいの罰は当然だ。怖くないといえば嘘になるが。

サーカス会場に着くと、そこはただっ広い空き地だった。その中央に、巨大なテントが張ってある。

「ちよつと待ってて」

僕は山倉を待たせると、駆け足で三村の元へと向かった。

「三村」

なにやら忙しそうに駆け回っていた三村を捕まえて、僕は話しかけた。

「鷹野か。どうかしたか？」

「いや、なんていうか……」

三村に一言残したいと、勢いだけで声をかけてしまった。少し後悔の念がよぎる。

ただ、今を逃せば三村と話すチャンスはないだろう。会場に入ってから、僕は山倉に付きっ切りだ。

「何か聞きたいなら言えよ。水臭い」

「いや、俺たちも長い付き合いだなんてな」

「な、なんだよ急に、気持ち悪いな」

本気で気味悪がっているらしく、全身を震わせながら答える。僕は自然と、笑みが漏れていくのを自覚していた。

「中学一年の時に初めて会ってから、ずっと親友だった」

「そうだな」

「その親友に、頼みがあるんだ」

「そうこなくっちゃ、何が聞きたいんだ？ 山倉の情報ならいろいろ揃えてるぞ？」

かぶりを振って、三村の申し出を断る。

「んじゃ、なんだよ……」

「もし僕に何かがあったら、山倉をよろしく頼む」

「はっ？ お前の代わりに俺が付き合うつてことか？」

「別に付き合うとか、そういうんじゃないでさ。親友として、山倉を支えてあげてほしいかなって。吉沢と一緒にさ。僕が見た限り、山倉の親しい友人はお前と吉沢だから」

「一番はお前だろ？」

「だから、僕の身に何かが起こったらの話だよ」

しばらく無言で考えてから、三村が恐る恐る尋ねてくる。

「お前、自殺でもするのか？」

「どうして？」

「もしとか言ってる割に、間違いなく自分の身に何かが起こるって断言してるような、そんな言い方だからさ」

三村の勘は鋭かった。

単に、僕の言い方が悪かったただけかもしれないが、そういったデマと真実に対する嗅覚がなければ、ニュースキャスターという異名は付かなかったのも確かだ。

「そんなわけないだろ？ この幸せの絶頂の時に」

「だけどな……」

「ちよっと神経質になってるんだよ。山倉が大好きだからさ」

三村は突然、噴出し笑いを発していた。口元を押さえながら、待ってくれと手で合図を送ってくる。

「なんだよ」

「照れもせずによく言えるな、そんな言葉」

「べ、別にいいだろ。事実なんだから」

「へえへえ、俺にもその勇気の十分の一でもあればなあ」

視線をずらす三村。その先には吉沢の姿があった。

「よし、サーカスの間に告白する！」

「はっ？」

「いま信也に勇気をもらった気がする。今なら言える気がするんだ」

「そっか、頑張れ」

「ああ、サーカスが終わったら報告するからな。楽しみに待ってだよ！」

三村はそう言うと、吉沢の元へと駆けていった。すぐに告白をするわけではなく、なにやら世間話に花を咲かせているようだ。

「頑張れよ、三村……」

結果を僕が知ることはない。それでも親友の恋路に心からエールを送りたかった。

10月28日(2)

山倉の元へと僕が戻ると、ようやくサーカス会場内へと、順番に入っていた。

「鷹野君、前に行こうよ」

「えっ？ 後ろでいいんじゃない？」

「ダメだよ！ ちゃんと見える一番前に行かないとね。ほらほら、早く行かないと他の人に取られちゃうよ！」

山倉に手を引っ張られて、進んでいく。望みどおり、一番前の席を確保して、山倉はほくほく顔だ。

まるで僕が山倉を救おうとしているのを、誰かが見ていて、妨害されているような感覚だった。

山倉の隣に座ると、手足が小刻みに震えだす。

恐怖からではなく武者震いなのだと自分に言い聞かせながら、時間が過ぎていくのを待った。

視線を感じて山倉をチラリと覗き見ると、すばやく僕から目をそむけた。後で話すという約束を背に、聞くのを堪えているようだ。

「大丈夫だから」

声をかけると、山倉は僕を見てぎこちない微笑みをみせた。

「レディス、アンド、ジェントルマン！ ようこそツアーリストへ！」
開演のアナウンスが流れ、颯爽と舞い降りてくるピエロたちに、

どよめきが起こる。

初めの頃は空中ブランコ、玉乗り、綱渡りなどのよくある演技だったが、どれもハイレベルなものばかりだった。

空中ブランコでは飛び移るときに三回転ひねりを入れ、三つ重なった玉の頂点に乗り、綱渡りではバック転で綱を渡っていく。

だが、僕にそれらを直視する暇はない。

僕の視線はサーカスの演技よりも、会場の出入り口へと注がれていたからだ。

「鷹野君、どこ見てるの？」

当然聞こえてくる山倉の疑問にも、僕は聞こえない振りを決め込んでいた。視界の隅であきれた山倉が、サーカスに視線を戻す。

と、その時だった。テントの出入り口の一つが突然開かれて、外の明かりが入り込んでくる。

「山倉、逃げよう！」

「へっ？」

呆気にとられる山倉を、必死に引つ張って入り口へと向かおうとする。が、よく見ると仲の良さそうな親子が入ってくるだけだ。

「なんだ、驚かせるなよ……」

がつくりと力が抜けて、座席へと腰を下ろす。山倉は僕の奇行に首をかしげながら、

「鷹野君、熱でもあるんじゃない？」

と、僕のおでこに手をやる。ひんやりと冷たい山倉の手が気持ちよく、高ぶる僕の心を落ち着かせてくれた。

「やっぱり、今から話を聞いたほうが……」

「大丈夫だから。サーカスが終わった後で」

口を尖らせて、仏頂面を見せる山倉。僕は背もたれへと体を預け、一時の休息を得る。

こんなことなら、開演の何分後に事件が発覚するかを、ミリアから聞いておけばよかった。そんな想いがふと頭をよぎり、ミリアの存在を思い出す。

昨日、今日と、結局ミリアの顔を見ていない。最後のほうはなにか悩みがあったのか、暗い表情で口を濁すことが多かった。

すべてが終わったら、それについてもミリアに聞かなければ……。と、再びテントの出入り口が開き、明かりが差し込んでくる。

僕は山倉の手を握り、いつでも飛び出せる準備を整えた。

「鷹野君……」

声をかけてくる山倉に対し、口元で指を立てる。すると、慌てた声の場内アナウンスが流れ始めた。

「会場の皆様！ 落ち着いてください！ ただいま場内に爆弾が仕掛けられているのを発見いたしました！ すぐさま避難していただけるよう、お願い申し上げます！」

一瞬だけ静まり返った会場は、次の瞬間には悲鳴と罵声に包まれていた。

係員の指示に従い、次々とお客さんが逃げていく。

山倉はというと、茫然自失の状態だった。口をポカンと開いたまま、動こうとしない。

「山倉！ 今の聞いただろ？ 逃げよう！」

「う、うん！」

声をかけながら体を揺らすと、ようやく山倉が我に返っていた。

山倉の手を握ったまま、起き上がらせる。そのまま僕たちは出入り口へと向かった。

「まだ時間があります！ 落ち着いてください！」

団員の指示に従い、観客は次々と会場から避難していく。僕たちもしかりだ。

だが、なぜか緊張がさらに高まっていくのを感じていた。

山倉は骨折していない。両足でしっかり床を踏みしめ、僕の後についてきている。

中界で見た映像だと、普通のお客さんで逃げ遅れている人はいない。この流れに乗っていけば、僕たちも難なく逃げられるはずなのだ。

それなのに、いまだ治まらない動悸は、さらにその速さを増している。

胸を押さえつけながら、山倉の手を引っ張り出入り口へと向かう。そしてその悪寒は、見事に的中した。

山倉を握っていた僕の手に、撫でるような感触を残し、山倉の重みが離れていった。

「山倉！」

背後を振り向くと、山倉は出入り口へとつながる通路を逆走して

いた。

山倉の意味の分からない行動を目の当たりにして、半ばいらつきながら叫ぶ。

「何をやってんだ、山倉！」

僕の怒声に反応した山倉が、こちらを振り返って答えてきた。

「だって、泣き声が……子どもの泣き声が聞こえるんだよ！ 放っておけないよ！」

それだけ言つて、山倉は逆走を再開した。

刹那、僕の脳内に電流が走る。ミリアの何気ない一言が、唐突に復活を遂げていた。

「偶然とはいえサーカス団員が、爆弾を見つけてくれたおかげで、死者は『三人』で済んだんだけどさ」

一人が自殺願望の男、一人が山倉だとしたら、もう一人だれかが死んでいたはずだ。

その一人とは、もはや考えるまでもない。

「くそっ！」

自分のふがいなさに、沸き起こるいらだちを抑えられない。

「全員避難したか？」

「はい！ いや、あそこにまだ男の子が！」

出入り口周辺から、声が聞こえてくる。

「何をしている！ 早く逃げるんだ！」

逆光で顔もはっきりとしない男性が、僕に向かって声をかける。タイムリミットはあとわずかだ。

「僕は大丈夫です！ 先に逃げておいてください！」

「おいっ、待つんだ！」

背後から聞こえてくる声を無視して、僕は山倉の後を追った。このまま山倉を放って逃げるわけには行かない。

『十、九……』

記憶が正しければ、出入り口付近の団員が逃げ出してから、約十秒後に爆発した。頭の中で数を数えながら、僕は山倉の元へと向か

った。

『八、七……』

幸いにも山倉は、すでに泣き喚く子どもの姿を発見していた。だが悠長にも、泣き止ませようと説得している。

『六、五……』

「山倉！ その子を抱き抱えろ！」

カウントダウンは続けながら、山倉へと叫ぶ。

「抱えるって、こう？ う、うああ！」

子どもを抱えた山倉を、僕が抱える。そのまま出入り口へと引き返し、僕は全速力で走り出した。

普段なら山倉一人でも抱えられるかどうか微妙だろうが、いまは火事場のなんとやらというやつで、まったく苦にならなかった。

『四、三……』

「鷹野君！ 下ろして！ わたしは自分で走れるから！」

山倉からの申し出を無視し、僕は走り続けた。山倉を下ろす時間を作れば、その瞬間に爆弾は破裂するだろう。

『二、一……』

「頼む、もう少しだけ待ってくれ！」

出入り口へと足が差し掛かった瞬間、思わず口から嘆願が漏れる。だが、その願いはあっさりと却下された。

背後で破裂した爆弾から、鼓膜を引きちぎるような爆音がこだまする。

生み出された熱風が、僕たちの体をあっさりと吹き飛ばしてしまった。まるで丸めて投げ捨てられたゴミ屑のように。

僕たちはそのまま、地面へと叩きつけられた。記憶の隅に追いやられていた、交通事故の瞬間がまざまざと甦ってくる。

ボールのように転がっていく全身に、傷みが広がっていった。

ようやく体が止まり、僕はうつすらと目を開けた。手の中には、山倉の姿がある。

だが、山倉は目を閉じたまま、眠ったように動かなかった。

「山倉？」

声をかけても、山倉は反応しなかった。心音が、頭の中へと響いていく。

もしかしたら、ひょっとしたら。

そんな想いを打ち消すために、僕は何度も頭を振った。

「山倉、山倉！」

体を揺する両手も、心なしか震えていた。

「しつかりしろよ、山倉！」

肩をつかみ、何度も揺する。何度も、何度も。

「頼むから、目を開け……」

「う……あ……」

半狂乱になりつつ、必死に叫んでいる僕の耳に、かろつじて聞こえたうめき声。

「やま、くら？」

確認するようにつぶやくと、山倉のまぶたがゆっくりと、ゆっくりと上がっていった。

二、三度まばたきをしてから、僕の顔を見上げる。その表情は、力なくも笑顔だった。

「鷹野、君……」

「山倉！」

僕は山倉を抱き起こすと、力いっぱい抱きしめていた。

「鷹野君、苦しいよ……」

山倉の口から漏れる。慌てて僕は力を抜いて、山倉と顔を向かい合わせた。

10月28日(3)

「大丈夫？ どこか怪我をしてない？」

「足が、痛い」

言われて山倉の足を見た。脛の部分が見るからに腫れあがっている。

「骨折か……」

「うん、そうみたい」

「そっか、良かった……」

「良くないよ。せつかくの修学旅行なのに、みんなに迷惑かけちゃう……」

「いや、これで、いいんだ。これで何もかも元通りだ」

「元通り？」

返事の代わりに、微笑んでみせる。山倉は知らなくていいことだ。ふと気がつくと、周りにはだれもいなかった。山倉が抱いていた子どもも、今はどこかに姿を消している。

あれだけの騒ぎが起こった後で、これだけ人影が少ないのはおかしい。などと考えていたら、すぐ背後から声をかけられた。

「信也君、優美ちゃん救出おめでとう」

振り返ると、ミリアがやんわりと微笑んでいた。僕の姉の姿ではなく、すでに中界での本当の姿へと戻っている。

「ミリア……」

「えっ、だれ？」

首を傾げる山倉の横で、僕は全てを察知していた。そう、僕の役目は終わったのだ。

「山倉、言わなきゃいけないことがある」

「えっ？」

きょとんとしている山倉を前に、僕は口をもごもごと動かすだけで何も言えなかった。

離れたくない、ずっと傍にいてあげたい。

そんな想いが、僕の中で渦巻いている。

と、ミリアが僕の肩に軽く手を置いた。まるで僕の言葉を止めるかのように。

そして僕と山倉との間に割りいると、一礼してから、唐突に自己紹介を始めた。

「わたしの名前はミリア＝ミリス。中界という場所で働いているわ」
「ミリア！」

思わず叫んだ僕に、ミリアは指を一本立てて、口元にあてた。黙っていると言わんばかりに。

「中界っていうのは、天界と地界の仲介をする場所。わたしはそこで、死んだ人を案内する仕事をしているの」

「死んだ人を案内する？　じゃあわたしと鷹野君は死んじやったんですか？」

ミリアは小さく首を振った。

ちらりと山倉が、ようすを伺ってくる。僕はやりきれなくて、目をそらしてしまった。

「死んだのは信也君だけ。あなたは生きてるのよ」

「えっ？　だって……」

「信也君が死んだのは先週の土曜日、本当はここにいちゃいけないのよ」

「えっ？　意味が分かりません。どういうことですか？」

山倉は混乱する頭を、一生懸命整理しようとしていた。傍へと腰掛けたミリアが、優しく微笑んでみせる。

「本当なら今日、今の爆発であなたは死ぬはずだった。だけど、それを知った信也君は、優美ちゃんを助けたいって懇願したのよ」

力いっぱい話すミリアから、不意に安らぎと温もりを感じた。

今までとどこか違うミリアだった。死んだらどうしようもない。

生きている人に対し、死者は無力だ　そう言っていた残忍なミリアとは違うミリア。

「結果はどうあれ、信也君は今日の爆発が終わった時点で、また死ぬことになる。それは前から決まっていた事実なの」

「そ、そんなのでたらめでしょ？ 嘘に決まってる……」

「嘘じゃないわ、本当よ。信也君もそれは分かっていたの」

「だって、だって！ 鷹野君、ずっと一緒にいてくれるって、一緒に暮らすんだって約束してくれたよ！」

再び山倉が、僕に視線を向けてくる。今度は目を逸らすわけにはいかなかった。

「ごめん……」

ようやく口から生まれた謝罪は、山倉を容赦なく切り刻んだ。手元にあった砂を拾い上げると、僕に向かって投げってくる。

「何よ！ 嘘つき！ 鷹野君の嘘つき！」

砂をつかンでは、山倉は投げってくる。何度も、何度も。

それを止めたのは、山倉の頬を襲ったミリアのビンタだった。

「な、何するのよ！」

山倉の標的が、ミリアへと変わる。だが、ミリアは砂つぶてが放たれる前に、山倉の腕をつかんでいた。

「放してよ！」

「分からないの？ 本当につらいのは信也君の方だって、信也君だって優美ちゃんと別れたくないんだよ？」

「知らない！ 聞きたくない！」

「あなたはまだ生きていられる。周りには友達だっている。だけど、信也君はもうあなたにも、同級生の友達にも会えなくなる」

「そんなの、そっちの都合じゃない！」

「そんなことないわ。信也君は死ぬより苦しい目にあう可能性がある。つたのに、自分よりもあなたの方が大事だっていって、一時的に生き返らせてもらったのよ！ そんな信也君の言葉を、あなたの大好きな信也君の想いを裏切るつもり！？」

山倉は耳を塞いだまま、首を左右に振り続けていた。ミリアが再び手を振り上げようとしたので、僕は慌てて止める。

「ミリア、やめろよ」

「信也君、止めないでよ！ この子さつきから自分のことばかり考えて、信也君の気持ちを完全に無視してる！ ひっぱたいてやらないと分らないのよ！」

力を込めて引き離そうと、ミリアが暴れ始める。それでも僕は手を離さなかった。

「ミリア、山倉と二人で話したい」

「こんな分からず屋の自己中心的な奴、放っておけばいいのよ！」

「そんなわけにもいかないだろ？僕は今でも、山倉が大好きなんだから」

僕の言い分に納得していないのか、ミリアは不満げに顔を膨らませる。

そして次の瞬間には、その場から姿を消えていた。

改めて山倉を視察すると、耳を塞いたままうつむいていた。地面へと大量の水滴が、こぼれ落ちている。

「山倉、顔を上げて」

無理やりに顔を上げさせると、顔はぐしゃぐしゃだった。頬には滝のような跡を残し、徐々に幅が広がっていく。

「うそつ、つき……鷹野君の、嘘つきい！」

山倉が僕の体を、容赦なく殴打する。僕はそれを黙って受け入れた。

この痛みが山倉の痛みだと、無抵抗に受けることが、懺悔の代わりになればと思った。

十数発ほど殴られて、ようやく山倉の攻撃が止まる。山倉を抱き寄せた僕は、耳元で囁いた。

「ごめんね、嘘について。だけど、別に山倉が嫌いになったわけじゃないんだ。ミリアの言う通り、僕は一度死んだ身なんだ。だからもう、死者の世界へといかなきゃ」

「嫌だよ。鷹野君と一緒にゃなきゃ嫌だ！」

「僕は死んだ。山倉はまだ生きてる。だから二人一緒にはいられない

い。分かるだろ？」

「だったらわたしも死ぬ。わたしも死ねば一緒にいられるんでしょ！」

潤んだ瞳を、僕の肩へとなすりつけて、懇願してくる。

「山倉、それは無理だ」

「どうして！」

「詳しくは言えない。だけど山倉が自殺したら、僕とは一生会えなくなる」

「そ、そんな……じゃあもう鷹野君とは二度と会えないってこと！？」

僕はうつむきながら、横に首を振った。

「山倉が天寿を全うすれば、また会えるさ」

「つまり、一生懸命に生きて、その上で死んだらってこと？」

「そうだよ。今までどおりに生きていれば、山倉は天国にいけるんだから」

微笑みつつ、山倉との間合いを広げようとする。だが。

「いやだ、やっぱりいやだよ。お願いだから行かないで。お願いだから！」

足を引きずりながら再び間合いを縮め、泣きついてくる山倉。

涙が流れそうなのを、必死でこらえる。

一緒に泣いてはいけない。僕が泣いてしまえば、山倉はもう笑えなくなる。そんな気がした。

「微笑んでくれるだけでいい！ 他には何もいらないよお！ わがままだって言わないから！ だから、だからお願い！ 信也君にそばにいてほしいの！」

「無理なんだ、分かってくれ」

「どうしてよ！ わたしを一人にするつもりなの！？ そんなにわたしを一人ぼっちにしたいんだ！？」

やけになってまくし立てる山倉に、僕は首を横に振った。

「山倉は一人じゃない」

両肩をつかみ、山倉を押さえ込む。震えていた山倉の体が、次第に治まっていった。

「わたしが……一人じゃない？」

「三村も吉沢も、きっと山倉の力になってくれる。母さんにも山倉を頼むってお願いしておいたから。山倉は僕がいなくても、もう一人じゃないんだ」

「だけど……」

「僕だって、山倉と一緒にいたい。だからって、山倉が死ぬのを望むのは違うと思う。山倉には生きていてほしい。僕にとって、最愛の女性だからこそね」

少しの間、山倉は考え込んでいた。鼻をすすりながら、か細い声で、

「うん……分かった」

そう、言ってくれた。

山倉の頭を抱き寄せて、僕は目頭が熱くなるのを感じていた。

「それじゃあ、もう行くよ」

僕は立ち上がると、山倉に背を向けた。今度は山倉も追ってこない。代わりに……。

「待つて、待つてよ……」

すすり泣く山倉の声が、聞こえてくる。

振り向くと、山倉は頬を震わせながら、無理やりに微笑んでいた。「なにか、忘れてるんじゃない？」

「えっ？」

「誕生日プレゼント。もらってないよ？」

喉の奥で違和感が沸き起こり、胸が圧迫される。

山倉の元へと引き返し、膝を地面へとつける。山倉が目を閉じて、僕の元へとそつと顔を近づけた。

震える手を無理やりに押さえつけて、唇を合わせる。触れた瞬間に伝わる、柔らかい感触が、一瞬にして僕の意識を支配していた。

どれだけ時間がたったか、僕には分からなかった。山倉から、唇

が離れていく。

「ありがとう鷹野君。今日という日を、絶対に忘れないから……」
「こっちこそ……ごめん」

謝る僕の肩を、山倉が思い切り叩く。

「いてっ！」

「寂しそうな顔しないでよ！ こっちまで悲しくなっちゃうじゃない！」

「ご、ごめん」

微笑んでいる山倉の瞳から、再び涙があふれ始めた。ボロボロとめどなく流れるそれを、僕は直視できなかった。

「鷹野君、元気でね……」

「元気でねって、死んでるんだけどね」

「フフツ、そうだったね。でも、元気でいてね。わたしを忘れちゃだめだよ？」

「当たり前だろ？ 絶対に忘れない。山倉がいつか来る日まで、ずっと待つてるから」

「うん」

僕が手を差し出すと、山倉は快くその手を握ってくれた。妙に暖かいのは、山倉が生きているせいなのか、それとも……。

「それじゃあ行くよ！ できるだけ長く生きてよ。僕に分までね」
「分かってる。次に会うときには、よばよばのお婆ちゃんになるから、覚悟しててよね！」

こんな冗談を飛ばせるなら、もう心配ないだろう。ミリアの危惧も無事、解決したといっても、過言ではないはずだ。

「それじゃあ！」

「うん！」

お互いに手を振ってから、僕はその場から走り去った。

もう振り返ることはない。なぜなら、僕の瞳も限界だったからだ。

10月28日(4)

「お疲れ様！」

走っている僕の服をつかみ、動きを止めさせる。その手の持ち主は、ミリアだった。

「うわっ、すごい涙。ほら、ハンカチ貸してあげる」

無言でミリアから、ハンカチを受け取り瞳にあてる。顔全体に広がった水分をくまなく拭くと、大きく深呼吸をした。

辺りを見回すと、赤く巨大な扉のある中界の入り口だった。辺りにミリア以外の人影はない。

「よかったね！ 優美ちゃん助かって」

ミリアはまるで、自分のことのように、はしゃいでいた。はつらつとした笑顔に、ハンカチを返す。

「山倉、平気だよね？」

自分の仮定を認めて欲しくて、尋ねる。

今までのミリアならきつと、わたしには関係のない話で終わらせてただろう。だが、

「きつと大丈夫だよ。上手な説得だったし、最後には微笑んでたしね」

望む答えを出してくれた。ありがとうミリア お礼を言う前に、ミリアが嫌らしげな笑みを浮かべる。

「キスだって、見てることちが赤面しちゃったわ」

「なっ、もしかして……見てた？」

「もちろんよ。中界の姿に戻っただけで、あの場所にはずっといたからね」

腰に手をやり、勝ち誇るミリアの前で、僕はがっくりと膝を落とした。響き渡る高笑い、耳が痛い。

「でもさ、これで一件落着でしょ？」

「そうだね。安心して天界へへ行けるよ」

「うん、これからは楽しい毎日……ではないかもしれないけど」
「ないの!？」

鋭い僕のツツコミを、愛想笑いでかわすミリア。

「まあ、それなりに楽しいはずだよ。よかつたら案内人の仕事にも本当につけば？」

「うーん、どうしようか……」

「迎えに行った場所に優美ちゃんがいれば、また優美ちゃんの姿が拝めるかもよ？　わたしが頼めば、すぐに雇ってもらえるんだけどなあ……」

ミリアの囁きは、僕に選択の余地を与えなかった。

「お願いするよ。ミリア」

「お願いします、ミリア様……でしょ？」

「くっ……」

お互いの顔を見合わせ、二人で笑い出す。

無事に助け終わった安堵感から、頬が緩むのを抑えられなかった。

「じゃあ、いこっか！」

僕の手を引き、ミリアは門をくぐろうとする。そこで僕は足を止めた。

「ちよつと待った。最近ミリアのようすが変だったけど、もう大丈夫なのか？」

「えっ？　ああ、うん。もう済んだから」

「済んだ？　いったい何があったんだよ？　だいたい、僕のサポーターなんてほとんどしてないじゃないか。一人で何やってたんだ？」

いたずらを成功させた子どものように、にやけた笑みでミリアが答える。

「教えてあげなあい！」

「な、なんだよそれ！　教えてくれたっていいだろ！」

「フツ、簡単に言うとな、わたしもこの一週間、色々あったのよ！」

簡単と言っても、さっぱり意味がわからなかった。

「さあ、行こつ！ エンマ様が待ってる」

「ああ……」

僕は再び巨大な門をくぐり、エンマ様と対峙した。今日も機嫌は良いらしく、青くてひよる長い体は変わっていない。

僕のすぐそばには、事務所で会ったミリアの同僚　カルバドスがいた。

「お疲れ様。よくやったな。鷹野信也君」

「はい！　ありがとうございます！」

お辞儀をすると、エンマ様は拍手をしてくれた。そばにいたミリアとカルバドスが、間を置かず続けてくれる。

「んじゃミリア、すっかり天界へと案内してやるんだぞ」

「言われなくても分かってるわよ！　それじゃあ行きましようか！」
ミリアが元気よく声を上げた。

「それではエンマ様、今回は本当にありがとうございました」

「疲れただろうから、ゆっくり休むといい。死後の世界を楽しむのは、その後も遅くないだろう」

「ええ、そうですね。そうします」

これから先は、僕も死後の世界の住人なのだ。慌てる必要はまったくない。

エンマ様とカルバドスに頭を下げてから、僕はミリアと一緒に部屋の外へと出た。

上方へと伸びる階段の先には、輝く光に包まれた空間が、僕の来訪を心待ちにしているように見えた。

その階段の途中で、ミリアが思い出したように手を打つ。

「そうそう、エンマ様が今回の信也君の行動に、すごい感激しててね。何かご褒美をくれるって言ってたよ！」

「えっ？　本当に？」

「本当だよ！　一年に一回だけ、特別になにかを許可してくれるって言うてた。まったく幸せものだねえ。天界で信也君みたいな、優遇を受けてる人なんていないんだからね？」

「ご褒美とはなんだろうか？ 一年に一回だけでも生き返らせてくれれば、ありがたいのだが……。」

「わたしもね、今回の信也君の行動とか、いろいろな面で感動したり、得るものがあつたから。晩御飯でも奢ってあげるよ！」

「おつ、サンキュ！ なんでもいいのか？」

何度も頷くミリアに、僕は忍び笑いをしながら、望みのメニューを告げた。

「じゃあ、おでんにしようかな」

「んぎゃっ！」

先ほどまで意気揚々としていたミリアの顔色が、顕著に曇つていった。

「なんでもいいって言ったのはミリアだからな。約束は守ってくれよ」

「ううう、うう！」

ふくれっ面でむくれるミリアを、爽快に笑い飛ばした。

その頃になってようやく、実感がわいてくる。

そうだ。山倉を救つたんだ。本来なら分かるはずのない、未来の山倉の運命をこの手で打ち破つたんだ。

「どうか、お幸せに」

ミリアにも聞こえないほどの小声だが、山倉には確かに伝わった
そんな気がした。

エピソード

「それじゃあね、優美」

「うん、また明日！」

親友の果歩と別れて、わたしは家路へとついた。雲ひとつない赤い空から、太陽が照らしている。

わたしは歩みを駆け足へと変えて、家へと向かった。

といつても、別に見たいテレビ番組があるわけではない。

今日はわたしの誕生日だった。そして、最愛の人とのつながりを感じられる、特別な一日なのだ。

そうなると、必然的に三年前の事件を思い出す。

それは、一度死んだ鷹野君が、わたしを救うために生き返るといふ、誰もが信じがたい事件だった。

サーカス会場の爆発後、鷹野君が消えた広場には、人が大量にあふれていた。

わたしの周りを大量の人間が囲み、様態を確認してから、病院へと連れて行かれた。

死者は一名。怪我人はわたしだけという、爆弾が爆発したにしては奇跡的な結果。その一端を担ったのが、他ならぬ鷹野君だった。

病院から退院したわたしは、すぐにいろんな人物へと、鷹野君について尋ね回った。

だが、二人を除いて全員が、鷹野君は先週の土曜日に亡くなったという返答だった。

返答が違った二人とは、三村君と鷹野君のお母さんだ。

三村君は土曜日に、鷹野君が死んだと知っていた。だが、告白しようという決心を、サーカス前に鷹野君からもらったという。

鷹野君のお母さんも同様に、土曜日の結果を知りつつも、修学旅行前にわたしをお願いすると鷹野君に懇願されたいらしい。

二人とも夢でも見たのだと考えていたらしいが、わたしが事情を

説明すると、納得してくれた。

あれから三年、わたしは鷹野君の家で暮らしている。本当の家は何度か訪ねたけど、ある日突然、家の鍵を変えられていた。

それがお母さんの出した結論だと、すぐに察したわたしは、それ以降、実母の家には近づかなくなった。

「ただいまあ！」

「おう、お帰り、早かったな」

家に帰ると、鷹野君のお母さんがわたしを迎えてくれた。鷹野君との約束どおり、わたしの面倒を見てくれているのだ。

「雪絵さん、今日の仕事は？」

雪絵さん　それが鷹野君のお母さんの名前で、わたしの呼び名だった。

お母さんという言葉は、あの大嫌いな実母を思い出してしまい、雪絵さんを憎んでしまいそうで使いたくなかったのだ。

「サボった。大事な娘の誕生日だからな」

「もう、また？」

「大丈夫。こう見えても、仕事場では頼りにされてんだ。クビになつたりしないさ」

そういう問題でもない気がするけど、あえてわたしは黙っていた。機嫌のいい雪絵さんの気分を、逆なでしたくはない。

「ご飯までもう少しあるから、待ってる」

「うん、勉強でもして待ってるよ」

階段を登り、自分の部屋へと入る。間取りは鷹野君の部屋とそんなに変わらない。

この部屋の存在が、わたしに鷹野君の存在を近くに感じさせてくれる。

「さてと、今日も頑張ろうかな！」

教科書とノートを取り出し、今まさに勉強を始めようとした、その時だった。

インターホンの高い呼び出し音が、家の中へと響き渡る。

わたしはすぐに玄関へと向かおうとするのを、ぐっと堪えた。それが今しがた現れた来客との約束なのだ。

「優美！ 美利亞ちゃんだぞ！」

「はぁーい！」

雪絵さんに呼ばれて、わたしは駆け足で階段を下りていった。

すでに雪絵さんの姿は消えている。その代わりに玄関先で、わたしに手を振っている女性がいた。

「お久しぶり！ 優美ちゃん！」

「うん、一年ぶりだね、ミリア」

そこにいた少女は、爆発事故の後に姿を現し、中界と鷹野君の運命を語った、案内人ミリア＝ミスだった。

再会したのは二年前の今日　つまり、鷹野君が死んだ一年後の、わたしの誕生日だ。

それ以降、わたしの誕生日になると、ミリアはここへ来てくれる。わたしにとって最高の、心の支えを持って　。

「じゃあ、はいっ、これ、今年の分ね！」

「うん、ありがとう！ あ、鷹野君は元気ですか？」

「もちろんよ。わたし達に病気なんてないんだから。今頃は三年前のビデオでも見てるんじゃない？」

それだけで、ビデオの大まかな内容は想像できた。そんなビデオがあるなら、わたしも少し興味がある。

「そういえばこの間、優美ちゃんを見たって言ってたよ」

「えっ？　どこで？」

「大学病院の通路を歩いているところ。たまたま信也君が、死んだ人の迎えに行った時に見たんだって。昔より断然かわいくなっただけ、のろけられちゃったよ」

ミリアがウインクを飛ばしてきた。頬着々と、熱が集まってくるのが自分でも分かる。

「どう？　勉学の調子は？　医者になるって楽しいんでしょ？」
あれ以来わたしは勉強に精を出し、医者を目指していた。

あまり勉強が得意でなかったわたしは、果歩の協力もあって、浪人生をどうにか一年で抑えることに成功した。

今は医学部の一年生。ようやくスタート地点に立つことができた。医者を目指した理由はたった一つ、シンプルなものだ。

「自分のように大事な人を失う悲しさを、だれにも味わって欲しくないなんて、普通言えないよ？　すごいよねえ、優美ちゃんって」

「あんなにつらい思いを味わうのは、わたしだけで十分だから。他の人にはできるだけ幸せになって欲しい。少しでもその助けになりたい。ただ、それだけだよ」

「簡単に言ってるけど、それってすごいと思うよ」

わたしは照れ隠しに、頭を掻いた。ミリアがフツと小さく微笑む。

「それじゃ、もう行くね！　なにか伝えておきたいことは？」

少し考えた後、顔を熱く燃やしながら、ボソボソと答える。

「これからずっと、わたしと雪絵さんを見守っていてください……って伝えておいて」

「今年もまた同じじゃない。今回は『わたしのハートはいつだってあなたのものよ』とかどう？」

まったく照れずに言えるミリアは、ある意味すごい。鈍感なだけかもしれないけど。

「じゃ、じゃあそれも伝えておいて」

「了解！　それじゃあまた一年後にね！」

「うん、ミリアも頑張ってるね！」

「ありがとう！　じゃあね！」

手を振りながらミリアは去っていった。手元に残ったのは一通の手紙。いつもと同じ封筒には、住所も名前も書かれていない。

これが、一年に一度だけ訪れる、誰にも想像がつかないわたしの幸せだ。

その手紙を自分の部屋へと持っていくと、ベッドの上に身を投げ出し、封を開けた。

内容はわかっている。毎年同じだから。
だけど、この手紙がわたしの支えになっている事実には違いない。
封筒の中には一枚の手紙。その手紙には鷹野君の筆跡で一言、こ
う書かれていた。

『ハッピーバースデー 山倉』

エピローグ（後書き）

『未来のキミを救いたい 鷹野信也編』を最後まで読んでいただき、ありがとうございます。水鏡樹です。

では早速ですが、鷹野信也編だけを先に呼んだ方へ。

ミリアの涙の訳は？ 信也と一緒に居ない時、ミリアは何をしていたのか？

鷹野信也編を読み終わり、それらに興味が生まれた方は、ぜひミリアⅡミリス編も読まれてください。

お互いの行動や細かい思考のすれ違いなど、鷹野信也編を読んだ後でないと分からない楽しみがあると思います。

そして鷹野信也編と同時に読んでいる方、鷹野信也編を読んでからミリアⅡミリス編を読まれた方。

長い時間をお付き合いいただき、本当に感謝の限りです。これにて未来のキミを救いたいとは完結です。

二つの話をあわせると、400字詰め原稿用紙700枚を越えていたりします。そんな長編小説を最後まで読んでいただいた皆様には、本当に頭の下がる想いです。

長い間お付き合いくださって、本当にありがとうございました。

また、全ての読者の方へ。感想などありましたら、ぜひお聞かせください。その際はこういった読み方をしたか（鷹野信也編を先に読んだ、両方同時に読んだなど）も併記していただければ幸いです。それでは、また違う作品で

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5026b/>

未来のキミを救いたい 鷹野信也編

2010年10月8日14時04分発行